# 日本民俗学会第72回年会愛知

食と環境一魚食文化による里海の保全と実践活動一

# 研究発表要旨集



2020年10月3日(土)~11日(日) オンライン開催(年会ウェブサイト)

## 琉球弧の民俗文化を読む!!

1999 在度車恩納實停當受當

00/01 ISBN978-4-947667-63-2 C3021

#### 沖縄民俗文化論 --祭祀・信仰・御嶽

**湧上元雄著** 戦後の沖縄民俗学黎明期の旗手による珠玉の一巻全集 第1章 久高島・イザイホー 第2章 年中祭祀 第3章

第2章 年中祭祀 第5章 エッセイ他 第3章 民間信仰 第4章 御嶽祭祀と伝承

菊判、上製、函入 584頁 定価:本体 15,000 円+税

#### 04/09 ISBN978-4-89805-104-9 C1039 **HATERUMA**

#### 波照間:南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相

コルネリウス・アウエハント著/中鉢良護訳/静子・アウエハント、比嘉政夫監修 レヴィ・ストロースと柳田国男を師とし、名著『鰻絵』で知られるオランダ構造人類学の 旗手アウエハントが 1965 年~ 1975 年の調査をもとに、1985 年に英語版で刊行した名 著の完全邦訳版。波照間島の社会と宗教に内在する構造原理とは何かを長期のフィー ドワークと言語分析をもとに追求した他の追随を許さない本格的な島嶼民族誌。

A5、600頁 定価:本体12,000円+税

## 自然観の人類学 00/09 ISBN978-4-947667-65-6 c3039

松井 健編 人間と自然との関わりを新しい視点から解析し、幾つもの自然のあり様を 提起した新進気鋭の 12 名の論文集。 西谷 大/菅 豊/篠原 徹窪田幸子/永ノ尾信悟/菅原和孝/高倉浩樹

02/12 ISBN978-4-947667-87-7 C3039

## 開発と環境の文化学一沖縄地域社会変動の諸契機

松井 健編 沖縄での開発と環境のせめぎあいの構図を、その歴史的背景と民衆の現実 生活を人類学・社会学の視点から分析した若手研究者による論文集。 松井 健/藤原昌樹/家中 茂/松村正治/小松かおり

高山佳子/荒木晴香/関 礼子/佐治 靖

A5、上製 380頁 定価:本体8,500円+税

がじゅまるブックス③ 12/06 ISBN978-4-89805-162-7 CO321

#### 琉球王権の源流一琉球国王の出自

谷川健一編 琉球第一尚氏王朝成立のナゾに挑んだ折口信夫が『南島論叢』(昭和 12) に発表した論稿に、谷川健一が近年の新しい発見と知見をもとに呼応する!! 折口信夫の論考は読みやすい現代文に改めた。 108頁 定価:本体 900 円+税

がじゅまるブックス(3)

ISBN978-4-89805-203-7 C1339

#### キジムナー考 一木の精が家の神になる

がじゅまるブックス⑭

ISBN978-4-89805-215-0 C0339

## 八重山民話の世界観

**石垣 繁著** 豊饒な民話から見えてくる島の生活とその世界観を探る A5、118 頁 定価:本体 1,000 円+税

沖縄学術研究双書①

18/05 ISBN978-4-89805-197-9 C0339

## おきなわの民俗探訪ー島と人と生活と

沖縄学術研究双書⑫

ISBN978-4-89805-208-2 C0339

#### **八重山の御嶽** --自然と文化

李 春子著 御嶽とその周辺の森の文化の危機をどの様にして克服していくのか、その 実像を訪ねたオールカラーのガイドブック。 A5、272頁 定価:本体2,800円+税

沖縄学術研究双書(3)

ISBN978-4-89805-212-9 C1325

#### 近世琉球の風水と集落景観

陳 碧霞著 琉球村落の景観を風水から読み解く

, r v 。 A5、236 頁 定価:本体 5,000 円+税 ISBN978-4-89805-219-8 C0339

#### 沖縄学術研究双書(4)

トカラ列島の民話風土記 下野敏見著 琉球狐最北端の島々の今に生きている民話から島と人々の生活を描き出す! A5、270頁 定価:本体2,500円+税

琉球弧叢書③

ISBN978-4-89805-201-3 C1339

#### **八重山・祭りの源流** ―シチとプール・キツガン

大城公男著 八重山の多彩な祭りの核をなすシチとプール・キツガンの相関関係と歴史 的な流れを解明し、祭りの源流を明らかにする。A5、350頁 定価:本体 5,800 円+税

琉球弧叢書②

TSBN978-4-89805-204-4 C1339

#### 八重山離島の葬送儀礼

古谷野洋子著 過疎に泣く八重山の島々の葬送儀礼の変容と課題を追う。

A5、364頁 定価:本体5.800円+税

琉球弧叢書⑤

98/09 ISBN978-4-947667-52-6 C1339

#### 文化学の脱=構築一琉球弧からの視座

松井 健著 琉球文化と対峙して、文化人類学を越える知的冒険。野口武徳・伊良波盛男・ 又吉栄喜・目取真後・柳宗悦等を人類学の視点から分析し、文化学の理論的再構築に向 けて鋭く問題提起する。 238 頁 定価:本体 3.800 円+税

02/02 ISBN978-4-947667-79-3 C1339

#### 沖縄文化の拡がりと変貌

渡邊欣雄著 沖縄でのフィールドワーク 30 年を通し、民衆生活史を全アジア的視点から捉えた、独自の沖縄文化論。沖縄東海岸の東村の民俗と祭礼の変遷を通して文化の変貌をとらえていこうとする試みである。 350頁 定価:本体 5.800 円+税

琉球弧叢書⑩

05/03 ISBN978-4-89805-106-1 C1021

#### 風水・暦・陰陽師 ―中国文化の辺縁としての沖縄

三浦國雄著 中国の民衆文化としての風水や易占等が、いかにして沖縄の文化に取り入 れられていったかを、久米島吉浜家文書・北谷金良宗邦文書の分析を通して鮮やかに描き出す。 250頁 定価:本体 4,500 円+税

05/11 ISBN978-4-89805-114-6 C1021

## 沖縄の民具と生活ー沖縄民俗誌Ⅰ

上江州 均著 生活と密接な関係を持つ民具を通して、沖縄の人々の歴史や文化や生活 習慣などを多角的に論究した好著。

第36回(2008年度)伊波普猷賞受賞

298頁 定価:本体4,800円+税

琉球弧叢書(3)

07/01 ISBN978-4-89805-123-8 C1321

#### 近世八重山の民衆生活史一石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク

得能壽美著 八重山古文書の解読を通して、礁湖を舞台とした通耕を軸とする近世八重山の島人の生活を活写。人頭税における栗納を論究。 第 27 回(2005 年度)比嘉春潮賞受賞 316 頁 定価:本体 4,800 円+税

琉球弧叢書⑭

07/02 ISBN978-4-89805-124-5 C1339

#### 久米島の民俗文化一沖縄民俗誌Ⅱ

上江洲 均著 久米島の墓制あるいは島人の姓名、そして植物と島人との関わり等を、豊富な調査によって浮かび上がらせた島嶼民俗学の成果。 第36回(2008年度)伊波普猷賞受賞 244頁 定価:本体3,800円+税

08/02 ISBN978-4-89805-127-6 C1339

## 沖縄の祭りと年中行事一沖縄民俗誌皿

上江洲 均著 地域を映す鏡としての祭りと年中行事を分類・再構成し比較検討して、 行事本来の意味や、分布状況などを解明。 第36回(2008年度)伊波普猷賞受賞 248 頁 定価:本体3,800 円+税

琉球弧叢書(7)

08/06 ISBN978-4-89805-128-3 C1321

## 琉球仏教史の研究

知名定寛著 琉球の仏教の態様を綿密に分析してその姿を明らかにし、500 年前の琉球が仏教王国であったことを論証、琉球史研究の未踏の領域を切り開いた著者畢生の書。 460頁 定価:本体6,400円+税

琉球弧叢書②

10/04 ISBN978-4-89805-143-6 C1339

#### **奄美沖縄の火葬と葬墓制** ―変容と持続

加藤正春著 近代以降に外部から持ち込まれた火素という葬法が、旧来の伝統的葬法の中にとりいれられていく過程を明らかにする。

第32回金城朝永賞受賞

342頁 定価:本体5,600円+税

10/06 ISBN978-4-89805-144-3 C1339

#### 沖縄の親族・信仰・祭祀ー社会人類学の視座から 比嘉政夫著 綿密なフィールドワークをもとに全アジア的視点から沖縄の親族構造を明

<del>いる以入国 では、</del> らかにした遺稿論文集。 302頁 定価:本体4,800円+税

琉球弧叢書②

11/08 ISBN978-4-89805-155-9 C1339

## 八重山 鳩間島民俗誌

大城公男著 そこに生れ育った者ならではの眼から、瑠璃色の八重山の海に浮かぶ星屑のような人口 60 人の小さな島に住む人々の生業、芸能、祭祀などを詳細に記録する。 2012 年度日本地名研究所風土文化研究賞受賞 438 頁 定価:本体 6,400 円+税

琉球弧叢書窓

12/08 ISBN978-4-89805-160-3 C1314

## 沖縄社会とその宗教世界ー外来宗教・スピリチュアリティ・地域振興

古野航一書 急速に都市化していく沖縄社会の中に外来の宗教がどの様な形で入りこみ、 土着化してきたのかを詳細に分析。とりあげられた外来宗教は、真宗大谷派真教寺/真宗 光明団/立正佼成会/創価学会/霊波之光教会/沖縄バプテスト連盟/カトリック教会。 A5、376頁 定価:本体6,000円+税

琉球弧叢書29

16/09 ISBN978-4-89805-182-5 C1339

### サンゴ礁域に生きる海人一琉球の海の生態民族学

秋道智彌著 サンゴ礁という特別な生態系の中で生きる人々の自然と生活との対話を豊富なデータをもとに描き出した海の民族学。 第44回(2016年度)伊波普猷賞受賞

376 頁 定価:本体 6,400 円+税

沖縄でのフィールド・ワーク 知の拠点!!

 $AM10:00 \sim PM7:00$ 定休日:日曜・祝祭日



## 琉球弧文献/古書と出版の知の密林 有限会社榕樹書林

〒901-2211 沖縄県宜野湾市宜野湾 3-2-2 TEL (098) 893-4076 / FAX (098) 893-6708 E-mail: gajumaru@chive.ocn.ne.jp http://gajumarubook.jp/

書店での御注文は「地方小経由で」とお申し出下さい。 直接注文大歓迎!! 3,000 円以上送料サービス。



## 日本民俗学会 第72回年会 愛知

食と環境-魚食文化による里海の保全と実践活動-

## 研究発表要旨集

主 催: 一般社団法人日本民俗学会

協 力: 愛知大学

期 日: 2020年10月3日(土)~11日(日) 会 場: オンライン開催(年会ウェブサイト)

#### 目次

日程	1
シンポジウム 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
シンポジウム 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
研究発表題目一覧	15
研究発表要旨	19

#### 日程

#### ●10月3日(土)

9:30~12:30 シンポジウム 1

「食と環境一魚食文化による里海の保全と実践活動一」

13:30~17:00 シンポジウム 2

「伊勢湾・三河湾をめぐる民俗―漁法と魚食、そして、それから見えるもの―」

※両シンポジウムとも遠隔会議システム(Zoom)を利用したオンライン開催(ライブ配信)です。日本民俗学会会員限定。

#### ●10月4日(日)

9:00~ 研究発表動画公開

- ※発表者が発表動画を Youtube 上にアップロードし、コメント欄を利用して質疑応答を行うオンデマンド形式で実施します。動画へのリンクと発表資料のダウンロードページは、年会ウェッブサイト内に設置。
- ※研究発表の質疑については次のとおり受け付けます。

10月7日(水) 24:00 質問書き込み締め切り

10月9日(金) 24:00 回答書き込み締め切り

10月11日(日) 24:00 動画公開終了

#### 日本民俗学会 第72回年会 愛知 参加用パスワード

- ※年会ウェブサイト (https://www.nenkai72.fsjnet.jp/toppage) でこのパスワードを入力し、 会員専用ページに進んでシンポジウムと研究発表にご参加ください。
- ※このパスワードは日本民俗学会会員限定のものですので、会員以外に知らせることのない ようお願いいたします。

#### シンポジウム1

## 「食と環境一魚食文化による里海の保全と実践活動一」

趣旨説明 印南敏秀(愛知大学)

パネリスト 鷲尾圭司 (水産大学校)

野林厚志 (国立民族学博物館)

越智信也(神奈川大学日本常民文化研究所)

コメンテーター 橋村 修 (東京学芸大学)

#### ■登壇者プロフィール

#### 印南敏秀 (愛知大学教授)

愛媛県新居浜市の海辺に生まれる。物質文化・海里山文化・食文化・入浴文化などに関する調査・研究に従事している。著書に、『水の生活誌』(2002・八坂書房)・『里海の生活誌:文化資源としての藻と松』(2010・みずのわ出版)など。

#### 鷲尾圭司(もと水産大学校代表・日本伝統食品研究会会長)

海の環境問題と漁業を専門として沿岸漁業の技術指導や魚食普及活動を通した人材育成に従 事。趣味は潜水と食文化。日本伝統食品研究会会長、里海づくり研究会議理事など。

著書:『明石海峡魚景色』(1989・長征社)・『ギョギョ図鑑』(1993・朝日新聞社)など。

#### 野林厚志(国立民族学博物館教授・総合研究大学院大学教授)

専門は人類学、民族考古学、フォルモサ研究。最近では現生人類の特徴としての道具作りと料理に焦点をあてた調査、研究をおこなっている。主なフィールド調査地は台湾。主な編著書に『肉食行為の研究』(2018・平凡社)。

#### 越智信也(神奈川大学日本常民文化研究所・国際日本学部非常勤講師)

日本常民文化研究所職員として、中央水産研究所漁業制度資料の整理に従事してきた。歴史と 民俗の双方に関連する文献の解読が現在の課題。共著『魚食文化の系譜』(2009・雄山閣)。

#### 橋村 修(東京学芸大学准教授)

鹿児島の海辺の近くで魚料理や釣りに親しみながら育ち、大学生時代に中世近世以降の漁場利用の歴史に関心を持つ。ここ20年は、国内外のシイラ利用、ラオスの河川漁、有明海のノリ漁やトサカノリ採取(潜水)等を調査し、魚の評価をめぐる地域間の比較史、魚の旬や食べごろなどについて研究している。主な著書に『漁場利用の社会史』(2009・人文書院)。

#### 「食と環境一魚食文化による里海の保全と実践活動一」

#### 趣旨

日本の魚食文化は、古くは縄文時代にさかのぼることができる。日本には貝塚が多数みられ、漁業技術も発達していたと発掘成果から読み解くことができる。やがて仏教思想が伝わって肉食が禁止され、神饌は魚介類が中心となっていった。平安時代の『延喜式』の記録では、西日本を中心に多くの魚介類と魚介類の加工品が都に届けられ、近世には魚介類は贈答品にも使われ、『毛吹草』(1638)には諸国名物の魚介類と魚介類の加工品が紹介されている。同書には諸国名物の農産物も紹介するが、京野菜の産地である山城国を除くと圧倒的に魚介類が多い。魚介類の加工品が多いのはひとえに肉より保存が容易であったことに起因し、その伝統は現代にも続いている。このように日本人にとって魚食文化は重要な役割を果たしてきたにもかかわらず、近年、魚食文化の評価があまり高いとはいえない。

一つには日本の魚食文化についての総合的な調査研究が少ない。話題になるのは漁業なら大間のマグロ、食なら回転寿司ぐらいである。その背景にあるのは魚食文化の調査が儀礼食に偏っていたことに他ならない。柳田国男編『海村生活の研究』(1939年)で取り上げられている内容は多岐にわたるが、食は儀礼食が少し登場するにすぎず、古老が伝える儀礼や儀礼食に調査が集中する傾向がみられた。庶民が「生きるために食べた」イワシやイカについて調査されることはなかった。

魚食が盛んな日本は世界最大の漁業国でもあったことを忘れていないだろうか。日本近海で暖流と寒流がぶつかることで栄養豊富な魚介類が豊富にとれ、多くの郷土食が日本各地に生まれた。ところが高度経済成長期の人々の生活の変化や海洋汚染などで海と人の関わりが急速に薄れていった。スーパーマーケットに置かれる魚介類もグローバル化の影響で一年を通じて変化に乏しくなり、旬が感じられなくなった。海外での健康食ブームで魚食が注目され、魚介類の消費量が増大し、養殖魚が増えて効率的で低価格で提供されるようになった。世界の水産資源は漁業技術の発達や乱獲などでもはや限界を超えている。産業資本にとって都合のよい販売方法が、流通や漁業、海の利用のあり方にまで影響を与え始め、魚食が遠く離れた海の環境悪化に直結するようになった。

海がかかえる課題にいち早く気づいたのは高度経済成長期の漁村の人たちであった。漁民は皆、海水汚染や沿岸域の埋め立て、魚の奇形や漁獲量の減少を容易に見聞きし、体験してきたことであった。海に浮かぶ島国に住む日本人は海洋汚染や、それによる漁獲高の減少、魚食文化の衰退は無関心のままであった。また、現在の気象変動による海水温の上昇やマイクロプラスチックゴミなどの海洋汚染などもあり、世界規模で取り組まなければならない。それでも魚食を好む日本人として美味しい魚をこれからも食べ、魚が群れているきれいな里海をながめていたい。そのために市民でもできる活動の一つとして生産性の高い干潟の保全や稚魚がむれる藻場の管理などがある。

現在の日本の伝統的な魚食文化は細々ながらも高度経済成長以後も地域で継承されてきたものである。たとえば、福井のヘシコは成分の科学分析で健康食と認められ、産業化してまちおこし

に貢献しているし、イカナゴのくぎ煮は、養殖魚の餌であったものを漁師料理に学び加工食品にすることで資源保護に役立っている。また、発酵技術の活用で産業廃棄物として捨てていた水産加工品のゴミを魚醤にかえた例もある。このように伝統的な魚食文化を現代社会に蘇らせ、新たな価値を生み出す動きは始まったばかりである。

現在、日本「食」と「環境」は大転換期を迎えている。食と環境のシンポジウムは多いが、より具体的な魚食文化への討論をとおして日本の里海の課題を明確にし、伝統的な生活文化の継承や環境の保全についてどのように実践すればよいのかを見つめなおす機会を作り出したいと考えた。2013年に「和食=日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録された。これは、日本料理が世界的に高く評価されたことによるが、一方で家庭料理や地域食の崩壊をなんとか回避して継承しようとする側面もあった。

伝統的な里海の多様な価値を再評価し、アイデアを出しあい、身近な海里山の原点を見つめなおし、生きるための食や環境を考え、新たな実践につなげてゆくことが必要であり、議論を深めていきたいと考えている。

#### 魚食文化を支え、支えられる里海

鷲尾 圭司(もと水産大学校代表・日本伝統食品研究会会長)

「裸のサル」と称されるホモサピエンスがアフリカを出て世界に広がるとき、海辺に沿って魚食を糧に暮らしの場を拡げていったという仮説がある。陸上だと砂漠であれサバンナであれ、さまざまな肉食獣が生態系の大要を支配しており、華奢でひ弱なヒトが入り込むニッチは少なかった。しかし、海辺の貝やカニなどに触手を伸ばす類人猿は少なく、氷河期や間氷期といった環境変動の大きかった時代ではあっても、温度変化が比較的穏やかな海辺に活路を見いだしたことが人類史の大きな一歩となった可能性があった。アフリカからアラビアの海岸を経て東南アジア、そして日本に至る海辺の道は大きな脳と器用な手先、そして集団形成の社会条件を生かして成し遂げられていったのではないだろうか。島泰三氏が『魚食の人類史』に展開されたストーリーは何か腑に落ちるものがあった。

海の生産力は大きいが、しかし毒を持つものや消化が困難な食物も混在する中にあって、また腐りやすい獲物も多く、食べて生き抜いていくには相当な創意工夫や知恵を伝承していくことが重要だった。わが国の漁村に伝わる暮らしの知恵には、それぞれの風土特性をベースに、周辺地域との相対的な優位性や不利条件に折り合いをつけながら、巧みに、そしてしたたかに生き抜いていく工夫の跡が刻まれていた。川口祐二氏の数ある漁村聞き書きの書にも、多くの知恵が語り継がれてきたことが記されている。

漁村は「磯は地つき、沖は入会い」といわれるように、属地性の高い漁業権制度を基盤にして 存立してきた。前浜を利用する権利を有するとともに、その保全と持続的な管理を義務として守 り伝えてきた。その地域の共同体を維持涵養していくため祭りや年中行事や食文化が伝承されて きた。

そのようなわが国の沿岸域が、高度経済成長と国土開発によって変質し、「瀕死の海」となり、 見捨てられてきた結果、各地に限界漁村や都市に飲み込まれた人工海岸に色分けられていった。 しかし、そんな時代の流れの中にあっても、海の生態系を生かし、持続的に漁業や海浜の利用を 続けて生き残っている地域が散見される。

「里海の保全」は海洋保護区を求める国際社会に対して「わが国ならではの沿岸域との関わり方」として自慢できる取り組みである。それを推進するための諸条件を検討し、現状の制限要因や可能性を議論することは重要である。その時、実践例を参照し、そこに込められたハード、ソフトに加えてハートのあり方を提起したい。

里海との関わりは多様な海の幸と如何に付き合い、如何に食べていくかという食文化を育んできた。どんな魚にも物語があり、それと向き合ってきた人々の苦労や喜びが込められた料理法や催事がある。日本伝統食品研究会に関わっているのは、そうした知恵を記録しておきたいからだ。

国民や沿岸住民においても、里海への関心が薄いことが危惧されている。しかし、コロナ禍を経験し、人びとの考え方や暮らし方の変化する時期に際し、魚食文化という参加しやすいツールを有効に活用し、人びとの属地性や新しい関係性の構築に役立てる試みにはチャンスかも知れない。

## 島嶼社会の魚食と生業複合 一台湾蘭嶼とインドネシアハルマヘラの事例から一

野林 厚志 (国立民族学博物館・総合研究大学院大学)

本発表の目的は、漁労活動を主要な生業活動とする島嶼居住の民族集団の基本的な食生活に関わる民族誌をもとに、魚食にともなう生業複合のありかたと食生活の体系との関係を明らかにすることである。具体的には、台湾の島嶼である蘭嶼島のタオ族とインドネシアのハルマヘラ島のガレラ族の基本的な食生活とそれらの収奪手段となる生業活動の様子を示し、持続的な自然資源の利用にもとづく食生活を体系化させてきたことを議論する。

台湾の蘭嶼島は台湾の南端から東へ約100km 離れた太平洋上に位置する島で、亜熱帯気候に属し、台湾の先住民族であるタオ族の人たちが居住してきた。タオ族の基本的な生業活動はサトイモ、ヤムイモ、サツマイモの根栽農耕、トビウオ、シイラの季節漁、通年的な沿岸魚を主とした漁労活動である。

インドネシアのハルマへラ島は、北マルク州に属する面積約 18,000 平方キロメートルの島である。熱帯気候に属し年間を通じて高温多湿な環境である。本発表であつかうガレラ族は、バナナを主要な作物とする根栽農耕、東南アジア島嶼部と共通する陸稲や雑穀の焼畑栽培を行ってきた。現在では形骸化しているがかつてはサゴヤシ澱粉の採集が行われ、主食として重要な役割を果たしてきた。漁労活動はさんご礁の内海と外海で行われるさまざまな釣漁がカヌーを用いて行われ、近傍の森林における狩猟活動も慣行されてきた。

これらの2つの集団に共通しているのが主食としての根栽の重要性である。第1点は基本的な食料として人々の暮らしを支える存在ということである。複数の種類の根栽の栽培地をわけながら育てることにより、持続的な収穫を可能とする工夫がなされ、蘭嶼島では家畜飼養の飼料としても根栽が重要な役割を果たしていた。第2点は、その分類体系を発達させたり、儀礼活動に欠かせない作物という社会的位置づけが与えられることに代表される文化的な特徴である。一方で食生活全般は、主食である根栽類、重要なタンパク源となる魚類以外の食べものの多様性はそれほどあるとはいえず、むしろ単調な内容であるといってもよい。中華料理やインドネシア料理の影響が調味料や食材の組み合わせを促した部分はあるが、基本的な調理方法は食べやすいサイズに切る程度の下ごしらえをしたうえで、炊く、ゆでる、焼く、揚げるという単純なものが日常的な食事で採用されている。

同時に、都市部から一定の距離にあるという立地の共通した特徴は、漁労活動が集団をこえた商品化や商業活動、交易と結びつくことを促してはこなかった。結果として、一部の観光化の影響はあるものの、土地の慣習的な漁労活動を大きく変容させることにはなっておらず、魚食を支えていくための海洋資源の利用は持続的な傾向を見せている。獲得する海産資源が集団や地域をこえてやりとりされていくか否かは、当たり前のことではあるが、地域の自然環境に少なからぬ影響を与えていくことになる。

#### 料理書の形成と魚食文化

#### 越智 信也(神奈川大学日本常民文化研究所)

日本料理は現在、固有の食文化として国際的にも注目され、2013年にはユネスコ無形文化遺産に登録された。しかし、その形成過程や特質についてはさまざまな見方があり、論者によって一様ではない。

一方、日本料理を代表する「すし、てんぷら、さしみ」等の料理が、概ね地域によって異なる 魚介類を用いたものであること、それらが黒潮や親潮、対馬海流やリマン海流に洗われた、複雑 で多様な、長い海岸線という地理的条件によってもたらされたものであることについては異論の ないところであろう。

これらの特質は、地方色の豊かな魚食の風習を生んだ。今日私たちが「日本料理」と呼ぶものは、そのような地方食を基盤に、流通の中心都市として歴史的変遷をみる京都、大坂、江戸の厨事の担当者たちによって、長い実践を経て洗練された末に形成されたものである。

本報告では、日本料理の形成において一定の役割を果たした「料理書」の変遷を概観しつつ、 料理という技術の伝受における、口頭伝承とテキストの役割について考えてみようと思う。

料理書として最古のものとみられるのは、鎌倉時代の後期に成立した「厨事類記」である。古代国家の貢納制度によって、諸国の水産加工品が京都に集められた。それらの食材を用いて、朝廷の日常の食事をつかさどった大膳職・内膳寮の官人たちは、儀式料理を滞りなく司ることも求められた。上級官人の任官等に際して行われる「大饗」と呼ばれる饗応の場においては、もっぱら料理の様式性が求められ、その知識の淵源は中国にあった。平安時代の後半期以降には、厨事はもっぱら御厨子所、進物所、蔵人所等の「所々」と称された官が担うようになり、新たに編成された供御人を介して、多様な食材が流入するようになった。禅宗の影響による精進料理の普及もあって、出汁文化をはじめ、前代に比べて格段に工夫が凝らされるようになったものの、依然様式重視の傾向は残った。「厨事類記」の記述の大半は、儀式における有職故実である。

室町時代後期になると、「四条流庖丁書」をはじめとした料理伝書が多数作成された。新たに京都の政治舞台において主役を務めるようになった武士たちが、儀式料理をつかさどる際にその知識の源を平安時代以来の公家の厨事伝承に求め、厨事を担った四条家等に伝授された際に作成されている。「四条流庖丁書」の冒頭には、儀式料理には欠かせない庖丁式が詳細に記されているものの、後半の記述の大半が食材や料理法、調理に際しての留意点によってしめられており、鎌倉期の「厨事類記」とは性格が大きく異なっている。室町期に書かれた多くの料理伝書は、特定の家に相伝されていた料理技術を、当家あるいは他家の人間に伝える際に作成されており、「口伝」の語が散りばめられているという特徴がある。「厨事類記」には、そのような口頭伝承に関わる記述が少ないのは、料理技術の伝承ではなく、儀式料理に際しての知識の伝承を目的に作成されたものだったからである。

それにしても、室町期の伝書に記された「口伝」の語の後に、当の「口伝」の内容が詳細に記されていることはほとんどなく、一体「口伝」とのみ記すことにどのような意味があったのだろうか。

近世以降の料理書を代表する「料理物語」は寛永20年に刊本として出版されたものである。

料理の食材、料理名、料理法について詳細に記されており、「口伝」の語は散見されるものの、室町期の伝書と比べると圧倒的に少ない。「料理物語」は江戸時代に寛永期以降、正保期、慶安期、寛文(四年・七年)期と5度にわたって木版本として出版されており、厨事を担う家に秘伝として伝えられた文献ではなく、いわば一般に向けた料理指南書として世に出された。料理技術の伝搬は、伝授という形式を脱して、出版文化の隆盛とともに新たな段階に入ったことを示している。

#### シンポジウム2

## 「伊勢湾・三河湾をめぐる民俗 一漁法と魚食、そして、それから見えるもの一」

趣旨説明 日比野光敏

パネリスト 久保禎子

大野麻子

野村史隆

日比野光敏

#### ■登壇者プロフィール

#### 久保禎子(一宮市尾西歴史民俗資料館学芸員)

木曽川流域及び伊勢湾周辺を主なフィールドとして、漁撈活動を主軸に、人と自然とのかかわりを物質文化及び考古学・民具学の視野から研究。著に『漁の技術史―木曽川から伊勢湾へ―』(1994・一宮市博物館)、『川から海へ―人が動く・モノが運ばれる―』(2002・一宮市博物館)、『木曽川今昔 川とともに生きる』(2014・一宮市尾西歴史民俗資料館)など。

#### 大野麻子 (蟹江町歴史民俗資料館主任学芸員)

尾張平野南部をベースに、伊勢湾沿岸の漁業や、川魚を中心とした食文化を研究。蟹江町歴史 民俗資料館特別展「蟹江の漁業」、「蟹江の郷土食」などを担当。

#### 野村史隆(鳥羽市文化財専門員)

もと海の博物館学芸員。著に「志摩の漁具鍛冶・熊野の捕鯨・志摩の熨斗鮑・志摩の海女」『技術と民俗 上巻』(日本民俗文化体系、1985・小学館)、「伊勢湾・志摩半島・熊野灘の漁撈用具」『生産技術と物質文化』(日本歴史民俗論集、1993・吉川弘文館)、「風の民俗」『講座日本の民俗学4.環境の民俗』(1996・雄山閣)など。

#### 日比野光敏(愛知淑徳大学教授・すしミュージアム名誉館長)

日本の郷土料理の中でも、とりわけ「すし」を選んで、その文化的役割の研究をする。また魚食に対しても、特に淡水魚の捕獲というテーマに関心を抱いている。主な著書は『すしの貌』 (1997・大巧社)、『すしの歴史を訪ねる』 (1999・岩波新書)、『すしのひみつ』 (2015・金の星社)、『誰も語らなかったすしの世界』 (2016・旭屋出版) など。

#### 「伊勢湾・三河湾をめぐる民俗―漁法と魚食、そして、それから見えるもの―」

#### 趣旨

今回、シンポジウム1が目指しているのは、「食」と「環境」との関係を具体的な魚食文化を通じて今一度、考慮し、里山や里海が持つ多様な価値を再評価する、また新しい実践をも生み出したい、というところにある。それを受けるかたちで、われわれは身近な東海地方をフィールドにし、伊勢湾および三河湾という内湾地域における魚食文化を議論することにした。シンポジウムが終わる頃、皆さんと一緒に「食」と「環境」というテーマに近づけたら、本企画を考えた者としては望外の喜びである。

#### 内容

今回取り上げる伊勢湾・三河湾という地域は、非常に面白い地形を有している。伊勢湾、三河湾ともに遠浅の海があり、また、伊勢湾の最奥部には木曽川・長良川・揖斐川、三河湾には矢作川や豊川という日本有数の河川の河口がある。これらの内湾地形は渥美半島と志摩半島とで構成される伊良湖水道で大きく仕切られ、外海の遠州灘や熊野灘などとは一線を画した光景を持っている。

さて、魚食と密接に関連づけられるものに漁業や漁法、漁具などがある。まず久保禎子氏が、この地域の概観をふくめ伊勢湾周辺の漁業について語ってくれる。そして、縄文時代の遺跡でわかる考古学的な情報から現代に至る民俗学的知識を報告し、さらには、漁業の未来像についても接してくれるはずである。

次にこの中から木曽川のデルタ地帯を取り上げる。そこで展開される食文化は汽水域・砂泥底地域と低湿地の水産物に特徴づけられるもので、大野麻子氏が愛知県蟹江町の事例を紹介する。 このことは当該地域の独特な景観として認識されるが、東隣の三河湾ではどうか。視聴者らに新情報を求めつつ、内湾地域の食文化の側面を広げさせてくれよう。

野村史隆氏は鳥羽市国崎と答志島に見られる「ニシ汁」を取り上げ、その歴史や実態を報告するとともに、それが海浜で生活する人々、すなわち「海人族」の根拠地ではなかったかと推論する。たったひとつのことがらが大きな話題へと結びつく瞬間である。日比野光敏も、伊勢湾・三河湾とそれ以外の土地の食文化の関わり、特に「ベッコウずし」の存在が、江戸と関西、また伊豆諸島との海洋交易の足跡を示す意味で非常に意義深いことを紹介する。

伊勢湾・三河湾と外海は、伊良湖水道をはさんで接しており、異なる水域の魚種に適応した数多くの漁法が存在する。多様な魚種は多様な魚食文化を発達させた。そうした魚食文化の発信源に近い都市が、東京でも大阪でもない、名古屋という「独立」したマチであることにも注目したい。伊勢湾・三河湾の魚食文化を見ることは、単に一地域の民俗事象を追うことにとどまらず、全国レベルの魚食文化を考える糸口になるはずである。視聴者の皆さんも、ぜひ興味関心を持っていただきたい。

#### 伊勢湾周辺における漁業

#### 久保 禎子

三河湾・伊勢湾・志摩半島に至る河川域から沿岸の漁業は、縄文時代からその痕跡が明らかであり、現在に至るまで続いている。その様相は、私たちの生活に密着する形で、自然環境や社会状況、道具の発達などにより変化してきた。一方、伝統が継続するものもある。三河湾湾口部の篠島・日間賀島・佐久島にように、古墳時代からすでに大型のサメ釣針を使ってサメ漁をし、平城宮に干物を贄として送っていたことが出土木簡から明らかになっている。その漁具漁法は近代まで連綿と続き、民具として資料館に展示されている。漁業の有り様や変化は一様ではなく、地域によって、漁具漁法によって異なるのである。

そこで、これからの海・川・水辺環境と人とのかかわりを考えるために、まずはこれまでを振り返り、現在の社会状況に合わせて今後のかかわり方を模索していかなければならない。さらに、それは一律に考えられるものではなく、地域という自然環境や歴史に培われた単位があり、それぞれ異なる事情や状況がある。ここでは、伊勢湾周辺をその地域としてとらえ、考えてみたい。

#### ①伊勢湾周辺と漁業

三河湾・伊勢湾から志摩半島に至る海浜部、そこへ流れ出る河川とその周辺の水田域を含めて、 地域性を設定することができる。

#### ②自然環境による漁業形態の違い

大きく分けて、内水面漁業、内湾漁業、外海漁業としてとらえられるが、使用する漁具・漁法 が刺網を主体とするか、曳網を主体とするか、陥穽漁具を主体とするかなど、立地する自然環境 に大きく左右されてきた。

#### ③漁具の発達と操業単位の変化

釣針、ヤスや銛のような刺突具のように、形は変化しないものの素材と大きさが時代とともに大きく変化してきた漁具がある。曳網や刺網、投網など種類が豊富な漁網は、縄文時代から網に浮子と錘を装着して使うことに変化はないが、漁法は時代とともに大規模になるものもあり、近代以降には操業単位や素材にも大きな変化があったと言える。これらは、結桶や竹細工などの道具がプラスティック製品などに置き換わっていくのと同様で、社会変化に大きく影響された。

#### ④水辺環境の変容

海浜部の埋め立てや、河川敷の樹林化、湿地や水田の減少は、それぞれの地域の漁業のあり方を変化させた。水田が広がる濃尾平野の水田で農業とともに行われてきた内水面漁業は、水田に出入りする魚や貝類の減少とともに消えていった。河川における内水面漁業は専業漁師が減るだけでなく、遊漁人口も減少している。内湾・外海に面した海浜部の漁業も、地域によってその盛衰が分かれている。

#### ⑤これからの漁業と魚食文化

気候の変動や、人々の暮らしの変化による自然環境や社会の変化は、漁業を変えただけでなく、 地域によって多様であった魚食文化を消しつつある。豊かな川や海を取り戻し、「ともに暮らす」 を続ける方法を考えていかなければならないのが今である。

#### 伊勢湾沿岸の汽水域における川魚の食文化

#### 大野 麻子 (蟹江町歴史民俗資料館)

#### 1 尾張平野南部の「川の幸」

私の勤務先のある蟹江町は、尾張平野南部の木曽川下流のデルタ地帯に属し、木曽川、長良川、揖斐川の木曽三川と庄内川に挟まれたところにあり、面積11km²という狭い町域にもかかわらず、日光川、蟹江川、福田川、善太川など幾筋もの川が流れており、それらの川は町南部で合流し、やがて伊勢湾へと注いでいる。この地域は大半が海抜ゼロメートル地帯となっており、川が汽水域となっていた特徴から、フナやモロコのほか、良質のシジミやウナギがとれ、さらにボラ、コイ、ナマズ、ハゼ、スジエビなどたくさんの種類の魚介類に恵まれた。蟹江川の河口には昭和30年代まで漁港があり、伊勢湾へ漁に出かける漁師もあったが、川漁も盛んに行なわれ、専業農家であっても、身近な川や水田で魚介類をとり、食材にすることは日常的に行われていた。

#### 2 川魚の食文化

先に述べたように、蟹江町をはじめとする尾張平野南部では川でとれた魚介類が食されたが、特にフナ、モロコ、ボラなどを調理したものは郷土料理として今も伝えられている。フナは、寒ブナを大豆とともに赤味噌とザラメでじっくり煮てフナ味噌にした。これは冬のおかずの定番であった。モロコは3~4㎝のものを使い、刻みショウガをたっぷり入れて佃煮にした。祭りや法事の時に作る箱寿司の上に、玉子焼きやシイタケ、煮アナゴなどを載せることもあったが、この地域ではモロコやハエ(フナの子)佃煮と角麩をのせたモロコ寿司がごちそうとなった。ボラは、ネギやショウガなどの薬味と一緒に炊き込みご飯にした。これは「ボラ雑炊」と呼ばれ、大勢集まる時によく食べられた。ボラの幼魚であるイナは、一般的には焼き魚や甘露煮にしたというが、特殊な道具を使い背骨とはらわたをとり、調理味噌を腹に詰めて焼いた「いな饅頭」という料理がある。家庭で作ったという話も聞かれるが、特殊な技術が必要であり、料亭で考案されたとされ、蟹江町の名物料理として知られている。

#### 3 伝えられる食文化

当地域では現在川で魚を捕り調理をすることがほとんどなくなってしまったが、フナ味噌、モロコ寿司、ボラ雑炊、いな饅頭などの川魚料理は、今でも地元の店や地域のイベントなどで販売され郷土料理として認知されている。県内の他の地域でも昔はフナなどの川でとれた魚を食べた、という話は聞くが今もその食文化が残っているというところは少ない。生活が変わっても食文化が伝えられる要因には、木曽川下流のデルタ地帯ならではの水郷文化があったからであろう。現在はその水郷文化が消えつつある中で、伝えられる食文化がこの地域の水郷文化を思い起こさせるものとなっている。

#### 海人族とニシ汁

#### 野村 史隆(伊勢民俗学会)

1998年、桑名から鵜殿まで、三重県の海村地域に残る郷土料理を調査したことがあった。この時の調査で磯に棲息する巻き貝であるイボニシをひとつの料理として食する地域が2箇所確認された。ともに「ニシ汁」といった料理名で、鳥羽市の国崎町と答志島で食されていた。イボニシは法螺貝を2センチほどに小さくした形をしていて、これから採取される分泌腺は貝紫染色の元(パープル腺)であり、太陽の紫外線と酸素に触れると濃い紫に変色して落ちないことから、海女が磯手拭や磯着に魔除けの印を描くのにも用いられてきた。このイボニシの持つパープル腺は辛く毒性があり、余り沢山を食べると腹痛を起こす。イボニシが棲息する磯には天然のカキも多く岩場に付着しているが、多くは口をあけ死んでいるものも多く、それらを注意深く観察すると必ず1ミリほどの穴があいている。それはイボニシがカキの殻の上からパープル腺を注入した痕跡にほかならない。イボニシはイソモノとしてバテイラやクボガイなどとゆでて食べるが、イボニシは多少の辛みを感じる。この辛みがパープル腺なのである。

ニシ汁の基本料理法は、磯から取ってきたイボニシをつぶし、味噌や焼き魚を入れた擂り鉢に入れ、水で薄めなから伸ばしてゆきその上澄みを御飯にかけていただくものである。詳しいレシピは下記の如くであるが、こうしたニシ汁がその後の調査で伊勢湾を挟んだ愛知県の篠島にも存在する事を知ることになるが、同時に、この3地区だけになぜニシ汁が食べられているのかという思いが頭をよぎる。共通するもの、接点がないか思いをめぐらしてみた。

これらの食文化がある地は、縄文期の遺跡が点在する地域であり、志摩市越賀の阿津里貝塚・鳥羽市浦村の白浜貝塚・答志島の築海貝塚においても縄文人が食した魚介類の中に大量のイボニシが含まれている。海浜で生活する当時の人々、即ち「海人族」の根拠地であった志摩半島から渥美半島にかけての地域と重なってくるのである。このようなことから「ニシ汁」は海人族(あまぞく)発祥の食文化といえるのではなかろうか。

(国崎町のニシ汁) (1998国崎大田弥栄談)

時期一春以外の周年、特に冬がよい。春はフグが産卵するので避ける。

材料―イボニシと磯魚5~6尾。

調理法一タナゴなど磯魚を焼き、その身をフライパンで煎り、それに味噌を加えよくさめてから水を入れる。これに石で叩きつぶしたイボニシを入れよくかき混ぜる。貝殻は下に沈み、その上澄みを熱いごはんにかけて食べたり、汁を飲む。味はすごく辛い。

(答志町和具のニシ汁) (1998答志和具浜口家)

時期一冬

材料―イボニシ 一升 ・磯魚 ・味噌

調理法一冬の干潮時に磯でイボニシー升ほどをとる。それを生きているまま石で叩きつぶし、 殻ごと擂り鉢に入れる。次にメバルかアイナメ、黒鯛など白身魚を二尾ほど素焼きにして身をほ ぐす。タマー杯ほどの味噌を取り出しそれを焼いて焼き味噌を作り、擂り鉢にイボニシ・焼き魚 ・焼き味噌を入れよく錬る。よく混ざったら水を少しずつ加えのばしていき、擂り鉢の七分目あ たりまで味をみながらのばし、炊きたてのご飯を茶碗に盛り、擂り鉢の上澄みをかけて熱い内に 食べる。また、汁は吸い物として飲むこともした。

#### 伊勢湾・三河湾をめぐる民俗 一地域的なすしから大きな話題へ―

#### 日比野 光敏

#### 1 コハダとコノシロ ~コノシロずしは関西の文化~

かつては最高値を記録したという三河湾のコハダは、江戸前を代表するタネである。昔は江戸 でしか使わなかったというが、数年前から、名古屋でも盛んに使われるようになった。

三河のシンコともなれば、値段は格段に上がる。それに対して、ナカズミは値が下がり、コノシロともなると非常に安い。もちろん、焼き魚にすると味はよく、コノシロの方が味としては美味との評判すらあるが、この裏には「焼くと死人の味がする」など、コノシロにまつわる伝説がある。

そういう伝説をまことしやかに伝えるのは江戸で、関西では知る人も少なかった。そのためか、 コノシロの料理を好んで作るのは関西、および西日本の人たちである。その東端部にあるのが三 重県で、そこではコノシロのすしもたくさん作られる。

ここでは三重県下のコノシロのすしを紹介する。それが愛知県、岐阜県にはない民俗で、三重 県が「関西文化圏」の中にあるかをみる。

#### 2 愛三岐の箱ずしの分布 ~伝播経路は陸路と海路~

東海地方平野部には「箱ずし」という、江戸時代後期に発祥したと思われるすし文化がある。 これは押し箱に特徴があり、原則として、東海三県以外では認められない。よってここに、東海 地方の民俗が名古屋中心の地区に収斂されていることがわかる。

従来、私がこの民俗の地域性を語るとき、柳田國男の周圏論を用いて説明してきた。箱ずしの文化は、実によくこの論があてはまる分布を示すからである。しかし近年では、単純な周圏論で用いられるような「距離」は、陸路だけではなく、海路の影響もあるのではないかと思うようになった。

ここではそう思える例を愛知県田原市や三重県志摩市から引き合いに出し、もう一度、箱ずし 文化の分布要因を検討する。

#### 3 「ベッコウ」と三重県、そして「江戸前ずし」、やがては南洋のすしへ

三重県には「ベッコウずし」と呼ばれるすしがある。それは「県下に広く分布する」というよりは「県下に散在する」といった方がよく、実際、海の近く、もっといえば漁村部に多い。いずれかの地から渡ってきたすしだと思われ、実際、他の地方にも「ベッコウずし」と呼ばれるものがある。

しかし、「ベッコウずし」の内容はよくわかっていない。地域により、握りずしだといったりちらしずしだといったり、あるいは、いっしょにすしにする魚は、マグロに限るといったり白身魚だといったり、さまざまである。むしろ、このすしを理解しようとすれば、三重県以外の地方、たとえば東京都、静岡県、果ては八丈島から小笠原諸島にまで話題が及ぶ、非常にスケールの大きい話になる。

三重県の小さな漁村の「ベッコウずし」から壮大な物語を語り得る、ひとつの例を示したい。

## 研究発表題目一覧

No.	日	<b>元</b> 名	所属等	発表題目
Aグ	イグループ			
A-1	中野	真備	京都大学大学院ア ジア・アフリカ地 域研究研究科	漁撈における天体知と対応:新潟県佐渡市姫津・稲鯨のイカ 漁と東南アジア島嶼部外洋漁撈からみた天文民俗
A-2	遊佐	順和	札幌国際大学短期 大学部	沖縄における昆布文化の役割
A-3	広尾	克子	関西学院大学社会 学研究科	ズワイガニ食文化の定着、そして現在の課題
Βグ	ループ			
B-1	真柄	侑	東北学院大学大学 院生	滋賀県野洲市三上における暮らしと生業の新たな課題―「住 んでみるフィールドワーク」を通して―
B-2	樽井	由紀	奈良女子大学	有馬温泉の近代化
B-3	高木	大祐	千葉県	共有地の活用と地域社会一市川市大町の事例を中心に一
B-4	渡部	鮎美	筑波大学	団地居住者と周辺地域住民との関係性の構築―立川市のけや き台団地自治会を事例に―
Сグ	C グループ			
C-1	大黑	久美子	佛教大学大学院生	親子二世代の婚姻事例からみる家意識の伝承に関する一考察 一高知県宿毛市山奈町の「養子婚」を中心に一
C-2	横田	尚美	滋賀県立大学	滋賀県犬上郡多賀町R家の衣生活一家族と衣服の関係を中心 に一
C-3	林春	·伽	日本女子大学大学 院	離島における女性の労働とその役割についての一考察―愛知 県知多郡南知多町日間賀島を事例に―
C-4	吉田	佳世	追手門学院大学講 師	変幻する女性たち 日本の大学応援団における女性部員に着 目して
Dグ	゛ループ		(グループ発表)	民俗文化研究の持続性と多様性の展開―研究と現地を往還す る拠点(ネットワーク)構築に向けて―
D	大本	敬久	愛媛県	地域の結節点としての民俗学―西日本豪雨での愛媛県の事例―
D	葉山	茂	弘前大学	市民とのインタラクションによる民俗映像の構築―宮城県気 仙沼市を事例に―

D	川村	清志	国立歴史民俗博物館	文字と声による民俗文化の再構築―宮城県気仙沼市における 持続的民俗誌実践より―	
D	内山	大介	福島県立博物館	教師・山口弥一郎の地域文化研究―フィールドの危機と民俗 学的実践―	
Εグ	E グループ				
E-1	伊賀	みどり	帝京平成大学非常 勤講師	病院出産への転換点一戦後GHQ占領期に何が変わったか一	
E-2	鈴木	英恵	群馬パース大学非 常勤講師	臍の緒と産毛を入れる桐箱	
E-3	永島	大輝	栃木県	共有される俗信、検索される俗信―Web 上に見られる妊娠ジ ンクスを中心に―	
E-4	鬼頭	慈都	名古屋民俗研究会	尾張における初七夕の分布について	
Fグ	゚ループ	,			
F-1	李 生	智	國學院大学大学院	中国青海省の葬送習俗について 死者から見た葬礼	
F-2	牛窪	彩絢	東京文化財研究所	沖縄における「殯葬」の展開に関する一考察	
F-3	越智	郁乃	東北大学	都市の「樹木葬」と「生活感覚」〜東京都港区の寺院墓地を 例に〜	
F-4	本林	靖久	大谷大学	真宗地域の無墓制とオソウブツにみる寺院と門徒の関係性― 岐阜県旧春日村の事例から―	
Gグ	゛ループ	,			
G-1	中西	仁	佛教大学大学院	京都・御霊祭・末廣神輿考―なぜ彼らは「えらいやっちゃ」 と踊るように神輿を舁くのか―	
G-2	石川	俊介	追手門学院大学社 会学部専任講師	区分される参加者―諏訪大社御柱祭の木落しと川越しを事例 として―	
G-3	牧野	由佳	総合研究大学院大 学博士課程	民俗文化継承基盤としての地域の生業変化―愛知県知多「梯子 獅子」奉納の神社例祭日の変遷に注目して―	
G-4	松尾	あずさ	東京都	ニュータウン開発後における道祖神行事の興隆―東京都多摩市の事例から―	
G-5	辻 汸	香	関西学院大学大学 院社会学研究科	「物忌」のゆくえ一伊豆諸島における来訪神伝承の消長一	
G-6	樋田	竜男	たかやまそふと	有翼日輪とハロー鎮大神社のミシャグジを例として一	

	八幡	浩二	福山市立大学		
G-7	肥田	伊織	尾道市市史編さん	尾道囃子―中国山地に伝承する瀬戸内文化―	
			委員会事務局		
Нグ	Hグループ				
H-1	村田	典生	佛教大学	流行神(はやりがみ)と疫病防除	
H-2	市東	真一	神奈川大学日本常 民文化研究所	しづかアマビエの展開―長野県松本市での実践について―	
H-3	天田	顕徳	北海道大学	コロナと修行	
H-4	宍倉	有紀	國學院大學大学院	山の神講と茶飯の「二杯盛り」 静岡県伊豆の国市韮山多田 の事例から	
H-5	鈴木	良幸		シシウチ行事にみる集落でおこなう狩猟儀礼と共食―長崎県 佐世保市吉井町の事例―	
H-6	永松	敦	宮崎公立大学	諏訪信仰と茅をめぐる諸問題	
H-7	加藤	紫識	和洋女子大学	同業神信仰における実態と課題―繊維・織物業界(東京都中 央区)における同業神信仰―	
H-8	田野	登	大阪民俗学研究会	 海辺の天皇即位儀礼伝承―「難波八十島」の追跡― 	
H-9	高橋	健一	会社員	てるてる坊主の作りかた一近世・近代の絵画資料を中心に一	
Iグ	ループ	,			
I-1	岩鼻	通明	山形大学庄内地域 文化研究所	現代に生きる湯殿山即身仏信仰―参詣者アンケートを通して―	
I-2	松山	由布子	広島大学	近世東三河の陰陽師 小川大膳正の活動	
I-3	大田黒	見 司	神奈川大学大学院 生 開新高等学校 教諭	天草上島倉岳における山岳信仰	
I-4	横田	慶一	( 筑波大学大学院	   盲僧琵琶の変遷と再生―天台宗玄清法流の琵琶弾奏― 	
I-5	平松	典晃	帝塚山大学非常勤 講師	岡山市東区瀬戸町の法華信仰―不受不施派の内信を中心に―	
I-6	楊;	三洲	大阪大学大学院生	日本の灌仏会研究―子どもとの関わりの歴史を中心に―	

I-7	小野寺 佑紀	神奈川大学大学院	熊野灘沿岸における石経の習俗―三重県尾鷲市須賀利の石経 を事例に―		
Jグ	Jグループ				
J-1	邢璐	國學院大學大学院 文学研究科	中国河南省洛陽市西店村における「背装」について		
J-2	武 欣夢	國學院大學大学院 生	中国における中元節の研究―河北省霸州市勝芳鎮の中元祭り を中心に―		
J-3	李 軒羽	関西学院大学大学 院	死人を操る呪術―中国湖南省ミャオ族の「趕屍」説話をめ ぐって―		
J-4	李 干	神奈川大学大学院	台湾原住民セデック族の「文面」文化に関する考察		
J-5	山本 芳美	都留文科大学	2010年以降における沖縄のハジチ 文化復興とは何か		
J-6	福寛美	法政大学沖縄文化 研究所	霊能が開く時一奄美大島一		
J-7	蒋 明超	神奈川大学大学院 生	薩摩の石敢當の中国伝来の可能性一倭寇や唐人町を中心に一		
J-8	李 玟宰	韓国・韓国学中央 研究院	近代稲作文化の創出―朝鮮米を中心に―		
Κグ	K グループ				
K-1	河野 眞	比較民俗学会	口承文藝研究についてドイツ民俗学と比較して気付いたこと ヘルマン・バウジンガー『口承文藝の理論』の翻訳を機に		
K-2	山下 茉莉花	関西学院大学大学 院	現代伝説研究の課題―国際現代伝説学会の動向を中心に―		
K-3	津金 澪乃	國學院大學大学院	昔話の鬼婆と山姥		
K-4	福澤 昭司	長野県民俗の会	都市化したムラの調査方法―民俗学は現代社会で何を調査す るか―		
K-5	加藤 秀雄	成城大学民俗学研 究所	SNS、オンラインツールを用いた民俗学の可能性―現代に おける「小さい問題の登録」をめぐって―		
K-6	由谷 裕哉	小松短期大学名誉 教授・金沢大学客 員研究員	柳田國男「クロポトキンとツルゲーネフ」について		
K-7	門田 岳久	立教大学	オートモビリティと移動身体:宮本常一にみるフィールド ワークの〈速度〉と現実の知覚		

## 漁撈における天体知と対応: 新潟県佐渡市姫津・稲鯨のイカ漁と 東南アジア島嶼部外洋漁撈からみた天文民俗

中野 真備(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

海上を移動する漁師たちは、より多くの漁獲を得るために、漁に適した時間や位置の目印として天体を利用してきた。しかし、エンジンが導入され、魚群探知機や自動漁獲機が普及するなど漁業の機械化が進むと、天体を利用する民俗技術は次第に実践されなくなってきた。本研究では、漁撈活動における天体の知識や民俗技術が変容しゆく現在、天体をみる漁師たちの認識がどのように変化してきたのか、漁業の機械化・近代化の年代の異なる2つの地域を比較し、自然認識と近代化の関係について分析する。

本研究で対象とするのは、新潟県佐渡市姫津・稲鯨地域のイカ釣り漁師と、インドネシア・バンガイ諸島 A 村で外洋漁撈をおこなう漁師である。佐渡島における現地調査は二〇一四年に、バンガイ諸島では二〇一六年から二〇一九年にかけて断続的に実施された。

姫津・稲鯨地域の漁師は、夜光性であるイカを釣るため、夜間操業を主として、その漁獲のタイミングをはかるために天体を利用してきた。漁業の機械化以前、イカ釣り漁師にとって天体の知識は必要不可欠なものであり、理由はよくわからないが、こういう事象があればこう行動するというような「現象対応型」の理解のもとに実践されていた。しかし、一九五○年代に佐渡島で漁業が機械化すると、天体の知識は必須のものではなくなり、実際に利用されることはなくなった。また、その天体知の理解の仕方は理由や因果関係があると当事者が納得すれば対応するという「因果対応型」へと変容した。

他方、バンガイ諸島では、一九七〇年代になってエンジンが導入された。バンガイ諸島では外洋漁撈が一般的で、遠方への移動や季節変化の目安として、天体の知識は現在でも共有され、利用される。バンガイ諸島においては GPS (Global Positioning System:全地球測位システム)や自動漁獲機は導入されておらず、佐渡島と比べれば、いままさに漁業の近代化の過渡期にある地域である。バンガイ諸島の漁師の天体知や、これに基づく潮位の暦などは、自然科学的な事実とは異なる場合もある。しかし、彼らはその知識に曖昧な部分を残すことで、無意識的に「ズレ」を調整・解消している。彼らの理解は、「現象対応型」に該当する一方で、天体知の理由や背景について疑問をもたない点で、機械化以前の佐渡島の漁師とも異なる。

自然を利用する人々は、自然に対して独自の解釈や理由づけをおこない、生業を実践してきた。近代的な知識や技術が普及すると、より効率的に生業をおこなうため、自然科学的な事実を確認し、これに基づこうとする人々も増えた。しかし天体は、他の自然物とは異なり、直接観察することができないため多様な解釈がなされてきた。このような背景から天文民俗は、今後も十分な議論がなされるべき分野であり、本発表はその一考察である。

#### 沖縄における昆布文化の役割

遊佐 順和(札幌国際大学短期大学部)

本発表の目的は、沖縄県において北海道の昆布を用いた地域特有の食文化が形成され、正月の 注連飾りなど生活文化においても地域の伝統文化を支えるための重要な一役を担っていることに 着目し、今後さらに昆布を普及させるための具体的な方策を考察検討することである。

沖縄の歴史を紐解くと、琉球王国では中国との交易において昆布が主要な交易品として扱われるとともに、琉球王朝時代は宮廷での接待、儀式、年中行事などで供される宮廷料理において、重箱料理の一品として昆布巻が食された。現在も、祝事や法事および盆などの年中行事の際には沖縄独特の重箱料理が食され、その料理の中には欠かせない一品として昆布巻が供されている。沖縄の年中行事には、農民の豊年祈願にちなんだもの、祖霊祭祀の思想にもとづくもの、本土や中国から伝来したもの、沖縄独自のものなど様々な行事があり、年中行事を大切に執り行う風習は県内全域に強く残っており、今なおその伝統が伝承されている。このうち祖先祭祀の年中行事で最大の霊前祭として、先島諸島の正月十六祭(旧暦)および沖縄本島で旧暦三月の節に行われる清明祭では、祖先を前に一族が酒、お茶、重箱料理などを持ち寄って集まり、墓前にたくさんの料理を並べ、香を焚き、酒を供し、祖霊供養とともに一族の健康や豊作および一族の繁栄などを祈っている。この際も重箱料理の重要な一品として昆布巻が供されている。

この他、日常的な昆布料理として、昆布、かんぴょう、干し椎茸やしなちくなど保存の利く食材と豚肉を炒めた後に煮込むクーブイリチーや、豚足を煮込むディビチや沖縄風の豚肉の角煮ともいえるラフテー、骨つきあばら肉のソーキ汁などとともに、結び昆布が一緒に調理される地域特有の食文化が多く見られる。このように、昆布は沖縄では伝統行事や日常生活双方において、豚肉とともに琉球四大食材として非常に重用されており、古くは琉球王国の繁栄にも大きな役割果たしてきた歴史もある。かつて、沖縄は昆布の消費量日本一の座にあったが、現在は食の多様化やライフスタイルの変化により消費量は大幅に減少している。同時に、永年長寿県といわれ、平均寿命年齢の高さを誇っていたが、近年では男性、女性ともにその順位を大幅に下げている。これらのことを受け、沖縄県では長寿県の復権にあわせ沖縄の食文化、琉球料理の保存・普及・継承などの検討を実施している。

北海道の昆布は、これまで永年にわたり沖縄で地域特有の伝統文化や健康長寿にも寄与していると考えられる。2013年12月、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関 UNESCO)より無形文化遺産として登録された和食は、日本人の伝統的な食文化であり、自然を尊重する日本人の心を表現した伝統的な社会習慣が評価された。その和食のベースの一つとなる昆布だしは、だしに含まれる「うま味」が食材のもつ本来の味を引き立てるとともに、さらにだしを利かせた調理により健康的な食生活を実現させることが、欧米からも注目を集めている。こうした和食やそのベースとなる「だし」の魅力や活用意義が国内外で再認識されつつある今、沖縄でも改めて昆布の利用により、長寿県の復権、食文化継承の可能性を検討する意義があると考えられる。

#### ズワイガニ食文化の定着、そして現在の課題

広尾 克子 (関西学院大学社会学研究科)

#### ・報告の背景

山陰で「松葉ガニ」北陸で「越前ガニ」と称されるオスのズワイガニ(以下、カニ)は、特に関西地方で好まれ、希少で贅沢な「冬の味覚の王様」としての地位を占めている。しかし、このカニが都市住民に認識されたのは、1962年の「かに道楽」創業(この経緯は2015年の日本民俗学会第67回年会で報告済み)以降である。それまでは「カニなんか浜にころがっていた」(老漁師の証言)のである。それが見出され、さまざまな人々の試みにより価値づけられ、その価値が高止まりしたままカニ食文化として定着し、現在に至っている。

カニは都市の料理店で食されることもあるが流通量が少なく、多くは産地へ出向いて消費される。故に「カニを産地へ食べに行く旅」は、関西において冬季観光旅行の定番となり、季節の到来を待たれている。しかし課題がある。漁獲量も漁業従事者も減り続けているのだ。この頑張れば手が届く範囲の贅沢という貴重な食文化を、私たちはいつまで享受することができるのだろうか。

#### ・報告の内容と目的

カニ食が見出された後、カニの価値を高めていったのは浜のプロ(漁業者と仲買人)と民宿などの観光業者であった。山陰・北陸のカニ漁獲量は60年代に14,000トンあったものが、90年代初めには2,000トンまで激減した。その後若干回復するものの近年また減少に転じている。漁獲量が減少する渦中で、彼らはどのようにして価値を付加していったのか。その行為は時代と社会の要請にどのように関わっていたのか。具体的な手法は、①カニの選別、②カニに産地の目印装着、③地産地消の推進、であった。自然条件に基づく季節限定に加えて、産地優先流通という地域限定で価値を創出した。本報告では、彼らがいかなる思惑のもとでこの手法を選択してカニを価値づけ、カニ食文化を定着させていったのかを明らかにする。

加えて、このカニ食文化の将来に黄信号が灯っていることを示したい。日本の漁業に関しては、収入低下や漁業者数減少による危機や課題について各所で論じられてきたのは周知のことだろう。比較的収入の安定したカニ漁業は問題の顕在化が遅く、危機感が共有されてこなかったが、今や例外ではなくなっている。減り続ける漁獲量、多難な資源管理、参入してこない若者など課題は山積している。中でも人の問題は大きい。現在カニ漁港では、インドネシア人技能実習生の存在なしでは、船を出せない状態になっている。彼らは通常3年、最長5年の実習期間を終えると帰国を強いられる。今年はコロナ禍の影響で新規の技能実習生来日の見通しが立たず、危機感はいつになく高まっている。調査に取り掛かったばかりではあるが、この現状を報告し、今後のカニ食文化の持続可能性を考える一助にしたい。

#### 参考

広尾克子 2019『カニという道楽―ズワイガニと日本人の物語』西日本出版社

## 滋賀県野洲市三上における暮らしと生業の新たな課題 - 「住んでみるフィールドワーク」を通して一

#### 真柄 侑(東北学院大学大学院生)

報告者はこれまで民俗学の立場から「人が働く」ということ、そしてそこに暮らすとは如何なるものであるのかを、地域の生業と個人の生き方に焦点を当てつつ、総合的な視点から考えることを研究課題とし、岩手県紫波郡紫波町および鹿児島県の奄美沖永良部島にて調査を行ってきた。これを踏まえ、いわゆる国家的周縁域とされる東北地方、奄美諸島に加え、近畿地方においても調査研究を行うことで、それらを対比させつつ、地域それぞれの暮らしの文脈を踏まえた上で人が働き生きるということを改めて問い直したいと考えている。

今回取り上げる滋賀県野洲市三上においては、国指定の無形文化財である御神神社の「ずいき祭」や祭祀組織である宮座の研究は多くなされているものの、生業の展開やそこに生きる人の視点から描かれることは未だ少ない。そこで、2019年9月から2020年9月の1年間、滋賀県立琵琶湖博物館特別研究員として実際に滋賀県に暮らし、東北出身である報告者自身が関西地方に「住む」という経験をしながら野洲市三上において調査を行った。その中で報告者は、「三上に住む人びとはどのような暮らしをしているのか」「どのような人たちが、どのような空気の中で人付き合いをし、祭り行事をはじめ集まりの場面へ参加しているのか」といったことを第一の関心として調査に臨み、野洲市の産業の展開を押さえつつ、「ずいき祭」の参与観察も行った。

滋賀県野洲市は、古来豊かな農村地帯であり、野洲川が作り上げた平坦な扇状地平野が連なり、水利の便も比較的恵まれ、肥沃な水田地帯を形成している[高桑、1976]。昭和に入ってからは「有畜農業」の気運を受けて県下の種畜場の歴史を築いたほか、昭和30年代から40年代にかけて積極的な工場誘致を行い、関西の大都市域へのベッドタウンとして発展してきた[野洲町、1987]。

このような経緯のある野洲市に属する大字三上小中小路に現在暮らす H氏(昭和 18 年生れ)は、農薬会社に勤めて現役時代は全国を飛び回り、引退後は小中小路の数少ない専業農家として農業を営みつつ、2019 年から 2021 年は御神神社氏子の責任総代として、国指定無形文化財である「ずいき祭」はじめ神社のつとめにも奔走していた。

報告者は2019年の「ずいき祭」にて小中小路を中心にずいき刈りから芝原式までの過程を観察した。すると、御輿作成では、特に御輿の屋根に対して強いこだわりがみられ、あるベテランの男性が御輿を神社へ奉納する直前までずいきを調整し続けている姿が印象に残った。この小中小路がこだわり抜いた御輿の屋根は、神事が終わり、見物客が誰もいなくなった時間の保存会の男性たちがおもむろに始めたいわゆる御輿の「品評会」で高い評価を受ける。報告者はここに三上の人びとだけが知っている「ずいき祭」の楽しみを見い出した。

三上における生業と「ずいき祭」に代表される行事の位置づけは不十分であるところが多いが、今後は現在の三上の社会組織や労働の状況をより詳細に押さえ、三上の暮らしや人づきあいから「三上で生きる」ということの意味を検討していきたい。

引用参考文献:高桑守史 1976 「三上における生業の趨勢」『近江村落社会の研究 第一号』社会伝承研究会 野洲町 1987 『野洲町史 第二巻 通史編 2』

#### 有馬温泉の近代化

#### 樽井 由紀(奈良女子大学)

発表者は以前、伊香保温泉の効能を宣伝する表現が、江戸時代以来の伝統的な効能表現から、明治期のベルツに始まる西洋医学的な表現に次第に置き換えられていく過程を検討し、それが伊香保温泉の近代化の具体的過程に対応していることを明らかにした。では、関西を代表する温泉地である有馬温泉では、どのような近代化が見られるだろうか。

有馬温泉街に初めて鉄道が通ったのは大正 4(1915)年のことであり、明治期の近代化は直接に鉄道の開通から始まったわけではない。そこで本発表では、明治時代に発行された温泉誌の記述を元に、明治期の有馬温泉の近代化の特色を検討してみたい。

前近代の有馬温泉の大きな特徴は、行基の伝説に基づく温泉寺の影響力、一の湯、二の湯に限定された入浴施設の管理、さらにこれと結びついた宿坊の組織である。天保年間から幕末・明治初期まで、有馬温泉は非常に衰微した上に、明治政府による混浴禁止、廃仏毀釈による温泉寺の破壊によって、温泉地としての根幹が揺らいでいた。有馬温泉の近代化は、何よりも温泉の復興を目指す歩みから始まらざるを得なかった。

入浴施設の建て替えはまず、明治 16 年に洋館にすることから始まった。内部は一等、二等、三等に分けられた。一等は個室の風呂であったが、二等、三等は病を持つ夫婦が介助しながら入浴できるように混浴がゆるされた。ただし、外国人が二等の風呂を利用する時は他の部屋の混浴は禁じられるという外国人の目を意識したものであった。構造上の問題から再び改築し、明治24 年には元の宮殿造りにもどすことになった。この時の内部構造は一等室二部屋、通常室は四部屋で、南北の二槽ずつを隔日に男湯、または女湯とし、混浴はなくなっている。入浴施設には明治16(1883)年に廃止されたとされる湯女が、客の脱いだ衣服を受け取ってたたみ、柳行李に入れて、客の出てくるのを待って着せた。その後、明治36(1903)年に再改造され、普通浴場、と高等浴場の二つに分かれた。普通浴場の浴槽は二つあり、男女を区別した。また、特別室が設けられ混浴が許された。高等浴場は男女の別はあったが、一槽に2、3人が入浴できた。一度入浴する毎にその湯を排出し、さらに新温泉を補充するようになり、常に清浄純潔であった。浴客の世話をする湯女は浴女(おんな)と呼ばれるようになっている。

明治 24 年に完成した入浴施設の見取り図には「入浴券受取場」があり、お金を払えば温泉に入れるようになっている。江戸時代には宿泊した宿の湯女が温泉に案内し、湯女が温泉と宿を繋ぐ役割を果たしてたが、それが消えたことがわかる。つまり、宿と温泉の関係が切り離されたと言える。有馬温泉には、宿の主人が定めた入浴法が定められていたが、明治時代になると温泉寺による観音のご利益から軍医が定めた近代的入浴法に変化している。

このように有馬温泉では近代化が行われた上で鉄道が通るようになり、桁の違うお客が来るようになるのである。

参考文献:樽井由紀 2020「温泉民俗学の可能性―湯浴みをめぐる習俗と伝承を中心に―」『歴史学部論集』 第 10 号 佛教大学 43-50 頁

## 共有地の活用と地域社会 一市川市大町の事例を中心に一

#### 髙木 大祐(千葉県)

千葉県市川市大町は、江戸時代に開拓され、大町新田と称していた地域である。耕地の条件としてはよくない土地ながら、近世から近代初頭には、旧家を中心に耕地面積では十分な量を確保し、生活を成り立たせていた。その後は小作農となる人が増える一方、東京への出荷を見込んだ蔬菜耕作が盛んになっていった。このことが、農地改革後に土地を持った農家でも資本の蓄積を可能にし、これを原資として梨栽培への転換が進んだ。昭和 50 年代からは大町の中心を通る国道 464 号沿いを中心に農家が梨直売所を構え、現在の大町の景観が成立した。

大町の共有地利用は、神社と墓地から始まったと考えられる。大町の日枝神社は開村当時、ある家が、小さい自然石の神社を祀ったのが最初だという。これではムラの人びとが集まる場所として機能するのは難しいため、共有地を利用して敷地を拡張したと考えられる。また、大町には開拓以来長く寺院がなく、大町の一角に祀られた不動尊も墓地を持たなかった。墓地は各家の敷地に作られていた。そこで、共同墓地を共有地に作ることになった。このように、大町の共有地は共同の祭祀の場を求めるところから始まった。

明治期には大町は大野村、次いで大柏村の一部となる。この際、従来の共有地を千葉県知事に届け出、大柏村からの払い下げを求めた。これにより、共有地は大町区の住民 63 人の共同所有となった。この人数は、共同墓地の一部を除き、現在まで変わらない。こうして共同所有となった土地から、大町尋常小学校の用地を確保した。小学校が新築校舎に移転すると、昭和 51 (1976)年に今度はこの土地を貸して診療所の用地にした。また、これを含む地代の収益から、戦後の梨栽培の普及を背景に、花粉不足の際に、梨の交配に使うミツバチを借用する代金を賄うなどの臨時の支出を行っている。台地上の平坦な土地という条件から大町では自然災害は少ないため使った実績はないが、収益は災害への備えとしても蓄えている。

こうした共有地の利用法は、土地そのもの、あるいはその収益を利用する点で、下草や枝を利用する入会地とは趣旨が異なる。そして、市川市大町のほかにも医療、教育、コミュニティ活動に共有地の収益を活用する事例がある。小学校の校舎建築に共有山林の収益を使った事例が和歌山県田辺市新庄に、共有地を貸して医療機関を確保している事例が和歌山県西牟婁郡上富田町市ノ瀬に、また水路の災害復興に共有地の収益を活用した事例が広島県東広島市西条町寺家にあることを、発表者は確認している。いずれも共有地の所有を、近世村か昭和の大合併以前の自治体の範囲にとどめている。

さらに注目してみたいのは、寺家では共有山林を管理する寺家会の資金で『寺家の歴史散歩』(寺家会、2005 年)という冊子を刊行し、同様に大町でも、大町共有地管理委員会の資金で『大町を開いた人びと』(大町共有地管理委員会、2003 年)を刊行して、地域の歴史を伝えるためにも共有地の収益が活用されている点である。市町村合併で肥大化した現在の自治体ではなく、より関係の強い小さいコミュニティのなかで、教育や医療を確保し、また地域の歴史を伝えようとするところに、共有地を媒体にした人のつながりの姿を見ることができると考える。

# 団地居住者と周辺地域住民との関係性の構築 一立川市のけやき台団地自治会を事例に一

#### 渡部 鮎美(筑波大学)

1960年代後半、高度経済成長の只中の東京都下では住宅不足に対応するため、多くの団地が建設された。そうした新興団地のなかには300戸を超える大型団地もあり、団地自治会は一つのコミュニティとして成立していた。そのため、既存の住宅地とは異なる独立した自治会として周辺地域の住民と対立することもあった。先行研究では、団地を都市民俗学の研究対象とし、既存の地域とは異なる、または類似した政治的・文化的側面に注目し、団地を発端とする政治運動や既存の町内会等との文化的特質の違いなどについて明らかにしている。そこでは、団地の独自性や旧来からの住民との対立などが示された。しかし、団地の自治会のなかには、旧来からの地域社会に溶け込んでいった自治会もある。そこで本発表では団地の政治的・文化的側面に注目しつつ、新参者である団地の自治会が旧来からの地域コミュニティにいかに働きかけ、または働きかけを受け入れ、協働し、地域に溶け込んでいったのかを明らかにする。

本発表で取り上げる、けやき台団地は中央線沿線の東京都立川市・国分寺市にまたがる日本住宅公団(現 UR)の団地として建てられ、1966 年 10 月から入居がはじまった。同団地は立川市にある 1250 戸の賃貸住宅と道路を挟んで隣接する国分寺市にある 350 戸の分譲住宅で構成される、いずれも大型団地である。前者はけやき台団地自治会、後者は分譲住宅管理組合を構成しているが、本発表では、自治会と地域との関わりの記録が多く残る立川市にある賃貸住宅のけやき台団地自治会を対象とする。立川市側のけやき台団地は古くは砂川十番(旧砂川町)と呼ばれ、砂川十番自治会がある若葉町の1丁目に位置する。団地から五日市街道を隔てた同町4丁目には、1971 年に入居がはじまった公団営の若葉町団地がある。

本発表では団地の自治会と地域との関わりを明らかにするため、自治会関係者に聞き取り調査を行うとともに、自治会の広報誌や記念誌などの資料調査を行った。

けやき台団地では入居開始の翌年、1967年2月にけやき台団地自治会が発足し、同年3月には自治会広報部によって自治会ニュース準備号が発行され、以後、自治会ニュースの通常号は2019年までに203号まで発行された。また、速報も12号、特集号は2号が発行されている。調査では11の欠号はあったものの、多くの自治会ニュースを複写することができた。また、自治会から発刊された設立記念誌3冊は団地の問題や地域との関わりをふり返るものとなっており、団地自治会だけではなく、団地住民と地域住民の関わりもうかがい知れるものとなっていた。そこで、本発表では1967年から現在までの自治会ニュース等のけやき台団地自治会の発行物から団地の政治的・文化的側面をとらえ、団地の住民にとっての生活問題や、政治面・文化面での団地と地域との関わりなどを探る。資料調査ゆえの制約はあるが、団地の住民自身が記した記録やふり返りからは、当事者として団地の抱える問題をいかに語り、地域との関わりについて、どのようにとらえ、評価してきたのかを読み解くことができると考える。

## 親子二世代の婚姻事例からみる家意識の伝承に関する一考察 一高知県宿毛市山奈町の「養子婚」を中心に一

#### 大黑 久美子 (佛教大学大学院生)

発表者は、2018 年度から 2019 年度にかけて高知県宿毛市山奈町芳奈で婚姻と若者仲間に関する聞き取り調査を実施した。純農業地であるこの集落は、家意識が強いがゆえに若者仲間には個人の婚姻に関与する権限は与えられず、配偶者選択の自由がある婚姻事例はほとんどない。調査数の約3割が「養子婚」に該当する結果となり、その内訳は家を継ぐ意の婚姻が多数であった。芳奈には、先行研究で言及されている姉家督慣行はなく、擬制的親子関係が活発に結ばれた痕跡もない。さらには、山路(1974)が指摘する養子の地位の低さもみられず、むしろ養子は大切にされてきた。したがって、これまでの婚姻研究の実績と対比させても、なぜ「養子婚」を特徴的な婚姻形態とする地域になったのかは解明できていない。

これまでの民俗学における婚姻研究は、若者仲間との関連や家制度の影響をうけた婚姻慣行また生業や社会構造を踏まえ分析したものなど多くの事例を蓄積している〔竹田(1970)瀬川(1972)など〕。しかしこれまでの研究は、村内の婚姻事例を取り上げ共時的に各地の事例を比較する方法が多く、同じ村で通時的に親子二世代への聞き取り調査を実施した研究は少ないといえる。

したがって本研究では、子世代の婚姻事例を得ることで、親世代の家意識の強さや結婚観が次の世代にどのように伝承されているのかを明らかにすることを目的とした。さらには、これまでに得ている親世代の婚姻事例を基盤とした上で、子世代への家意識や結婚観の伝わり方に連続性や一定の法則があるのかを考察していく。

2020年度の調査では、八木(2001)の「婚姻類型化に必要な指標」と、服部(2008)が指摘する「家制度下で伝えられていた民俗慣行①配偶者選択の民俗②婚姻儀礼③家族生活に関する民俗」〔八木(2001)服部(2008)〕に依拠して、親をはじめ親戚や近隣のものが伝えてきた①相手選びへの要望②伝承してほしい婚姻儀礼③結婚生活への願望を中心に、聞き取りを進めている。さらには、その意見や想いを子世代がどう理解し自身の結婚観を確立していったのかを分析できる聞き取りを実施する。

途中経過ではあるが子世代への調査で得られている結果(2020年8月時点)では、子世代の家意識への薄れがみられた。しかし、子には親への意識があり、その想いが間接的に家意識へと結びつき行動に移されていることが窺えた。さらに家・親・子の関係性を分析するため家と親を切り離して考察すると、親と子の意識がどの方向をむいているのかが明確になり、両者の家意識の相違が明らかになった。また、一人娘あるいは何らかの理由で実質的に長女の役割を担い養子を迎えなければならない娘のことを集落内で「養子娘」と呼ぶことがわかり、その概念は、子世代の結婚観に強い影響を与えていたことが明らかになった。

今後、残りの聞き取り調査を終えた時点で、社会的背景を踏まえ子世代の家意識の薄れの要因を検討し、二世代間に伝わる結婚観の分析を試みる。

【参考文献】 竹田旦(1970)『「家」をめぐる民俗研究』弘文堂 八木透(2001)『婚姻と家族の民俗学的構造』吉川弘文館

## 滋賀県犬上郡多賀町R家の衣生活 一家族と衣服の関係を中心に一

#### 横田 尚美(滋賀県立大学)

本発表は、2019 年に発表した衣生活資料のその後の調査経過を報告するものである。従って、 第71 回大会の要旨も参考にされたい。

衣生活資料については、2019年2月に同県大津市の「田上の衣生活資料」1,358点が、国の登録有形民俗文化財に指定された。また、アチック・ミューゼアムなどが収集した225点の労働着のコレクションは、現在、国立民族学博物館に収蔵され、報告書が1985年に刊行されている(『日本の労働着』)。これらと比べ、本資料は一軒の家から収集された衣料品である。1973年に移転して、そのままになった元の山の家から見つかった本資料は、余りに古く汚く、一度、捨てられてしまったために、それらがどこにどのように収納されていたかがわからないのが残念である。

しかし、捨ててしまおうと思ったくらい継ぎが当てられた服がいくつも残されていた。国の指定を受けた田上では、「元の布がわからなくなってしまったような着物を着ていた人もいたというが、そのようなものは資料として寄贈されなかった」という。筆者が調査を行ってきた新潟県南魚沼市六日町でも、話だけで一枚も見ることができなかった。海外では BORO と呼ばれ、高額な値が付く。当地では「ボッコ」と言うが、当時の暮らし、女性の働きぶりがわかり、女性の家族への愛情が見える。本発表では、これらが一軒の家のものとして適切と考えられることを示したい。

R家には、現在 1937 年生まれの女性(以後、「話者」)がいる。残念ながら、その父は彼女が 1 歳の時に戦死しており、父親の記憶はない。祖父は、彼女の生まれる前に亡くなっている。この 家には、1938 年から彼女が結婚するまで、男性がいなかった。これほど継の当たった服は見たことがないと言う彼女の記憶が正しければ、男性服に関しては、少なくとも父親が出征するまでのものということになる。女性服も、家の移転時にはすでに不要だった服ということは間違いない。

本資料には、衣類だけで着物 54 点、袖なし 5 点、モンペ 11 点、股引 15 点、下着類 11 点、割 烹着 1 点、子供服など 35 点(整理した時点の分類に基づく)、前掛け、大きな掛け布や、蚊帳、衣料が入っていた大きな巾着袋、紐に大量の端切れなどがある。

本研究では、そのうちの着物(上衣)と下衣について、服のサイズをはかり、分類することを 試みた。こうした調査により、服が男女どちらのものか、誰のものかも推定できるのではないかと 考えた。上衣については、後幅、袖幅、着丈を、下衣については、腹回り、着丈を比較する。ただ し、モンペも股引も、多くは前後を重ね合わせて紐で縛るタイプのため、正確なウエスト寸法はわ からない。一方、ゴムを使用したものは伸びるため、正確なサイズがわからない。

上衣については、男女ともに後幅が布幅の約 30 cmであるため、違いを特定することができなかった。子供服は後幅が狭いため、ある程度特定できた。下衣については、股引とモンペがあるが、話者の話から、股引は男性用、モンペは女性用と考えた。その上で、それぞれのアイテムのサイズを比較すると、どちらも二つのサイズに分けられることがわかった。話者の記憶にこれほど当て継がある服はないことから、どちらも彼女の親と祖父母のものではないかと推定した。

今後、さらにほかのサイズも計測し、比較検討し、その他の指標と合わせて、着用者について 検討していきたい。(本研究は、JSPS 科研費 JP20K13803 の助成を受けることになった)

## 離島における女性の労働とその役割についての一考察 一愛知県知多郡南知多町日間賀島を事例に一

#### 林 春伽(日本女子大学大学院)

本調査地は、愛知県知多郡南知多町に位置する日間賀島である。当島は、現在「名古屋から一番近い島」として東海圏の観光地となっている。島内の産業構造は、主に漁業である第一次産業は四割、水産加工業の第二次産業が一割を切り、残りが第三次産業であるため、飲食・宿泊業の割合が高い。また、漁業以外での収入を得る世帯が島内で多く、飲食・宿泊業といった観光業に携わる島民も多い。また、近年は、若年層世帯や都会からの嫁入りが多く、その結果として観光地である島内に新しい商売を導入することにも積極的になっているという。そのような研究背景から、本発表では、島の女性達に着目し、聞き取り調査結果から島の女性たちの生活や労働の変遷を明らかにする。加えて、島の女性たちが果たす役割を通史的に検討する。主な研究方法は、現地でのフィールドワーク並びに聞き取り調査である。加えて、通史的な研究を行うため文献調査も行った。フィールドワーク期間は日間賀島東里においてホテル業を営むホテルAに住み込みをした。その際、実際に清掃業や仲居業の手伝いを行った。

間き取り調査より、島内女性の労働は、第1期(明治期~戦中):漁業・農業、第2期(~1950年代前半):絞り業(絞り染めの一工程)、釣り客、弘法参りの参拝者を対象とした商売、第3期(1950年代後半~1970年代):民宿ブーム、第4期(1980~1990年代):旅館・ホテルブーム、第5期(2000年代~現在):総合的な観光化、の5期に分けることが出来る。第1期では、農業が盛んである愛知県渥美半島から嫁入りした女性たちが多く、婚姻により、島では蓄積されにくい農業の知識をもたらす存在として役割を担ってきたという。第2期では、絞り業や水産加工業、また弘法参りにより島外から来る人の相手、つまり、島外を商売相手として労働を行う始める時期である。島外との商売を通じて標準語や立振舞など、島では自発的に生産できない身体技能を島にもたらした。第3期以降は、観光業が盛んになり、主に中居業や清掃業、飲食業などが女性の主な働き口となる。近年では、既存の事業から派生させ、カフェやお土産屋など、島外からやってくる観光客を対象とした観光業を行う事例もある。基本的にこれらは島の女性たちが中心となり、新しい観光資源となっているという。さらに、婚姻前の仕事の経験や資格を生かし、島の中で商売を行い、自分の知識や経験を島の観光へ還元するなどの役割を果たしているという。

このように、島の女性たちの労働は時期ごとに変化していったことが分かる。しかし、変化の中でも、島内に島外の情報や価値観を伝達させ、普及させる役割を島の女性達は担っていたことが分かる。さらに、近年では、島内の観光化により、島内観光業の発展に貢献している。

現在、新型コロナウイルス感染症拡大により、観光業は変化を余儀なくされている。そして、 清潔感や衛生感覚、接客のあり方も今後さらに変化すると予想される。その中においても、観光 業を継続し、今後の離島観光がどのように変化し、対応していくのかに対する調査を今後の課題 としたい。

## 変幻する女性たち 日本の大学応援団における女性部員に着目して

吉田 佳世(追手門学院大学 講師)

本発表は関西圏にある大学応援団を主な事例として、そこに所属する女性部員について論じるものである。今回は1990年代以降に見られるようになった、エールをはじめとする応援や演舞における重要な局面を女性部員が担うようになったという動向を取り上げる。近年、男性応援部門であるリーダー部のスタイルで応援をする女性部員の姿がメディアで取り上げられる機会が増えた。しかし、この動向を担っている女性たちのなかには、実は、応援団のチアリーダー部門や吹奏楽部門に所属している女性が多く含まれていることはあまり知られていない。こうした女性たちは、通常はチアリーダーや吹奏楽部員として応援活動を行うが、必要な場面になると前に出て、応援団らしい大きな、迫力ある声量でリーダー部の応援スタイルによる振り(指揮)やエールを披露する。観客の中にはその印象の変化に女性部員の姿に驚く人もいる。発表者は、こうした女性部員たちの行動を、見事に姿を変えてみせるという意味で「変幻」として捉えた。本発表では、応援団組織内部の動向や当事者である女性部員たちの語りをみていくことで、その「変幻」の背景にあるものを探っていこうとするものである。

本発表の位置づけを明らかにしておく。大学応援団とは運動部などが行う試合などに出向きそこで応援を行うことを主たる活動としている学生団体である。大学応援団と聞くと、学ランを着た男子学生たちが身振りや手振りによって応援を行うという、いわゆるバンカラ的な文化をもつ男性的な組織というイメージをもつ人も多いだろう。その背景には、1950年頃までは男性のみの団体であったこと、また、独特の服装や言葉遣い、厳しい上下関係といったバンカラ文化と称されることの多い独特な行動様式――「しきたり」と呼ばれる――の与える印象の強さが関係していると考えられる。そのためこれまでの大学応援団に関する研究はいわゆる男性的なバンカラ文化を主題とするものが多かった。しかし、いまの視点からみるとこうした大学応援団の理解は一面的である。なぜなら応援団を名乗る団体の多くは男性部員が主な担い手となるリーダー部の他に、楽器演奏を担う吹奏楽部、そしてバトン部やチアリーダー部等の女性応援団部門を有しているからである。この三部門による応援団関係者のなかでは「三部」とも呼ばれ、今日の大学応援団の応援スタイルの主流となっている。今日では多くの大学応援団において女性部員は多数派を占めており、女性たちは様々なかたちで応援団に参画するようになっているからである。つまり、本発表は、現代日本の大学応援団の動向を踏まえ、女性応援部門あるいは女性部員に光を当てた研究であるといえるだろう。

結論を先取りすれば、女性部員たちが従来のリーダー部の男性部員がやっていた活動の一部を担うようになったのは、1980年代以降女性部員数が安定的に維持したのに比して、1990年代頃から男性部員が徐々に減少していったという応援団内部の変化がある。また、女性部員たちは、チアリーダー部や吹奏楽部であっても、声出しや所作などの応援団的な行動様式を身に着けており、「応援団の一員である」という強い意識をもっていることを指摘した。しかし、女性部員が男性になり替るという変幻のあり方は、リーダー部を軸とする男性的な応援文化を認めているからこそそのような対応になっているのではないかという点も合わせて指摘した。

## 民俗文化研究の持続性と多様性の展開 一研究と現地を往還する拠点構築に向けて一

(グループ発表) 川村清志(代表) 大本敬久 葉山茂 内山大介

本グループ発表では、フィールド研究における持続性と多様性を促進し、展開させうる研究の 方途について検討する。以下で発表する 4 名は、研究集団と調査現場の双方向的なネットーワー クを通して、研究対象との持続的な調査や協働作業を担保しつつ、地域社会に潜在する文化的多 様性を見出してきた。

まず大本敬久は、2018(平成30)年に発生した豪雨災害の被災地での文化財レスキューで生じた地域内外との交渉過程について報告する。大本は災害以前から地域に足を運び、民俗調査を継続してきた。被災後は文化財レスキューに関わる地域外部からの援助にも、積極的に関与している。単に地域での民俗文化の推移を観察するのではなく、それらを継承する共同体の復旧・復興を視野に入れた取り組みの実践が報告されることになる。

次に葉山茂は、宮城県気仙沼地域において自らが制作した民俗誌映像をもとに、被災したモノがレスキュー作業を通して想起され、再構成される過程を検証している。市民参加による文化財レスキューの現場では、資料についての専門的な知識よりも、個別の記憶の想起から、モノの理解が深められることがある。そのような現場でのやり取りを映像に記録し、また現場にフィードバックすることで多様な人々の声を記録しうる可能性を指摘している。

川村清志は、同じ気仙沼地域におけるレスキュー作業で見出された日記資料を起点として、研究者による報告書や研究論文をトレースし、さらに現代の聞き取り資料を接続することで、地域社会の民俗文化の変容過程を描きなおそうとする。声という民俗学のオーソドックスな資料を再捕捉することで、持続的で双方向的な民俗誌の作成を試みている。

最後に内山大介は、福島県会津出身の民俗学者、山口弥一郎の営みについて報告する。山口は昭和三陸大津波後の地域社会の研究者として、東日本大震災後に再評価されてきた。しかし、彼の活動は、決して津波研究にとどまるものではない。初期の炭鉱研究から戦後のダム開発で消えゆく村の調査まで、災害や開発によって変貌・消失していく地域文化を積極的に調査した。また戦中戦後には柳田國男の民俗 3 分類に即しながら、調査者の立場性を意識した民俗誌実践を行っている。地域社会の危機的状況を切り取るのではなく、研究者の立場と地続きの日常的な営みとして、生活文化を捉える山口の研究視座を内山は再評価しようとしている。

持続性という言葉を用いると、中・長期にわたり変化しなかった閉鎖的な生業形態やエコシステムを対象とする研究が想起されがちである。同様に多様性とは複合的な生態や多様な文化が併存し、協調しうる社会基盤が想定される。しかし、日本の地域社会の多くは、近代以前から様々な社会変化や環境変化によって、圧倒的な変容を遂げてきた。本発表では、地域社会が被る様々な人災や天災とそれらによる社会変容を考慮しつつ、数十年から一○○年単位で推移する中期持続の中での共同体の営みについて検討する。対象の持続性や多様性を前提とするのではなく、研究者や調査者が、地域社会とそこで育まれる生活文化の持続性や多様性を可能とする研究や調査のあり方を各々の実践例から検証していきたい。

## 地域の結節点としての民俗学 一西日本豪雨での愛媛県の事例一

#### 大本 敬久 (愛媛県)

2018 (平成30) 年7月7日、愛媛県では記録的な大雨となり、大規模な水害、土砂災害が発生し、死者32名という人的被害が出て、私の自宅および勤務先の愛媛県歴史文化博物館があり、フィールド調査地でもある西予市周辺の南予地方で大きな被害となった。

豪雨当日から古文書等の歴史資料の水損の連絡や対応の相談が入り、翌8日からは現地に赴き、 水損資料を愛媛県歴史文化博物館に移動させて乾燥作業が始まった。歴史資料については200 1年の芸予地震以降、歴史資料の保全活動を継続している愛媛資料ネットと連携して組織的に現 地からの搬出作業を行い、2020年8月現在も吸水乾燥等の作業が続いている。

被災直後は指定文化財や未指定でも既知の古文書、考古資料等がレスキューの対象となり保全活動が進んだが、生活用具等の民俗資料は被災直後ではなく、多くの被災家屋の解体作業が進み始めた2018年秋頃から保全の相談が入るようになり、その種の相談は現在も引き続き入っている。また、有形文化財に比べて速やかな被災対応ができていないと実感したのが、祭りや民俗芸能などの無形民俗文化財への対応であった。特に最も現場に近い被災自治体の文化財担当者は、避難所運営に従事する合間に有形文化財の対処にあたるのが精一杯で、「無形」までは手が回る状況ではなかった。愛媛県歴史文化博物館では被災状況の把握に努めるとともに、地元の伊予銀行が被災した祭り用具等の修理、新調に経費助成を行う「地域文化活動助成制度」を立ち上げて支援をしたという実績もあった。私も各地区の「無形」について、被災前に予め作成していた所在目録を銀行側に提供し、銀行側でも被災の状況把握に努めていただいた。

豪雨後、被災を契機としてさまざまな地域文化に関する再認識が進み、「保存」、「活用」が強く意識されるようになった事例も多い。宇和島市吉田町の吉田秋祭り、西予市野村町の乙亥大相撲等の祭り・行事はその典型であるが、西予市野村町にて、私が講師、ナビゲーターとなり、月1回程度、子ども等を対象に災害伝承や「民俗」(生業・祭り・口頭伝承等)を題材とした地域学習や「町あるき」を実施した。この町あるきでは被災後、解体が進んで変容が続く現状を注視するとともに、継承したい町の遺産が何なのかを参加者が主体的に考える機会として場を設定し、四国西予ジオパーク事業としても実施している。また、2019年10月には西予市野村町内に「災害伝承展示室」が開設され、西日本豪雨の実態を紹介するとともに、「語り部」によるスタディツアー(町あるき)を準備しており、私もファシリテーターとしてその「語り部」養成とツアーの内容選定に参与している。そして愛媛県歴史文化博物館では豪雨災害を取り上げた特別展「四国・愛媛の災害史と文化財レスキュー」を開催した。

地域の民俗研究では各地域の災害に関する伝承・史料の掘り起こしが重要になってくる。①災害伝承・災害史の調査研究、啓蒙活動、②文化財等の資料の保全活動、③被災後の復興、再構築に向けた地域文化の活用、これらを一連の活動ととらえ、復旧、復興に務め、同時に今後起こりうる南海トラフ巨大地震等の大規模災害の防災、減災を見据えておくことが必要となってくる。今回は民俗学研究者が被災地域に積極的関与した活動の一事例として報告をすることとしたい。

# 市民とのインタラクションよる民俗映像の構築 ―宮城県気仙沼市を事例に―

#### 葉山 茂(弘前大学)

民俗映像という手法を使った継続的で相互交渉的なフィールド調査の可能性を考察することである。本報告の事例は、民俗研究映像「モノ語る人びと―津波被災地・気仙沼から」(2018年)の制作過程である。この映像でテーマとしたのは 2011年 3月の東北地方太平洋沖地震による津波で被災した気仙沼市の旧家、尾形家の住宅を対象にした被災資料の収集と資料化の過程である。

尾形家住宅を対象とした被災資料の収集と資料化の活動は、津波によって被災した地域の生活 資料を保全することを通じて、地域の文化資源を発掘、継承することを目的としたものである。 また映像は国立歴史民俗博物館の「歴博研究映像」として制作した。この映像は基本的に複数の 研究者が撮影を担い、かつ編集も研究者自身が担った。

この活動では気仙沼市教育委員会の募集に応じて集まった市民がつねに数名参加して、資料の クリーニングや資料整理などを担当してきた。中心となる2名のメンバー以外は、少しずつ変わってきた。参加した市民の多くは博物館や文化財の整理や管理に携わった経験がなく、当初は文 化財に対して、それがどのような意味を持ち得るのかなどの予備的な知識を持たなかった。

彼らは活動を通じて、作業の合間に、その時々に自分が整理を担当している生活資料に関連した自分の経験を語るようになった。それらの語りは作業に携わる市民が話に参加するなかで自ずと共有され、文化財を整理することを通じて地域の歴史や文化を再認識することにつながった。

映像制作で注目したのは、資料整理に参加した市民の方々がモノについて自らの記憶を語り、 それをチームに共有する営みである。文化財レスキューを市民とともに実践する場合、しばしば 博物館や大学の関係者が市民に対して技術を伝授し、それを市民が実践する構図が想定される。 いわば一方向性の知識伝授と効率的で統一的な作業の実施である。たしかに限られた時間のなか で成果をあげるには、知識の伝授と効率的な作業の運営は不可欠である。

しかしこの活動で重要視したのは、研究者と行政職員、市民が家財の資料化過程に関わり、モノについて語り、資料を作り上げる相互交渉的なやり取りと、その過程で人々が地域に対して理解を深める過程である。この活動では、その過程をビデオカメラで撮影し、地域に対する理解の深まりを記録し、検証できるようにした。また研究者は活動に立ち会い、度々、話題を深く聞き取る調査をした。その結果、市民が経験した内容をより詳細に語る機会も増えた。

さらに撮影した映像は、研究者が編集し、その結果を作業に携わる市民や被災資料の所有者などに見せることにより、新たな語りや理解している内容の修正などを繰り返した。この活動の結果、制作されたのが上記の研究映像である。

上記の研究者と市民の関わりは、アクション・リサーチの一つの形である。あるいは参与観察型のリサーチであり、成果に対するリアクションは被調査者が望む限りにおいて調査者・被調査者の双方に再帰的な理解の深化を促す。もちろん上記の取り組みは調査者、被調査者の立場性、非対称性を無化しない。しかし双方が関与する地域研究の場に映像を導入することは、地域の人々の多声性に注目し、地域研究の拠点を構築する上で有効な手段となるのではないだろうか。

# 文字と声による民俗文化の再構築 一宮城県気仙沼市における持続的民俗誌実践より一

川村 清志(国立歴史民俗博物館)

本研究では、文字資料と聞き取りによる話者の語りを通じて、民俗文化の持続性と現代への展開可能性を検証する。文字と語り、あるいは声との関係性は、民俗学の古典的なテーマである。それらは民俗学のみならず、文化人類学や社会学、あるいは歴史学からも方法論的な有効性が論じられ、検証されてきた。そこでの共通理解として社会や文化の推移は、声や文字を含む様々なメディアが表象する史資料を多面的に捉えることで再構築されるべきであると考える。とりわけ大きな災害がおき、当該社会の基盤が変貌を余儀なくされ、多くの史資料が失われる危機的状況では、研究者たちは積極的に地域文化の「失われた環」の再接続に向かうべきである。

このような問題意識から以下では、宮城県気仙沼市小々汐の尾形家における日記資料と種々の 文字資料、そして現当主らから伺った聞き取り資料をもとに、民俗文化の持続性と多様性を明ら かにしたいと考える。ここで紹介する文字資料については、これまで複数の論稿で紹介してきた。 本発表に引きつけて整理するならば、次のような点を指摘することができる。

まず、東日本大震災後の文化財レスキューで見つかった日記資料を起点として、調査地における民俗文化の推移を明らかにすることができた。とりわけ日記から年中行事に関する記述をピックアップし、それ以後に記された現地調査の報告を重ね合わせていくことで、昭和初期から 100年近い変容過程を再構成しえた。次に日記資料の記述内容を詳細に分類することで、民俗誌の外延を再検討する視座を確立した。日記には生業、衣食住、年中行事などの民俗誌のカテゴリー以外に、戦争や学校、近代医療、新たなメディアの展開などについての記載が確認できた。日記には地域の文化に裏打ちされた規範や論理と、国家的制度や経済網に支えられた近代的な論理と規範が併存している。両者が不断に接触し、様々な交渉を経て展開してきた動態過程を民俗誌の枠組みから捉えなおす基礎的な視座を提示した。

以上の点を踏まえつつ以下では、現代の尾形家の人々からの聞き取りをもとに、民俗文化が近・現代的な文脈に応じて展開してきた側面を明らかにしていきたいと考える。同時に声というメディアによって発せられる歴史性や社会性の特質を明らかにしたうえで、それらを地域文化の多様性として再捕捉することで、現在の生活世界における意義を確認していきたい。いうまでもないことだが、全ての歴史は現在から再捕捉されるものであり、意味づけられるものである。当事者の声を前景化しつつ、時に忘却された資料も辿りながら、地域社会の歴史/物語(hi/story)として共創することが、今日の民俗誌的実践に他ならない。

例えば、尾形家ではオシラサマという神格を祀っていたため、肉や卵を食べてはいけないという禁忌があった。過去の聞き取りによって、卵への禁忌が解かれた経緯は語られているが、その他の肉食の禁忌がどのように解かれたのかは記されてこなかった。これらの過程も合理的思考の浸透や生活習慣の変容といったものではなく、地域社会の民俗信仰に基づく物語化と儀礼的実践が関与したことが明らかになる。聞き取りから得られた「声」による事例を積み重ねつつ、震災以後の社会へとリンクしうる持続的な歴史/物語を提示していきたいと考える。

# 教師・山口弥一郎の地域文化研究 一フィールドの危機と民俗学的実践—

## 内山 大介(福島県立博物館)

東日本大震災発生直後に著書『津浪と村』が復刊され、山口弥一郎は津波研究者として広く知られるようになった。山口は明治35年に福島県会津に生まれ、師範学校卒業後に定年まで殆どの時期を学校教員として奉職しながら、地理学と民俗学を修めた研究者である。生涯にわたり東北を歩いた山口は多様なテーマに取り組んだが、一貫した研究姿勢のひとつに、地域社会が直面する災禍への強い問題意識が挙げられる。災害・凶作・戦争・開発・過疎などによる生活の変貌や消失と向き合い、その課題を教え子や同僚、後輩たちと共に暮らしの現場のなかで考えた。

研究の出発点は大正末に着任した磐城高等女学校時代で、常盤炭鉱の地理学的な調査を行う一方、柳田国男との出会いから磐城民俗研究会を立ち上げ、生徒や同僚の教師と共に地域の伝説や信仰の採集を進めた。また東北帝大の田中館秀三の誘いで始めたのが、昭和三陸津波後における被災地の調査である。被災後に高台移転した集落がなぜ再び海岸へと戻ってしまうのかという問いを自らに課して被災地を歩き続け、背景にある漁師としての生業の問題や先祖伝来の土地・霊魂に対する信仰の問題など、日常の暮らしの営みを見出した。また同時期には凶作や廃村の問題にも取り組んでいる。当時頻発した東北の凶作に際し、食料に窮乏する状況として稗飯を食べる子供が新聞に紹介されたが、山口は凶作常習地の人々が冷涼な地でも育ちやすい稗の食文化を普段から取り入れているのだと考えた。凶作への視点は、それを受け入れ乗り越えてきた地域的背景としての食習や雑穀栽培、さらに名子制度の非常時における相互扶助機能へと展開する。

昭和15年に岩手県北上の学校へ転任すると、山口は農家に間借りして職場である学校に通いながら農村生活の調査を行い、これを「寄寓採録」と名づけた。また終戦後は一切の職を辞して会津の生家で一農夫として暮らし始めたが、そこでは家族と生活を共にしながら地域の民俗を記録する「帰郷採録」を実践する。山口はこれらの「採録」を通じて、柳田が提唱した民俗資料の三分類のうち「寄寓者の学」と「同郷人の学」の実現を目指していた。こうして生まれた成果は、日本が戦時色を強めるなかで荒廃する銃後農村の様子や戦後民主主義の波にのまれて揺れ動く地域社会を、生活者の立場で内側から描いた記録として今に残されている。

帰郷後ほどなく会津女子高校に復職した山口は、再び郷土研究部の生徒を引き連れて各地のフィールド調査を行う一方、地元の教員・公務員・農家の主人などで構成された会津民俗研究会を組織して共同調査を進めた。この頃の山口は「僻村」と呼ばれた山間奥地に営まれる廃村寸前のムラや、高度成長の時代を背景に進むダム建設などの開発や過疎化によって変貌・消失してゆく集落を積極的に訪れ、暮らしの文化をつぶさに記録した。なかでも女子高生と共に昭和28年に行った只見村田子倉の調査は、ダム水没集落の民俗調査としては最初期に当たるものであろう。

教員や研究者として多くの後進を育てるにあたり山口は常にフィールドで考えることを課し、 身近な生活文化への深い理解や問題意識の醸成を目指した。特に多様な要因から危機を迎える地域社会に目を向け、その瞬間を非常時として切り取るだけでなく、危機以前/以降も続く日常のなかでとらえようとした。日常と非日常の交錯によって継承・断絶・変化を繰り返す地域文化への動態的な視点は、災禍の続く現代において我々が改めて問い直していくべき姿勢であろう。

# 病院出産への転換点 一戦後GHQ占領期に何が変わったか一

伊賀 みどり (帝京平成大学非常勤講師)

第二次世界大戦後、日本は軍部独裁の国家主義から国民主権の民主主義国家へと変貌を遂げた。女性は参政権が認められ男女平等の世の中になった。こうしてGHQ/SCAP(連合国軍最高司令官総司令部。以下、GHQと記す)占領期に日本は、民主主義、男女平等、「アメリカ化」が進んだが、これらは出産にも影響を与えた。現代では、女性は一般的に病院か診療所で出産するが、自宅分娩から病院分娩へと誘導されたのは占領期であった。本発表では、助産婦に対する再教育に注目し、自宅分娩から病院分娩へどのように誘導されたのかを、当時の文書資料をもとに明らかにする。

敗戦後、1946 年 10 月~12 月の全国平均の人口動態統計によると、出生場所は施設外 98%、施設内 2%で、圧倒的多数の子どもが施設外 (自宅その他) で生まれていた。介助者は医師 3 %、産婆(助産婦)92%、その他 5 %で、取り上げ婆さんなど無資格者による出産、妊婦一人での自力出産を行う地域もあった。助産婦が介助する場合も、妊婦健診はあまり普及していなかった。

こうした状況のなか、GHQ公衆衛生福祉局看護課の指導のもと、日本の看護制度改革が行われた。助産婦、保健婦、看護婦はいずれも国家資格へ引き上げられ、助産婦と保健婦は看護婦免許が必須となり、教育期間も長くなった。看護婦免許が必須となったのは、病院分娩を前提としたためだった。また、職能団体も、助産婦、保健婦、看護婦は同じ看護職として一つに統合された。現在の日本看護協会である。助産婦会はその助産婦部会となった。そして、新制度の教育水準へ引き上げるため、旧制度の助産婦に対する再教育が行われた。

再教育では、新時代の「助産婦の責務」は母児の生命と健康を守ることとされ、母子保健、衛生指導が重要な職務となった。また、「衛生統計」の講義では、乳児死亡率が「文化国家」の指標であるとし、乳児死亡率を下げることを目標に妊婦健診を行うことが求められた。そして、助産婦は妊婦健診のほか母親学級を開くことにより、母子保健と衛生の向上に取り組んだ。また、再教育では、助産婦は、医師による健康診断を妊娠初期と妊娠末期に各1回受けるよう患者に勧めることと教わった。中国地区の再教育講習会では、助産婦が患者に「妊婦診察依頼状」を渡し、患者が医師による健診を受けて帰宅するまでのロールプレイも行われた。また、GHQ都道府県の軍政部は、妊婦診察依頼状の普及のため、月ごとの配布数を都道府県の助産婦部会長に報告させた。

さらに、厚生省が母子衛生対策要綱(1948年9月)を発表し入院分娩の推進政策へ舵を切る と、それに従った教育が行われるようになった。1950年8月の指導者講習会では、自宅分娩は 経済的に困る人、病院まで遠い人、医療機関の遠い人、家庭から出られないなど事情のある人 が、仕方なく行うものと教わるようになった。それに対し、病院分娩は安全で快適だと教わっ た。再教育において、このように助産婦を病院分娩へと誘導したのである。

人口動態統計によると、1950年の東京都(市部)の施設内出生率は約30%へ上昇した。全国 平均では数%であったが、過半数を占めたのはそのわずか10年後、1960年である。

## 臍の緒と産毛を入れる桐箱

鈴木 英恵 (群馬パース大学非常勤講師)

本発表では、臍の緒と産毛を入れる桐箱に注目する。この桐箱は、助産院や病院で出産を終えた母子が退院する際に、記念として贈られるものである。ここでは、なぜ出産後の母親に臍の緒と産毛を入れる桐箱を託すのかを問題とする。臍の緒と産毛を捨てずに保管しておく心意とその習俗の背景を、人びとの生活文化から明らかにしていくことを目的とする。

臍の緒は、胎児の臍と母体の胎盤をつなぐ管状の器官で、母親と子どもをつなぐ唯一のものである。臍の緒について、大藤ゆきは『児やらい』(1985 岩崎美術社)で、自宅出産であった時代では刃物を使うことを忌み、姑やトリアゲババが臍の緒を竹のへらや貝殻などを使って処置し、臍の緒を短く切ると短気な子、長く切ると長命と述べた。さらに、臍の緒の習俗では子どもが大病をしたときに飲む、裁判があるときに持参する、母親が亡くなった際に棺桶に入れる地域もあった [大藤 1985 85~86]。また、産毛は初生毛そりといった。これは名づけ祝いのひとつで、産毛をそらないと子どもが逆上性になると言った [同上 1985 129]。

『母子保健の主なる統計』(母子衛生研究会編、2020年)の「第11表 市郡別、出生の場所別、出生数及び割合(昭和25年~平成30年)」によると、第二次世界大戦後の昭和25年(1950)の出産場所は、「病院、診療所、助産所」の病院出産が10万6826人、「自宅・その他」の自宅出産が223万681人である。約70年後の平成30年(2018)では、病院出産が91万7130人で、自宅出産が1270人である[母子衛生研究会編 2020 47]。この数値からは、かつて出産場所は自宅で当たり前であったが、現在は病院や助産院の医療機関に移ったことを示している。こうしたことは、聞き書き調査でも確認することができる。

宮城県気仙沼市赤岩水梨子の斎藤やゑこさん(昭和5年生まれ)は、「お産は病気じゃない、自然のこと」と言い、昭和25年に実家でトリアゲバアサンに介助してもらい長女を出産した。臍の緒は、「ハサミで産婆が切ってくれた。長さは、手で一握りできるくらい。臍の緒の二か所を紐で結うと、自然に20日ほどで取れた。臍の緒は、捨てずに包んで取っておいた」と言い、さらに「子どもが病気になったとき、自分の臍の緒を煎じて飲むと、病気が治る話は聞いたことがある。自分はしたことがないけど」と語る。とくに、産毛を剃る習慣はなかった。昭和29年に長男を出産したが、このときの出産場所は気仙沼市内の病院であった。

つぎに臍の緒と産毛を入れる桐箱の特長をあげたい。実際に助産院で扱っている事例として、福井県敦賀市三島町のたきざわ助産院のものを見ていく。この桐箱は、手のひらに乗る大きさである。形状は長方形で、縦五・五センチ×横八・〇センチ×高さ一・八センチ(上部の蓋を閉めた状態)である。桐箱の表面には金字で大きく「寿」とあり、「御臍帯納 御産毛納 瀧澤助産院」と印字され、羽を広げて飛び立つ鶴、甲羅に緑藻が生えた亀が描かれる。これらはいずれも吉祥文様で、縁起の良い図像として人生儀礼の場で好まれる。

臍の緒は個人の生死に関わる問題が生じた際に、用いられてきた。このような習俗の背景から、 密閉性が高く保存に優れた桐箱に入れて、後の世まで臍の緒と産毛を残そうとする心意が窺える。

# 共有される俗信、検索される俗信 -Web 上に見られる妊娠ジンクスを中心に-

## 永島 大輝(栃木県)

コロナ禍において、家から出られないという向きも多い。現地へ赴くことや、東京の図書館へ行くことが出来る日が早く来ることを願っているが、この時代にできることとして、インターネット上の俗信の確認をしておきたい。そして、それはコロナ後の世の中でもなされていく仕事であろう。インターネットが生活に与える変化についてはすでに均質化・標準化の傾向が指摘されている。

価値観が多様化した現代の出産や育児には、個々人の状況により様々な選択肢が存在する。人生はその時々の状況に合わせた選択によって形作られる。だが人は、選択肢が複数あると、なるべく無難な、平均的な選択肢を選ぶ傾向にある。たとえば、インターネット上でツイッターやインスタグラムなどに発信される個人の情報を入手し、選択の際の参考にすることが多くなった現在の出産や育児の実践は、選択する個人の様々な事情と、均質化・標準化とのせめぎ合いの中で行われている。(猿渡土貴「出産と育児 激変する環境の中で」「日本民俗学」300 2019年11月)

今回は妊娠ジンクスと呼ばれる俗信を中心に集めた。まずは種類と傾向の確認をしたい。 妊娠や育児に関してはまたのぞきや男女の産み分けなどいろいろあるが。子授け祈願に限っても

- ①コウノトリキティちゃん ②さるぼぼ ③マトリョーシカ ④木村さんの画像
- ⑤子宝草 ⑥妊婦さんと関わる ⑦富士山 ⑧ベビーシューズ ⑨数の子 ⑩ザクロなどがすぐに見つかる。過去の俗信の変化ともいえることを指摘。

芸能人の blog やウェブ上の女性のコミュニティからwebの外へ拡散してゆくことも確認したい。

現在の俗信を把握することで、これまでの俗信研究にも還元できる。

俗信には、コウノトリ言説や虹の橋言説など、もともとは海外由来と考えられるものも多くなっている。これを均質化・標準化の傍証とする一方で、赤富士などはローカルな変容ともいえよう。

重ねられる俗信、祈願においてはよく見られることなのだろうが、様々な俗信が集まり、一つ の俗信を形成してゆくことも確認する。

#### 参考文献

加藤秀雄「虹の橋と地獄の人参:その発生と電波をめぐる考察 (ニ)」「世間話研究」 26 2019

## 尾張における初七夕の分布について

## 鬼頭 慈都(名古屋民俗研究会)

七夕の行事といえば、枝に願いごとを書いた短冊を結び付けて飾り、その笹竹を立てることが 普通である。それとは別に、七夕の一か月後の八月七日に小学校にあがった7歳の子どもがいる 家で行なわれる初七夕がある。座敷の縁側や床の間などに、短冊や折り紙、デングリ、吹き流し などで賑やかに飾った笹竹を立て、その下には西瓜や瓜や家の畑で収穫された初物の野菜などを 供えた。この時に吊るされる切子灯籠や提灯は、嫁の実家や親戚など親しい人から贈られること が慣例であった。

初七夕はかつて家の行事であったが、小学校や幼稚園、保育園、子ども会などで七夕祭りが行われるようになると個人の家で行うことが少なくなり、近年はほとんどみることができなくなった。初七夕が近所の家々で豪華さを競うようになり、それを避けるために子ども会でまとめておこなうようになったという事例もある。初七夕をおこなわなくなった理由として、七夕に使う大量の飾りやそれを飾り付ける笹竹、切り子燈籠を手に入れることが難しくなったこと、経済的な負担が大きいこと、核家族化が進み習俗の伝達が途切れたことなどがあげられる。今年はコロナウイルスの影響もあり取りやめたところもあった。

過去の刊行物や調査データをみると尾張の広い範囲で初七夕の分布を見ることができる。その 地域全域でおこなわれていたことを示すのでなく、初七夕を祝う家があったということを表して いる。なぜならば、初七夕は本来、各個人の家で祝う行事であり、同じ地域でも祝う家と祝わな い家があるからである。前述した通り、大きな笹を縁側、もしくは部屋いっぱいに飾るので、飾 るスペースがある家でなければできなかった。

初物を供えることから農耕儀礼との関連が考えられ、それは農村部で多くみることからも物語っている。では、マチには事例がないかというと名古屋市中区や津島市、犬山市でも事例を確認することができた。もともとその地域にはない習俗であるが、嫁の実家が初七夕を行なう家なので切子灯籠が嫁ぎ先に贈られたケースや、親が初七夕を祝ってもらった経験があるので自分の子どもにもと初七夕をおこなう場合もあった。そのため、分布の範囲が広くなったと考えられる。このように、個人の事情で伝播する性質があることを考えれば、初七夕は地域の習俗というよりは家の習俗であり、嫁ぐことで伝播するという点が興味深い行事といえよう。

# 中国青海省の葬送習俗について 死者から見た葬礼

#### 李 生智(國學院大学大学院)

本発表では、中国青海省の農村部における漢民族の葬送習俗の葬礼の作法と死者との関係性について分析し、そこにどのような葬送秩序が反映されているかを明らかにする。そして、こうした葬礼の作法と死者との関係性に確認できる葬送習俗が、青海省の漢民族の中でどのように伝承されているのを追跡してみたい。

中国大陸の西北部に位置する青海省のうち、省都の西寧市などの都市部では火葬を行っているが、農村部の漢民族の間では現在も土葬を続けており、従来の葬礼作法を確認することができる。そうした農村部の葬礼は、祝寿、臨終、祭奠(弔問)、埋葬、祭祀の5段階で構成されている。人々は生前から死後の準備を進め、死後は自宅で儀式を執り行い、遺体は村はずれの宗族共同墓地である「祖墳」に土葬する。しかし、すべての死者に対してこの手順の通りの葬礼が行なわれるわけではない。死者は①年齢、②後人(跡継)の有無、③両親・舅姑(女性死者の場合)の有無、④経済環境などの基準で区別され、葬礼の手順や祖墳への埋葬の可否が決定される。

こうした基準を元に、青海省農村部の漢民族の葬礼を以下の5つの類型に分類した。

類型1【未成年型】未成年の死者の葬礼は、全て小規模で、家族と親しい親戚のみで行われる。 そして、死者の遺体を村と遠く離れた山奥の、「乱墳岡」という未成年を埋めるための野地に埋葬 するか、火葬後に遺骨を黄河や高山などに散骨する。葬礼は遺体の処理を含めて通常一日で完了 する。

類型 2【成年未婚型】死者が成年かつ未婚の場合、葬礼は宗教的職能者を招請し、宗族、親戚、村人を集めて行われる。しかし、宗教的職能者の人数や弔問客に振る舞う料理の数は一般の葬礼に比べて制限される。さらに、遺体に寿衣とともに孝を着せ、新設した墓地に埋める。

類型 3:【婚後無後継者型】死者が結婚しており、かつ男性の子供ができなかった場合、同じ宗族の甥を後人(跡継)にする。あるいは、娘を招婿婚にさせ、娘婿を死者自分と同じ姓氏に変更して後人とする。こうして後人を決定した後、死者の両親・舅姑(女性死者の場合)が存命かどうかによって、葬礼の作法を決める。

類型 4:【父母存命型】死者が後継者を持ち、かつ両親・舅姑(女性死者の場合)のどちらか一方が存命の場合、葬礼は陰陽先生などの職能者を招請し、宗族、親戚、村人を集めて行われる。招聘する宗教的職能者の人数や料理などは自由に決めて良いが、豪華であることはない。

類型 5: 【理想型】 死者が後人(跡継)を持ち、かつ両親・舅姑(女性死者の場合)が全て死亡している場合、葬礼は喪家の経済力の範囲内で華やかに行われる。

このように、青海省農村部での漢民族の葬礼では一定の判断基準によって、その作法、死者の 埋葬場所、族譜への記名など、葬礼の形態が区別されることを確認できる。このような葬送習俗 は儒教の「礼・孝」の思想が影響した葬送秩序を反映している。また、こうした葬礼作法そのも のも経済発展や政策に左右されて、多くの変化を生じてきている。

## 沖縄における「殯葬」の展開に関する一考察

## 牛窪 彩絢(東京文化財研究所)

東アジアの葬制を研究していると、「殯」という言葉によく出くわす。これは「人が死んで葬るまでの間、屍を棺に収めて仮に安置しておくこと(『大漢和辞典』)」とされており、五来重などは殯が衰退して現代に残存したものが通夜であると見ていた。この真偽は今は置くとしても、臨終から葬るまでの一定期間遺体を安置するのは、現在でも日本含め東アジアに見られる習俗と言える。

研究として有名なのは、古代日本における「殯(もがり)」に関するものだ。人の死後、埋葬地とは別の場所に仮屋を建て、棺に収めた遺体を安置し、大声で泣くこと(哭泣)や、歌舞、飲食などを伴う儀礼を行ったことが、『魏志』倭人伝や『万葉集』、記紀神話などに表れている。身分によってもがりの長さは異なったようだが、史料によると、天皇のそれは数カ月~数年に及んでいた。古代日本のもがりについては折口信夫や五来重はじめ、多くの民俗学者や歴史学者が研究成果を積み上げており、考古学的にもがりを証明した研究としては、田中良之のものが有名である。「殯」は元々、『儀礼』など中国の儒教の経書に見られる葬礼であることから、中国の殯と日本のもがりの比較研究も行われてきた。また、韓国における死体を一定期間地上に置いた後に骨を拾い上げて埋葬する習俗「草墳」と、日本の複葬の習俗との比較研究をする試みもある。

一方、もがりを含む古代日本の葬送を考える上で、沖縄の葬制もよく引き合いに出される。沖縄では、戦後に火葬が定着するまで広く風葬と洗骨改葬が行われていたことが知られているが、この二重葬を経て死者が"祖先"へと変化する構造に、もがりの構造や古代日本の霊魂観を見出し得るからだ。また、伊波普猷の著名な「南島古代の葬制」における、「風葬中の死者のもとへ家族・友人が毎日顔を見に行き、酒肴や楽器を携えて思う存分に踊り狂った」という趣旨の報告などに、単純にもがりとの親和性が感じられるからである。

しかし、れっきとした「殯葬」という文字が、琉球の第二尚氏王統の陵墓・玉陵の厨子内に残された木製誌版に書かれていたという事実に気が付いている学者は、それほど多くはない。また、玉陵復原修理報告書や『王代記』によると、逝去してから玉陵中室に棺を移葬するまで、4~13日ほどの期間が設けられており、これが「殯葬」に当たることが確認できる。更に、朝鮮の史料『海東諸国記』「琉球国」条(1501)には、国王の喪の際に山に屋を造って安置し、10日程親族・妃嬪が屋に参会した後、洗骨が行われたことが記されている。つまり沖縄では、骨化を目的とした風葬と区別され得る、10日前後の「殯葬」の期間が設けられていたことが分かってくるのである。

本研究は、この沖縄における「殯葬」がいかなるもので、どのように展開してきたのかを、構造や歴史に着目しながら分析することを目的とする。これまで沖縄の葬制を「殯」に注目して研究したものは皆無に等しく、本研究は沖縄の葬墓制研究、および日本本土のもがり研究両者に資する情報を提供できると期待できる。また、「殯」は沖縄と日本本土のみならず、東アジアの葬制を貫くテーマであるため、本研究が東アジアの歴史的繋がりを考える上でも有益な示唆を提示することになると期待したい。

# 都市の「樹木葬」と「生活感覚」 〜東京都港区の寺院墓地を例に〜

## 越智 郁乃(東北大学)

2018年に行われた第 10 回お墓の消費者全国実態調査によると、新規に購入される墓の形態 1 位が「一般墓(屋外で墓石をシンボルとした墓)」から「樹木葬(屋外で木をシンボルとした墓)」に変化した。この「樹木葬」は、山などの自然に還す葬送方式(=「里山タイプ」)とは限らず、庭園内の区画された場所に墓石を配し、その下に納骨する「庭園タイプ」、共同合葬する「公園タイプ」が含まれ、「庭園タイプ」が占める割合が半数を越える。

現代日本の墓地での慰霊形態の変化を論じた藤井(2003)は、寺壇関係から民間霊園へ、墳墓が塔式から横型へ、墓石に刻む文字が家名から「寂・愛・眠・心・憩」などの抽象文字へと変化したことを明らかにしながら、現代の墓は先祖代々の霊の休まるところから自己の死後の住処と考え、生き様を刻み、子供とのつながりを志向していると指摘する(藤井 2003:21)。それでは近年増加する「樹木葬」は何を志向しているのだろうか。

日本の葬祭業について論じた田中は、民俗モデルと地域慣習の組み合わせに根差した「儀礼のやり方」という従来の文化人類学的視点だけでは、現在の「葬儀のつくられ方」は充分に説明できないと指摘する。現代における葬儀は慣習に全面的に追随した実践ではなく、さりとて供給・消費関係のみで成立しているわけではない。さほど違和感なく結びつき、時と場合によっては違和感として結びつく(田中 2017:5-6)。墓の変化に関しても同様のことが言えるだろう。造墓に関わる発業の存在は、購入者に大きな影響を与えるものとして否定的に語られがちであるが、「樹木葬」をめぐる購入者・利用者と事業者の交渉を経て、どのように「樹木葬」が作られているのかという観点から考察を進める必要があると考える。

そこで本報告では、様々なバリエーションを含む「樹木葬」のうち「庭園タイプ」に注目し、「墓のつくり方」に注目しながら、近年増加する「樹木葬」は何を志向しているのかを考察する。具体的には、東京都内の寺院墓地とそこで「樹木葬」を企画・販売する会社への現地調査と聞き取り調査を行った。墓地開発の経緯、墓地の現状と構造、利用状況、墓石と刻銘、遺骨の状態や合葬までの期間に関する調査を行う過程で、本事例は都市の庭園型永代供養墓と表現する方が内実を表しており、郊外の都営霊園と比較した際の立地と利便性などが購入者に重視されていることが分かる。しかしながら「樹木葬」をいう名乗りは、見学者による「樹木葬みたいですね」という感想を端緒とする。その庭の美しさから「里山タイプ」の樹木葬に見られるような「手つかずの山は寂しい」「姥捨て山」というネガティブな意識を和らげ、かつ「公園タイプ」のような共同埋葬ではなく、小さくとも「一般墓」と折衷する形で個々の墓標・墓石を持つ形式の「庭園タイプ」が利用者に好まれる様相が明らかになる。こうした「樹木葬」を提供/選択する人々からは現世の「生活感覚」、つまり家電を買う、また住宅を買う/借りる際の選択基準に近いものが伺える。

引用文献:田中大介 2017『葬儀業のエスノグラフィ』東京大学出版会、藤井正雄 2003「現代の墓地問題とその背景」比較家族史学会監修、藤井正雄・義江彰夫・孝本貢編『家族と墓』早稲田大学出版会

# 真宗地域の無墓制とオソウブツにみる寺院と門徒の関係性 - 岐阜県旧春日村の事例から-

## 本林 靖久(大谷大学)

本報告では、真宗地域と言える岐阜県揖斐川町春日地区(旧春日村)の葬墓制(無墓制とオソウブツ習俗)の実態について明らかにする。そのなかで他宗旨寺院とは違う真宗寺院と門徒との関係性を真宗民俗として提示し、現代における真宗民俗の変化についても言及したい。

旧春日村の墓制については、『春日村史(下)』に、「春日村は一般に無墓制地域で墓はない。しかし、最近ではムショか自己の屋敷地内に石塔を建てる傾向が見られる」と記載されている(春日村史編集委員会 1983:1020)。現在(2019)も、墓を持たない村もあれば、かつての村の火葬地や屋敷地内に家墓を持つ村も見られている。しかし、昭和40年代まではほとんど石塔を持たなかった地域であることは墓石の建立年からもうかがい知れる。

日本民俗学では、真宗地域に石塔を持たない無(石塔)墓制の事例が報告されてきた。その理由においてはいくつかの見解が提示されているが、森岡清美は、従来指摘されてきた経済的要因や地理的条件に多少の関係があることを認めながらも、最も基本的な要因として、真宗の伝承的な教義が手次寺納骨、ことに本山納骨の儀礼と結びつき、その一方で、墓の代わりを各家の仏壇や手次寺の本堂が担ったことによって成立したものであると述べている(森岡 1978:237)。

無墓制は本堂を「集合詣り墓」とする森岡の指摘を踏まえると、真宗地域の伝統的葬儀に用いられてきたオソウブツについて検討する必要があると思われる。蒲池勢至は、オソウブツとは、「真宗門徒の葬式に際し手次寺(手次寺)から喪家に貸し出される阿弥陀如来の絵像」であり(蒲池 1999:262)、「寺の本堂に安置してある絵像本尊を、喪主が借りにきたりすると住職が一緒に同道して行き、床の間に安置して葬儀がこの絵像の前で執行される。親戚の者が絵像の軸を首から下げて持っていったりもし、これをホトケサンのお迎えなどともいう。葬儀が終ると再び寺に返却され、このとき仏供米や表具代などが上げられる。絵像の裏書によると中世末期から近世初期のものも多くあり、かつての道場本尊であったことがわかる。仏壇成立以前の信仰形態や葬送儀礼の姿を考えさせる習俗と捉えることができる」と指摘している(蒲池 同上)。

旧春日村においても、門徒の葬儀で真宗寺院が所蔵する阿弥陀如来の絵像本尊を貸し出して葬儀の本尊とするホトケサンと呼ばれる習俗が見られてきた。しかしながら、現在は寺院から門徒へのホトケサンの貸し出しはほとんどないと言う。特に村落内で完結していた葬送儀礼が、平成17年頃から地区外の葬儀会館で行われるようになると、葬儀の変化によって、寺院と門徒を繋ぐオソウブツの習俗が消滅しようとしている。この真宗民俗の消滅過程が、今後の真宗寺院と門徒のあり方にどのような影響を与えていくのか、無墓制の今後とも絡めながら報告してみたい。

#### 〔参考文献〕

春日村史編集委員会,1983,『春日村史(下)』.

森岡清美,1973,『真宗教団における家の構造』お茶の水書房.

蒲池勢至,1999,「おそうぶつ」『日本民俗学大辞典(上)』吉川弘文館.

# 京都・御霊祭・末廣神輿考 一なぜ彼らは「えらいやっちゃ」と踊るように神輿を舁くのか―

## 中西 仁 (佛教大学大学院)

神輿の舁き方に焦点を当てた研究は管見の限りでは非常に少ない。ある神輿舁き集団が、「神輿をどのように舁くか」、「なぜそのような舁き方をしているのか」という問いは、一見「ささいな」問いのように見えるが、個々の神輿舁き集団にとって来歴やアイデンティティに関わる重要な問題であり、問いの探求によって祭礼のさまざまな側面も見えてくる。

京都の大型都市祭礼の神輿渡御の場に於いては、「ほいっと」という掛け声とともに、舁き手全体で息をあわせ、担ぎ棒(「轅」「だいぼう」)の前後に付けられた鳴鐶という金具を鳴らす舁き方が一般的である。「京都標準」とも言える上記のような舁き方に対して、「えらいやっちゃ」の掛け声とともに舁き手が踊るような舁き方をするのが、上御霊神社の祭礼御霊祭の末廣神輿である。和崎春日によれば祭りには「祈り・儀礼性・信仰性・宗教性の部分と、共同的な祝い・戯れ・遊び・騒ぎ・祝祭性の両方向性」があり、「共同的な祝い・戯れ・遊び・騒ぎに力点」があるのが祝祭である。末廣神輿は、京都では珍しい芸能的、祝祭的な神輿の舁き方といえる。

なぜ末廣神輿の神輿舁達は「京都標準」ではなく、「えらいやっちゃ」と踊るように神輿を舁くのか。 末廣神輿は、近世初めの天皇の鳳輦に由来する御靈祭の他の二基の神輿に比べて新しく、元々他の神社の神輿であったものが、明治に入ってから上御霊神社の管理するところとなった神輿である。末 廣神輿を任され御霊祭に新規参入したのが、末廣神輿の神輿舁き集団の地元となる鞍馬口村の人々であるが、鞍馬口村が上御霊神社の氏子地域となったのは、やはり他の氏子地域に比べて新しい。すなわち上御霊神社の氏子としての承認の喜び、かつて京都の四大祭(祇園、稲荷、今宮、御霊)と呼ばれた祭りへの新規参入の喜びが、ユニークな神輿の舁き方の開発につながったのであろう。

では「えらいやっちゃ」と掛け声をかけ、踊るような神輿の舁き方は何に由来するのであろうか。 近世から鞍馬口村に存在した末菊大神は、現在も末廣神輿の見せ場となっているが、この神は瘡神 (疱瘡神)である。近世には疱瘡神を賑々しく境界の外に送り出す疱瘡送りが全国各地で盛んに行われた。末菊大神は「御土居」と賀茂川の狭間、洛中と洛外の境界線に鎮座する。この地は疱瘡送りに相応しい地である。御霊祭はもともと御霊会であったが、厄神である「疱瘡神」を喜ばせ福神に転じる「疱瘡送り」と、祟りをなす御霊を宥め都の外に送り出す御霊会は、目的、方法に於いて相似である。鞍馬口村の人たちは神輿を舁くにあたって、疱瘡送り、御霊会における神の祀り方から、「神を喜ばすように神輿を舁くべし」という思いに至り、そのことが祝祭的な神輿の舁き方につながったのではなかろうか。

鞍馬口村の人々は近世には賀茂川の修復に関わっていた。安政三(一八五六)年の「砂持」は、近世の賀茂川(鴨川)の修復として最大のものであるが、鞍馬口村の人々も公儀人足、もしくは日用として関わっていたと考えられる。「砂持」を描いた「京都加茂川遊覧ノ圖」には、末廣神輿の舁き方を髣髴させる土運びの人足が描かれている。このことから末廣神輿の舁き方は鞍馬口村の人々の生業からくる所作、身体性が影響しているとも考えられる。

末廣神輿の神輿舁達は、末廣神輿と「えらいやっちゃ」と踊るような舁き方を、「京都標準」の舁き 方に対抗するかのように誇らしく現在まで伝えている。それは神輿及び舁き方が地域のアイデンティ ティの核となっているからであり、「えらいやっちゃ」と踊ることが地域や家族の結束を固めているか らである。

# 区分される参加者 一諏訪大社御柱祭の木落しと川越しを事例として―

石川 俊介(追手門学院大学社会学部専任講師)

本発表は、祭礼において当事者が標榜する「安全」を考える端緒として、明らかに危険と考えられる行事が、どのように行われているのかを明らかにすることを目的とする。

祭礼の会議や準備で必ず聞かれるのが「安全」という文言である。安全対策を念入りに行うこと、さらには、対策を行っていることを説明することは、祭礼の正当性を担保するために最重要であることは間違いない。では、目指される「安全」とは具体的にどのようなものなのだろうか。本発表で事例とする諏訪大社御柱祭では、急な坂の上から人を乗せた御柱を滑り落とす「木落し」や、人を乗せて川に御柱を落とし対岸に引き上げる「川越し」が行われる。参加者は御柱の下敷きになったり、跳ね飛ばされたり、溺れたりする危険を認識したうえで参加している。これらの行事に参加するのは、事前に入念な準備を行ってきた一部の参加者である。

諏訪大社の御柱祭(式年造営御柱大祭)は6年に一度、申と寅の年に行われる。上社・下社各二宮の御柱、計16本の建て替えが遷座祭に伴って行われる。この建て替えに奉仕するのが、諏訪地域6市町村の氏子である。御柱祭では、御柱となる樅の巨木に穴を明け、綱を結わえる。この曳き綱を氏子が引っ張り、御柱を運ぶ「曳行」に奉仕する。綱を曳く氏子を一般的に曳き子と呼ぶ。他方で、役をもつ氏子は「○○係」と書かれた腕章や鉢巻きを着用していたり、揃いの衣装を着ていたりしている。

役をもつ氏子を本発表では便宜的に「役付きの氏子」と呼ぶが、彼らは事前の準備段階から係に所属し、祭りの期間中は基本的に行動を共にする。一部の係を除いて、10代後半から60代の男性によって構成されている。人数については各担当地区で違いがあるが、発表者が2010年に調査を行った金澤・富士見地区(上社)では500名ほどであった。

係には明確なメンバーシップがある。富士見地区の元綱係(曳き綱の根本部分を担当する係)は、いくつかの班に分かれており、練習や会議の出席管理がなされていた。他方で、曳き子には明確なメンバーシップはない。役付きの氏子をリタイアした男性、女性や子供、帰省した出身者などの老若男女によって構成されている。その多くは地区や市町村の法被を着ているが、衣装に統一的なコードは存在しない。綱をどれだけ曳くかどうかについても自由である。そのため、曳き子の数は日や時間帯によって増減するとされるが、各柱で約1,000~5,000人ほどである。

曳行中、各係は曳行責任者や係長の指示を受けたり、他の係と連携したりしながら、それぞれの仕事を担当する。他方、曳き子たちは役付きの氏子たちの指示に従う。しかし、木落し・川越しでは様相が変わる。一部を除き、曳き子は曳き綱から離され、安全な場所に移り、行事の一部始終を見守る。行事が終わると再び曳き子は綱に戻り、曳行が再開される。

このように、役付きの氏子によって木落し・川越しといった「危険」な行事が行われる。これは、老若男女によって構成されている曳き子の「安全」を確保するためと考えられる。他方で、参加する役付きの氏子の「安全」に寄与するためとも考えられる。危険とされる行事には、事前練習や打ち合わせによって共通認識ができている役付きの氏子しか参加できない。すなわち、これらの行事においては参加者が大きく2つに区分されるのである。

# 民俗文化継承基盤としての地域の生業変化 一愛知県知多「梯子獅子」奉納の神社例祭日の変遷に注目して一

牧野 由佳(総合研究大学院大学博士課程)

発表者はこれまで愛知県知多市朝倉の民俗芸能・朝倉の梯子獅子の研究を行なってきた。本芸能は、知多半島の北西部の沿岸に位置する旧朝倉村の村社 牟山神社の例祭で神事芸能として奉納される。また、牟山神社例祭は、現在毎年 10 月第一日曜日に行なわれているが、以前は異なる日にちに奉納され、江戸時代以来、現在まで四回程度日程変更が行なわれた。この日程変更の詳細は知多市文化財資料第 11 集『朝倉の梯子獅子』(1970)等に記されているが、発表者が実施した歴史資料調査により、先の文献に示された内容には一部事実と異なることが明らかとなった。また、近代の日程変更の背景がはっきりと解明できることがわかってきた。本発表では、朝倉地区を事例にして祭日の変更と社会生活、特に生業とのかかわりに着目して考察する。

例祭の変更に関する先行研究としては、明治期の新暦使用の影響や国家神道との関係を指摘した論稿や、戦後、観光業の促進や祭りの担い手不足解決のための変更の実態を明らかにした論稿等を挙げることができる。だが、本発表のように、生業との関係に注目した研究は管見の限りこれまでなかった。しかしこうした視点は、社会生活の中に祭りがどのように根付いてきたか、また、それがどのように変化したかを知る一助となると考えられ重要である。

発表者の調査によると、近代における牟山神社の例祭日変更の一因は養蚕業にある。朝倉地区や知多市域における近代の養蚕業の隆盛に関しては、『知多市誌』や『知多市村落民俗誌』にも記述があるほか、発表者による聞き取り調査においても知ることができたが、昭和初期まで養蚕業はどの農家でも行なっていたというほど地域に定着した産業だったという。神社所蔵の文書には、大正期、養蚕の技術が高まり、秋蚕や晩秋蚕の従事者が増加したが、例祭の日程が飼育期にあたるため産業に支障がきたしてしまうという氏子の状況が記される。新たに発展した養蚕業は貴重な現金収入の機会だったと考えられるが、明治期まで9月に実施していた例祭は、養蚕の繁忙期と重なっていたのである。氏子たちにとっては生業による利益獲得の支障となり、例祭が重荷に感じられるようになったと推察される。そこで、秋蚕や晩秋蚕の飼育に支障が出ないように、例祭日を10月に変更することにより解決しようとしたのである。

このように、近代においても神社の例祭日の決定は、必ずしも信仰や国家政策によるものばかりではなく、地域社会の状勢や生業ともかかわっていたことがわかる。本発表では、養蚕のほか、朝倉の主要な生業のひとつである農業の一年のサイクルとも関連付けながら、大正期の例祭日の変更について検討したい。加えて、昭和初期に新たな産業として盛んに行なわれるようになった海苔養殖にも着目し、生業と例祭日との関係を考える。

発表者は、また、神社の祭日変更に着目して研究を進めることにより、奉納芸能について理解を深めることができると考える。奉納芸能の意味解釈については、2020年に『民俗芸能研究』 69号において発表した拙稿においても考察しているが、上記の視点も加えることにより、さらに研究を深めたいと考えている。

なお、参考文献については、当日の発表資料にまとめて記すこととする。

# ニュータウン開発後における道祖神行事の興隆 一東京都多摩市の事例から一

松尾 あずさ (東京都)

本発表は、東京都多摩市においてニュータウン開発に伴う区画整理後に道祖神行事が興隆をみているが、それはどのような工夫によりなっているかという点について考察するものである。

多摩市の道祖神行事について、多摩市史編さん事業により男子が各家から正月飾りを集めて道祖神の近くにコヤを立て 14 日の夜に焚き上げる事、行事はほぼ講中毎におこなわれる事、コヤを焚き上げる際にコヤを投げ入れる所もある事、呼称の変化がみられる事等が明らかにされた¹。

さて、開発後に道祖神行事が興隆をみることは矛盾しているようにも思える。しかし、市域の大半の部分でニュータウン開発がなされた本市では、急な都市化と集合住宅における核家族化による影響を多摩市青少年問題協議会<sup>2</sup>が危惧し、1970年代以降伝統的な行事等が再評価される状況もあって、協議会の下部組織である各地区委員会(小学校区)が道祖神行事に取り組み始めた<sup>3</sup>。その結果、開発により建設された集合住宅群の地区委員会は従来の道祖神行事にない要素を加えて実施し<sup>4</sup>、区画整理を受けた地区においては自治会(講中)<sup>5</sup>あるいは各地区のコミュニティーセンター運営協議会<sup>6</sup>が主催し、各地区委員会は共催としておこなうようになった。

本発表で報告する道祖神祭は、開発に伴う区画整理を受けた地区において、開発中も地区内の 複数の講中が維持していた道祖神祭を、コミュニティーセンター運営協議会主催として以前より 規模を大きくして実施するようにしたものである。本館は旧村2村の5自治会(講中)の人々が 利用しており、さらに開発後に転入した人々も同運営協議会や本行事に参加している。

2020年に実施された本行事は、2トントラック 2 台分の茅、約 5 0 本の孟宗竹(寺境内の竹林)を刈り出し、高さ 5 m×直径 6 m程のセーノカミのコヤ(呼称:ヤグラ) 1 体と、高さ 1. 5 m程の 2体の小学 4 年生のコヤ(同:ミニどんど)を作り、集めた正月飾りを飾って焚き上げた。また、来場者の団子焼きのために 500 本の篠竹が伐り出され、団子 2,500 個も作られた。行事の準備から後始末まで 2019 年 12 月から 1 月にかけて合計 8 日が充てられた。

本行事の準備から後始末までを通してみると、コミュニティーセンター運営協議会、5 自治会、地区の家々を檀家とする寺、消防団地区分団、屋根葺きの相互扶助、青少年問題協議会地区委員会、中学校ボランティア、小学校の総合学習といった新旧の社会的な組織や仕組み等と、学校教育における取組みが生かされており、このような工夫により幅広い世代の人々、さらにはニュータウン開発以後に転入してきた人々も巻き込んで本行事が興隆を見ていることがわかる。

<sup>&</sup>lt;sup>1</sup>山崎祐子(1993)「乞田・落合の年中行事」多摩市史編集委員会『多摩市の民俗(信仰・年中行事)』多摩市: 山崎祐子(1997)「年中行事」多摩市史編集委員会『多摩市史民俗編』多摩市。

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> 多摩市青少年問題協議会は、地方青少年問題協議会設置法(昭和 28<1953>年法律第 83 号)に基づき多摩市 (設置された昭和 3 5 年当時は多摩村)の首長の付属機関として設けられた。

 $<sup>^3</sup>$  多摩市青少年問題協議会(1973-1977)『多摩のこども(青少協だより)』創刊号—11 号、多摩市教育委員会。

<sup>4</sup> 松尾あずさ(2003)「多摩ニュータウンのドンドヤキ」『民俗学論叢』18

<sup>&</sup>lt;sup>5</sup> 松尾あずさ(2017)「ニュータウン開発後の年中行事の維持―東京都多摩市山王下のセーノカミー」『西郊民 俗』 241

<sup>6</sup> 多摩市が市内各地域に設けた市立コミュニティーセンターの管理・運営業務を受託する団体。

# 「物忌」のゆくえ 一伊豆諸島における来訪神伝承の消長―

#### 辻 凉香 (関西学院大学大学院社会学研究科)

本報告は、伊豆諸島の来訪神伝承を事例に、語り手の立場に注目し伝承の展開を考察したものである。

伊豆諸島では一月二十四日の晩に来訪者が現れるとされるため、厳しい「物忌」が行なわれている。 島民は外出をせず、自宅で物音を立てないように籠る。「物忌」を行なわなかった場合、その者は不幸 が訪れると伝えられている。ただし、神職のみが外に出ることを許されており、浜で来訪者を迎える 役目を担っている。島民が「物忌」を行なう点と神職の役目は八丈島を除いた伊豆諸島全域で共通し ているが、来訪者の名称とその正体に関する伝承は島ごとに異なる。「日忌様」、「海難法師」、「二十五 日様」などと呼ばれており、その正体はそれぞれ「悪代官を倒した島民の霊」「島民に殺された悪代官 の怨霊」「神」などとして語られている。

伊豆諸島の物忌、来訪者伝承の研究は数多く蓄積されてきた。その中で、山口貞夫(『地理と民俗』一九四四)は、伊豆諸島の「物忌」はもともと神を迎えるための儀式であったが、人びとの信仰が「低下」した結果、来訪者の正体が「神」から「霊」や「妖怪」になったとする見解を提出している。しかし、報告者は、伊豆大島・神津島での現地調査の結果、神か妖怪かの違いは、山下が主張するような単純な一元的変化(「低下」)によるものではなく、伝承者のおかれた立場の違いに起因していると考察した。

来訪者を迎える司祭者を「中心的立場」、物忌を行なう一般家庭を「周辺的立場」として位置づけた場合、中心的立場の者は、自分たちは「神」を迎えていると認識しているが、周辺的立場の者は、何を迎えているのかを知らずに厳重な物忌のみをするため、その行為の理由付けとして恐ろしい「霊」や「妖怪」が訪れると認識するようになり、島内の伝承に重層性が発生したと指摘できる。しかし、司祭者の家が絶える等の理由で、中心的立場による祭祀が行なわれなくなると(中心の空洞化)、周辺的立場による「霊」や「妖怪」の伝承だけが残される。これは、信仰の「低下」というよりは、重層性が消失した結果、「霊」や「妖怪」の伝承だけが存在するようになったものとして理解すべきである。

また、近年では、既存の伝承圏の外側にあるメディアの世界(島の外部)において、伝承が再生産されるようになっている。妖怪をテーマにした漫画に「海難法師」が取り上げられ、オカルト掲示板に、来訪する「霊」や「妖怪」に関する語りが書き込まれている。そして、それらの閲覧者の中には、来訪者に対して独自の解釈をしたり、「キャラクター」としてイラストを投稿したりする者も現れるようになっている。今後、島における「周辺的立場」においても伝承が語られなくなると(周辺部の空洞化)、外部におけるネットロアとしての展開だけが進み、その際、「妖怪」の「キャラクター」化が生じることも考えられる。

以上、本報告では、「神」と「妖怪」の違いが、信仰の「低下」や「零落」によるものではなく、語り手の立場の違いに起因するものであることを明らかにした。また、既存の伝承圏の外側において、新たな文脈での伝承の再生産が行なわれていることも指摘した。以上のような一連の伝承過程は、今回取り上げた伊豆諸島の来訪神伝承以外の事例においても見出すことができるかもしれない。

# 有翼日輪とハロ 一 鎮大神社のミシャグジを例として 一

樋田竜男 (たかやまそふと)

長野県辰野市の社会計は鎮大神社の末社であり、地元でミシャグジと呼ばれるその御神体は横位の玉抱き三叉文が彫刻された石棒である。石棒とは男性生殖器を表現した磨製石器だが、そこに玉抱き三叉文が彫られた場合、これを「女性生殖器の表現」と小島俊彰は解き、「両性具有を表現している」と羽鳥政彦は考える。信仰の背景について確かな説はこれまで無いが、鎮大神社のミシャグジに関しては太陽のハロを象ったものであろうと田村栄吉は指摘し、石棒と太陽信仰との関連が示唆される。そこで本研究では Michael Schroeder と Les Cowley による HaloSim 3.6 を用い太陽高度 5 度刻みのコンピュータシミュレーションを行ったところ、高度 10 度における上部タンジェントアークが鎮大神社のミシャグジ頭部に広がる扇状の彫刻と高い一致が見られ、その時の内暈と左右の幻日が同石棒の横位玉抱き三叉文と相似する。さらに同高度における上部ラテラルアークおよび下部ラテラルアークは組み合わさることで亀頭状のハロを示すことが確認された。これらの結果から、鎮大神社のミシャグジが太陽ハロを象っているならば、その太陽高度は 10 度付近であり、さらに両性の象徴を伴った石棒の背景には、実際に両性の象徴が大気光学現象として観察された可能性が指摘できる。

さて、今回の石棒と同時代の縄文中期からは、太陽のハロによる有翼日輪を象ったと考えられる勝坂式土器が何点か発掘されており、少なくとも縄文中期にはハロを中心とした太陽信仰があった蓋然性が高い。もし他のミシャグジについても太陽ハロの信仰があったと一般化できるならば、金春禅竹が『明宿集』に記す宿神についても同様に太陽ハロの信仰が根底にあったと類推でき、さらには能の「翁」の源流が太陽ハロであった可能性も指摘できる。また同書の「翁ノ字ニツキテ、秘密灌頂、口伝ニアルベシ。大カタ「公ノ羽」ト書キタリ。王ヲバ鳥ニタトエタテマツル。」の部分も、これを内暈から両側に広がる幻日環を鳥になぞらえたと理解できる。このような事例は古代エジプトやペルシアなどに有翼日輪として広く見られることは拙文にて既報であり(『歴史研究』62(3),pp.44-52)、河姆渡遺跡等の古代中国の遺物にも同様な解釈が可能であることが林巳奈夫により多く論じられている(例えば『竜の話:図像から解く謎』中央公論社など)。更に『明宿集』は翁の水干が胞衣であると説くが、翁を有翼日輪と相同と見る以上、内暈を以って胞衣とする理解が中世にあったと推察することも可能である。この帰結は一部の勝坂式土器に太陽ハロを解釈することと矛盾せず、特に顔面把手付土器の内暈に相当する円環に出産する図像が解釈する例などは、内暈を以って胞衣とする理解との親和性が高く、ミシャグジを太陽ハロと仮定することには一定の合理性が認められる。

以上、鎮大神社のミシャグジを例として有翼日輪とハロを論じ、縄文時代の太陽ハロ信仰がミシャグジとして現代に痕跡を残した仮説が提案できる。この仮説は『明宿集』を見る限り少なくとも中世における理解とは矛盾しない。今後は多くの先学により、近現代に残る民俗事例から、この仮説が多角的に検証されることを期待したい。

なお本研究は田村栄吉との共同研究により行われた。

# 尾道囃子 - 中国山地に伝承する瀬戸内文化 -

八幡 浩二 (福山市立大学)・肥田 伊織 (尾道市市史編さん委員会事務局)

現在、中国山地域である広島県庄原市東城町には、瀬戸内海に面する尾道の名を冠した「尾道囃子」と呼ばれる民俗芸能が伝承している。一方、尾道囃子に関しては、尾道地域での伝承は確認できない。そこで、本発表では中国山地に伝承する瀬戸内文化の民俗事例として、尾道囃子をめぐる歴史と、その現状について報告してみたい。

尾道囃子の由来については、1799年(寛政 11)に同町の東城川(成羽川)の船着き場に設置された常夜燈を製作した尾道の石工であった山根屋源四郎の女房により、当時尾道で流行っていた踊りと曲を当地域で教え広められたものと、地元では伝えられている。その真偽はともかくとして、一般的に、民俗芸能の起源に関しては不明な場合が多い中、尾道囃子では具体的な人物名と年代が示されていることは、大変興味深い事例であるといえる。

実際のところ、現在は移設されているものの、当地には川船の安全を祈願した金毘羅大権現の常夜燈が遺存しており、そこには「石工尾道住 山根屋源四郎」の銘が刻まれている。山根屋は尾道石工の中でも一大勢力を誇る集団であり、現状ではその紀年銘から江戸時代中期(18世紀)まで、その活動を遡ることができる。なお、源四郎の名は石工集団の棟梁として、代々襲名されたようで、他の紀年銘を有する石造物から勘案すると、東城町の常夜燈は山根屋源四郎好孝もしくは山根源四郎傳篤である可能性が高い。

ところで、中国山地域という東城の地理的環境に加えて、東城の市街地を流れる東城川(成羽川)は、吉備高原を貫流し、岡山県の高梁川に合流する高梁川水系最大の支流であるということ等からすると、常夜燈は尾道から東城へ職人が出張して製作が行われたもの、所謂「出職」という形態で製作されたものと考えられる。そして現地に長逗留したことで、石工(集団)と当地域との関係性も自ずと濃厚なものとなったであろうことが容易に推測される。そうした場合、先述した尾道囃子をめぐる歴史的背景に関しても、その信憑性はより高いものといえよう。

近代になると、尾道囃子は「東城踊り」と名を変えて継承される。東城踊りは、地域の盆踊りとして隆盛したことが、昭和初期の新聞記事や写真からも、窺い知ることができる。東城踊りは、「道行型」+「輪踊り型」の両タイプからなり、それぞれ男踊りと女踊りがみられ、現在まで伝承されている。しかしながら、現在では三味線・尺八・締太鼓の鳴り物で演奏されるが、かつては胡弓もあったとされる。また、歌詞が残されているものの、曲調に合わすことができない等、時とともに変容・衰退・消失した部分も幾つか見受けられる。

さらに、1950年代以降に車社会へ移行すると、路上での踊りは不可能となり、小学校のグランドに櫓を組んで踊られるようになった。と同時に、鳴り物の演奏者も減少し始め、やがてテープによる演奏へと変わると、遂に演奏者は皆無となってしまった。

地域の歴史文化の維持には、地域住民の主体性が必要不可欠であることは、改めて多言を要しないが、そうした中、2015年(平成27)4月には地元有志により「尾道ばやし保存会」が結成され、現在ではその普及と伝承に力が注がれている。

# 流行神と疫病防除

## 村田 典生 (佛教大学)

新型コロナウィルス COVID-19 (以下コロナ) はパンデミックが起き、世界中で感染が拡大している。日本においては8月現在、感染が急拡大している状況にある。

このコロナという疫病の感染爆発と緊急事態宣言の発出に伴う企業への休業要請および外出自 粛要請などにより、日本では社会不安が一気に高まった。「マスク」、「テレワーク」、「ソーシャル ディスタンス」、「三密」、「自粛警察」、などの言葉が連日メディアに登場し、喧伝されたのである。

こうしたコロナ禍のなかで世間に受け入れられたのが「アマビエ」である。弘化3(1846)年の瓦版に掲載されており、「今年から6年は諸国が豊作だが病がはやる。その際は私の姿を写し、人々にみせろ。(概略)」と言ったという。このことから流行り病除けの利生があるとして、2月頃からSNS上に登場、拡散、受容された。そして各地で菓子、ワッペン、団扇などの意匠として活用され、厚生労働省コロナ対策のホームページにもPRキャラクターとして登場している。アマビエはコロナ禍の日本において疫病除け、コロナ除けの対象として流行しているのである。

このような疫病の流行下や災害時にその難から逃れるべく神仏が流行することがある。それも 平時ではあまり信心を集めなかった神仏にある日突然人々が参詣に押し寄せることがある。こう した現象を「流行神」という。神という字を充てているものの、神だけにとどまらず、仏菩薩、 小祠などあらゆる信仰の対象になるものを総称しているのである。

宮田登は『はやり神と民衆宗教』のなかで「神仏が流行するという現象は、日本の民間宗教社会に顕著なものであった。」、「一時的に霊験効かであると喧伝され、人びとが熱狂的に参集してくるが、その時期が去ると、誰も参詣しなくなる。」と述べている。

アマビエが流行神であるとするならば、まさに霊験効かと喧伝されている最中であるといえよう。コロナが収束したあかつきには忘却されていくのかもしれない。

100年前の大正9(1920)年、「スペイン風邪」が大流行した時には、今の兵庫県神戸市須磨区の山間にある多井畑厄除け八幡宮(多井畑厄神)が流行神となったという。1月19日付神戸新聞は「善男善女で(中略)非常な賑ひを呈し兵電は朝の程から鮓詰めの客を乗せて月見山停車場に美しい女も職工さんも爺さんも婆さんも十杷一束げで吐き出す」との記事がある。速水融は『日本を襲ったスペインインフルエンザ』で先の記事を引用しつつ、「駅から神社まではさらに二キロ程度の山道で、社務所が用意した護符は飛ぶように吐けた。」と述べている。しかし、今ではそのことはすでに忘却されている。

今回のコロナ禍々において確かにアマビエは流行っているのであるが、多井畑厄神のように群 集が参詣した社寺小祠は管見の限り見受けられない。それはどうしてなのか。また、人々はどの ように神仏にコロナ退散を願ったのか、社寺はどのように応えたのかを考察したい。

# しづかアマビエの展開 一長野県松本市での実践について一

市東 真一(神奈川大学日本常民文化研究所)

本発表は、2020年4月より発表者の実家の飲食店で行った、妖怪アマビエの護符を配布した経緯とその影響について報告する。

アマビエの研究は、早期から予言する妖怪としての伝播や展開について検討が行われてきた。 一方、新型コロナウイルスの影響下でのアマビエに関する商品などについて報告や論評も現在も 行われている。過去のアマビエについての研究では、予言する妖怪の伝播の展開などが対象とさ れてきた。また、新型コロナウイルスでのアマビエについては、様々な商品の報告や購入する人 びとの心情について検討したものであった。しかし、それらの報告の中にはアマビエを導入した 生産者についての視点や、アマビエに関する商品の実際の影響についてはあまり触れられていな い。そこで、本発表では発表者が実際にアマビエの護符を作ったことへの影響とその展開につい て報告を行う。

私の実家は、長野県松本市で創業 7.0 年以上営業を行っているしづかという居酒屋である。このしづかでは、3 月~4月の宴会の予約がほぼ全滅となり売上が大きく減少した。その中で、発表者はT w i t t e r などのS N S を中心に「アマビエ」という妖怪のイラストが多く共有されていることを知る。それで、流行に便乗してアマビエの護符を作ってしづかで配布すれば、ささやかではあるが来客につながるのではと思い立つ。そして、早速消しゴム判子で財布に入る程度の護符を制作した。さらに、ただの消しゴム判子ではつまらないと思い、しづかと関わりのある御嶽教松本教会で入魂式を行わせていただいた。その後、店頭において配布したところ、ただのコロナ除けのお守りとして消費されるのではなく、アマビエを拝みだした宗教者などが現れた。

本発表では、『長野県民俗の会通信』 277号·278号で報告したしづかのアマビエの護符の展開とともに、その後の動向を中心に報告する。そこから、アマビエに関する商品の制作者と護符をもらいに来る人びとの心情、またアマビエを拝みだした宗教者たちについて分析する。あわせて、松本市内で展開したアマビの動向についても報告する。



しづかで配布したアマビエ・アマヒコの護符

## コロナと修行

## 天田 顕徳(北海道大学)

## 1. 背景と目的

折りからの新型コロナウィルスによる感染症の拡大、いわゆる「コロナ禍」により、我々は物理的に〈近付きすぎないこと〉を日々、求められている。本報告では現下における〈近付きすぎないこと〉の要請が、宗教儀礼としての修行に与えた影響を考察する。

## 2. 事例

本報告では、通常であれば、いわゆる「濃厚接触」を伴う3つ修行を取り上げる。

- ・千葉県 日蓮宗中山法華経寺の大荒行
- ・千葉県 日蓮宗中山遠壽院の大荒行
- ・山形県 手向集落における山伏修行

宗教儀礼としての修行には、言うまでもなく様々なタイプが存在しており、実践者の性質(職業・年齢・性別等)も多様である。本来であれば多様な修行について、タイプなり類型なりを考慮した上で、戦略的に事例の選定を行うべきであろうが、現下における調査の難しさも考慮し、本報告では、これまでに報告者が調査等で関係を持った現場の状況を中心的に取り上げる。報告を通じ、全体を俯瞰する議論の「足がかり」となる材料を提起することを狙うが、他の様々な事例を基にしたご批判を期待したい。

## 3. 本報告が明らかにする知見

本報告では、コロナ禍の渦中にある修行の現場において、修行自体は変更を余儀なくされているものの、修行の「本質」や「伝統」を強調する動きがあることを指摘する。報告では、これを修行の〈純化〉あるいは〈純化の語り〉の生成として整理する。

同時に、半聖半俗の山伏修行の事例では、そうした〈純化の語り〉がオンラインを通じて発信されている例を紹介し、コロナ禍によるオンライン化の進展が、今後修行の裾野を広げていく可能性があることを確認する。

以上

# 山の神講と茶飯の「二杯盛り」 静岡県伊豆の国市韮山多田の事例から

## 宍倉 有紀(國學院大學大学院)

「茶飯」とは、茶汁で炊いた飯をさす一方で、醤油で炊いた飯もさす食の呼称である。

千葉県出身の発表者は、醤油で味つけしたものを「茶飯」と認識していた。それは「キガラチャ」とも呼ばれ、通常具材は入らず、入っていたとしても人参の千切り程度で、菜の数が少ない時に食べる印象であった。これに椎茸や油揚げ、鶏肉などを入れて炊くと、いわゆる「炊き込みご飯」となるが、それとは異なるものであった。

しかし、昭和初期の食を記録した『日本の食生活全集』(農山漁村文化協会刊)から「茶飯」 と称する食を抜き出してみると、そのほとんどは茶を用いたものであり、ハレの食として、特に 仏事の際に食される傾向にあった。

こうした違いについて、管見の限りでは、民俗学の立場から詳細な報告はなかったため、この 二種類の「茶飯」が全国でどのような偏差を見せているのかを明らかにしたいと考えた。

そのために、まず、自分自身の体験とは異なる茶を用いた「茶飯」の実態をとらえたいと、静岡県伊豆の国市韮山多田で食されている「茶飯」の現地調査を行った。

当地では、茶を用いた「茶飯」は「オチャハン」と呼称されており、盆や葬式のショウジンオトシなどに登場する。ハレの食であり、仏事の際に食される点から『日本の食生活全集』の内容とも一致しているが、一方でこれらの機会とは別に「山の神講」においても「オチャハン」が用いられ、さらにそれは「二杯盛り」と言われる大盛り飯で供されるという点に大きな特徴があった。韮山多田の「山の神講」は、1月と9月の年2回、地区の男性たちが「山の神さん」と呼ばれる山の神が祀られている祠へ参拝した後、多田区公民館を会場にして行われる。「オチャハン」は、お茶を煮出した汁に塩を入れて米を炊いたもので、地区の女性たちが作っている。近年は色が良く出るという理由で粉茶を用いることもある。出された大盛りの茶飯は完食しなければならないのが決まりである。

かつてこの講が青年の仲間入りの機会であり、皆が食べ終わるまでお開きにならなかったことなどから、山の神講における「二杯盛り」の習俗は、当地では一種の通過儀礼のような意味を持っていたことがわかった。

本発表では、現地調査の結果をふまえ、静岡県東部地域の「山の神講」行事の事例を収集し、開催時期、構成範囲、構成員、さらに供される食などから分析し、多田の茶飯のあり方が、当地に限定されたものではなく、周辺地域にも見られるものであった。また、こうした偏差の背景には、それぞれの地域の「茶」に対する意識が影響を与えていることも明らかになった。

# シシウチ行事にみる集落でおこなう狩猟儀礼と共食 --長崎県佐世保市吉井町の事例--

鈴木 良幸(名古屋大学人類文化遺産テクスト学研究センター共同研究員)

2018年に文化庁の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に指定され、にわかに注目されているのが長崎県佐世保市吉井町のシシウチ行事である。現在この儀礼は、乙石尾、橋川内、橋口の3地区での伝承が確認されている。いずれの地区でも12月のオカン祭(霜月祭)と同日におこなわれる。次第の詳細は異なるが、粢をシシに見立て、弓矢で射て、共食するという共通の要素がみられ、特にその場で焼くなどして共食する次第がよく伝承されている。これは、狩猟儀礼と地域でおこなう儀礼との関係を示す現行事例としての大きな意味を持つ。本報告では儀礼の概要を示し、儀礼の基本構造を明らかにすることで、その意義に迫りたい。

祭日は12月で、乙石尾13日、橋川内15日、橋口11日である。催行場所は、乙石尾が集落耕地と山の境界にあるセドの神、橋川内が氏神八幡社境内の山の神とサヤの神(祠はもと山中にあったという)、橋口がもと共有林のコノモト山への入口にあるコノモト様、である。いずれの祠も祭神は大山祗であり、山の神、山への入口や境界、といった概念と結びついている。

地元では「集落と山の境界で、シシが里におりて来ないようにする」とか、「わるさしないように、追い払う」意味をもつと言われ、「女人禁制で、成人男子のみの祭りだった」という語りを聞くことができた。したがってシシウチは「山の神の前でおこなう、シシを山へ追い払う」儀礼だと仮定できる。しかし語りは儀礼の一部分を言い表しているのか、この仮定はそのまま儀礼の事象にあてはまらない。

シシとなる粢は、乙石尾と橋口では宿、橋川内ではキモイリと呼ぶ当番が担当する。橋口では 二世代健在な家のみがつくった。製法は、米粉に少量の水を加えて練り固める。橋口では 2018 年まで前日にすり鉢で米をすり、一晩ほとばしてから練ってつくった。シシの形はそれぞれ異な る。乙石尾は南天の実や葉、木枝などでシシの目、耳、牙をつくる。橋川内は円形で、少し高さ を出す。それを射場の丸石の上に置き、注連縄を張る。橋口では球状につくる。健在な家のみが つくるという条件や注連縄を張ることから、シシが清浄なものとして扱われ、それを射て共食す るのだということが分かる。単純に害獣や農耕の敵として見られているのではないことが窺える。

儀礼次第をみると、乙石尾の事例では、はじめに祠前にて祭典式がおこなわれる。つぎにシシウチとなる。粢のシシを祠横の石に置き、宮司、総代、宿、班長、氏子・来賓の順に一人一矢を射る。途中、当たれば終了し共食に移る。粢をちぎって平たい円形にまるめ、炭火の上で焼く。古くは串刺しにして、立てて焼いたという。焼けたらその場で共食する。その際、アオキ葉を円錐形に折り曲げ、器として御神酒を飲む。

以上の次第は「修祓・祝詞―シシを射る―焼く―分配・共食」という基本構造をもつ。これは 猟師の狩猟活動における要素「入山時豊猟祈願―シシを射る―解体場所での内蔵調理―分配・共 食」と相似する。シシは集落が賄えるほどの肉量を持ち、冷蔵庫普及以前は蕩尽が必要とされ、 非日常的なご馳走であった。山の神の前にて、この活動を集落単位で模擬的におこなうところに、 集落が共同して食べることへの狩猟文化からの意味づけがなされているといえるのではないか。

## 諏訪信仰と茅をめぐる諸問題

永松 敦(宮崎公立大学)

#### 1. はじめに

長野県の諏訪湖に鎮座する諏訪大社上社・下社は、全国の諏訪信仰の中心である。宮地直一の『諏訪史』(1931) 以後、金井典美・福田晃・武井正弘・山本ひろ子の諸氏をはじめ、近年では、若手研究者として二本松康宏氏が精力的に調査研究を進めている。また、狩猟、焼き畑など様々な生業の分野からは千葉徳爾、野本寛一ら初先学の方々が全国的な視点から論じられてきた。

筆者も狩猟民俗の立場から「業尽有情、雖放不生 故宿人天(身) 同証仏果」といった諏訪の勘文などに触れる機会は多かったが、諏訪の狩猟神事それ自体を論じることは避けてきた。なぜなら、諏訪の宗教的世界があまりにも広く、また、深く、どこから手を付けてよいか、なかなか決心がつかなかったというのが正直なところだ。ただ、二本松先生のご配慮により、諏訪信仰に関する科研に参加させていただくことで、遠く九州から諏訪通いができるようになったこと、また、この科研以前から総合地球環境学研究所の湯本貴和先生のプロジェクトで阿蘇の草原に関する調査研究に加わることができたことで、ようやく草原研究の視点から諏訪信仰がおぼろげながら見えてきたというところにたどり着いたと言えようか。前置きが長くなったので、本論に入っていきたい。

### 2, 諏訪最大の御狩神事 御射山(みさやま)神事

諏訪の最大の祭礼といえば、今では御柱になるが、室町期の毎年恒例の神事としては旧暦7月26日~30日までの5日間、御狩神事などが盛大に行われていた。獲物については矢抜きの儀と称して、獲物から矢を抜き取り、尾花(すすき)を添えて渡す儀式があった。また、穂屋と呼ばれる物忌のための小屋を作った。古文書からは形状はよくわからなかったが、近年、二本松氏によって長野県小海町の松原諏訪神社の御射山神事の穂屋を見ることができた。三角状の小屋で、アシで囲い、上部の天井部をススキで覆う。同じカヤといっても、アシとススキの明確な使い分けがなされている。九州の阿蘇は野焼きで知られる。そのため広大な半草原が広がる。では諏訪はどうなのか?野焼きの神事はあるのか。

## 3. おわりに

諏訪の草原維持を考えた場合、阿蘇や鹿児島の大隅地方の事例は参考になる。また、野焼きがなくなり、我々の生活から茅場を消えていった。こうした環境の変化が諏訪信仰の本質を見えにくくしているのかも知れない。これまでの宗教民俗の視点とは異なった環境の立場から諏訪信仰を見直してみたいと思っている。

# 同業神信仰における実態と課題 -繊維・織物業界(東京都中央区)における同業神信仰-

加藤 紫識(和洋女子大学)

職人たちの技術習得や自らの職の由来に基づいて信仰する神仏を、民俗学では「職能神」や「職祖神」と呼んで、調査・研究がされてきた。

2000年代初頭に刊行された辞書などの「職能神」の項目には、「農業以外の職業を守護する神」、「これらの職能は、各集団内で伝承される技術で、他言を許されないこともあって、信仰される神も特殊化されていた」、「一般的な農民の信仰と比較すると禁忌や忌みの意識が強く現われる傾向がある」(2000 紙谷威広『日本民俗大辞典』吉川弘文館)、あるいは、「職人を守護する祖神のこと。漂泊する非農業民としての職人が、彼等の技術を伝える系譜伝承の頂点に置いた神」、「中世以降近世に至って増加した職人らは自らの職能集団の強化を計り、技術の伝承・秘技の伝授を制度化し(中略)その頂点に職能神としての祖神を置いた」(2001 山本節『日本の神仏の辞典』大修館書店)などと説明されてきた。

このように説明されてきた「職能神」は、現代社会では漂泊を前提とせず、職人に限らない人びとをも含めながらさまざまな目的をもって信仰されている実態が確認できる。発表者はこうした職人(あるいは商業・流通に関わる協会、組合など)の同業者たちが信仰する対象を「同業神」と位置付けて、その実態を論じてきた。(拙稿 2010「都市における同業神信仰」『史潮』新 68 歴史学会、拙稿 2010「薬種商における同業神信仰とその祭祀集団」(『民俗文化の探求』所収)岩田書院、拙稿 2010「江戸・東京における同業神信仰の祭祀集団 一深川肥料商の信仰を中心に一」(『比較都市史研究』第 29 巻第 2 号)など)

本発表では、繊維・織物業界(東京都中央区堀留町)の同業神信仰の実態を把握するとともに、 近隣地域である肥料商(東京都江東区深川)の事例と比較しながら、同業者町における同業神信 仰の傾向を把握する。

比較することで、類似点からは都市の同業者信仰における信仰対象の捉え方や祭祀集団の構成 を確認することができるが、相違点としては肥料商の信仰はいわゆる職祖神や神話を根拠とする 対象ではないという点である。

従来の民俗研究においては、職能神や職祖神というカテゴリーで職人たちの信仰や技術伝承の発見・保持の根拠とする側面が注目されてきたが、現代都市においてはそれに限らない職人・商人の信仰や信仰対象を紐帯としたコミュニティが存在している。そうした個々のバリエーションを包括する「同業神」という視点をもつことで、都市生活のなかに顕在化する同業神信仰の実態を具体的に捉えることが可能になるのではないかと考えている。

本研究は JSPS 科研費 JP19K13464 の助成を受けたものである。

# 海辺の天皇即位儀礼伝承 一「難波八十島 | の追跡一

## 田野 登(大阪民俗学研究会)

大阪の古称は「なには」(「なにわ」)だが、いろいろな漢字表記がみえる。難波・浪速・浪花・浪華が一般的で、いずれも波・浪の漢字が当てられている。神武東征伝説には、「なには」伝承の古層がみえる。「浪速渡」における「なみはや」言辞が「なには」に訛ったとする地名起源であるが、現代都市大阪の伝承にも海辺が見え隠れする。

「仁徳記」には、難波碕における国見歌とされる歌が記されている。そこに謳われる島々を国土創生を語る「大八洲国」になぞらえ、「原八十島神祭歌謡」と称する説がある。摂津国の八十嶋は、文献上では嘉祥3(850)年9月の文徳天皇即位の記事に「向摂津国祭八十嶋」とみえる。「延喜式」八十島祭の条には、祭場を「難波津」と記し、後には大川尻の隈「熊川」も記され、長暦元(1037)年に住吉代家浜にて祭祀するに至り、元仁元(1224)年、後堀河天皇を最後に難波における天皇即位儀礼・八十島祭は廃絶する。

中世から近世にかけての地誌・紀行文には、淀川、神崎川河口といった西成郡にいくつかの島が記述されている。宝永年間(1704~1711年)頃成立の『住吉松葉大記』「八十嶋祭」の「当社年中行事」には、「大阪京橋北西河中多嶋 如田蓑嶋・幣嶋等皆是也」とあって、22 もの旧島名が列挙されている。享保 20(1735)年刊行の準官撰地誌『摂津志』にも、西成郡に多くの島名を挙げ、とりわけ郷名「宅美」を難波八十島の一つの田蓑島に「宅美(ルビ:タミ)野ノ島」として宛てるなど、語呂合わせがみられる。「宝暦 3 (1753)年癸申三月 森幸安著図」とある「摂津国難波之図」は『摂津志』が図像化されたもので、この故事付けの説は近代にまで及ぶ。

そのいっぽうで、東生の「八十島」は平安末~鎌倉初期の歌人で歌学者である顕昭による『古今集顕昭註』(写本内閣文庫本)には、「或物云。風土記云。堀江ノ東ニ沢アリ。ヒロサ三四町許。名ヲバ八十頭島トイフ…」と、これに付会された地名説話が見える。内閣文庫本は、後世「良宗」によって加注が施されているものの、当該箇所は、顕昭のものと思われる本来の頭註である。したがって「堀江ノ東」の「八十頭島」記事は、八十島祭との関係はともかく、早く顕昭が生きた時代に遡り得る伝承と推定される。

今回、一念発起して、海辺の儀礼伝承に取り組んだのは、昨秋、令和元(2019)年の天皇即位儀礼に伴う大嘗祭が挙行されたことに端を発す。大嘗祭以前に海に面した難波の地で八十島祭が行われていたのではないかとの想念に駆り立てられたからである。抑も、大阪市福島区にある母校の校歌に「田蓑島わに波立たず治まる御代の生業を」とあった。また西淀川区佃の田蓑神社は、「摂津国の田蓑嶋」を自称する慶長年間の証書を有する。西大阪の大阪市立小学校の校歌の歌詞には「八十島」「難波津」がみえる。1998年開業のJR加島駅の駅シンボルに「青海波」があしらわれ「難波の八十島」を掲げる。また、隣接する御幣島駅周遊のコミュニティツーリズムに「難波八十島の名残を求めて」コースもある。そのいっぽう、今日、海から遠く隔たった東成区の小学校でも「難波の入江の奥深く」「浪速の海のさざ波」が歌われ、2006年新作能「生國魂」では、往時、上町台地の東に広がっていた難波潟での八十島祭が入れ籠構造の「夢幻能」によって再現されている。「なにわ」の海辺の景観は、都市大阪のアイデンティティとして記憶の底に生き続けているのである。

# てるてる坊主の作りかた 一近世・近代の絵画資料を中心に一

#### 高橋 健一(会社員)

本発表では、てるてる坊主の近世・近代における姿かたちに注目します。管見の及んだ絵画資料 6 例を中心に、姿かたちの垣間見られる文献資料も題材とします。切り口としては、てるてる坊主の作りかた、書き込まれる文字の有無、吊るされる場所といった点から検討します。

昨今見られるてるち主は、丸い頭を包んで首の部分で締めた「包んで作る」タイプで、裾 の部分は広がった姿(いわば「ポンチョ型」)をしています。

いっぽう、近世中期~後期にかけては1枚の紙を「切って作る」タイプで、輪郭が人の形をした平面状の姿(いわば「形代型」)が見られます。のっぺらぼうで逆さに吊るされるという点が特徴です。

また、近世中期~昭和前期にかけて幅広く見られるのが、丸い頭につなげた胴体部分に着物を「着せて作る」タイプで、帯を締めた姿(いわば「着物型」)のものです。こちらは上下の向きが正常で、軒下ではなく樹下にもっぱら見られるという点が特徴です。

「書き込まれる文字の有無」や「吊るされる場所」についても、時代によって移りかわりがあるようです。

柳田国男は昭和11年(1936)に「テルテルバウズについて」を発表しています(のちに『柳田國男全集』第29巻、筑摩書房、2002年所収)。柳田の念頭にあったのは、昨今のような「ポンチョ型」ではなく、当時の主流であった「着物型」のてるてる坊主であったと推測されます。

近世・近代の絵画資料に見られるてるてる坊主や昨今のものについて、特徴の比較

	出典の発行年	出典のジャンル	作りかた			向き		文字		場所	
			切る	着せる	包 む	- 逆 さ	正常	あり	なし	   樹   木	軒下
形代型											
事例 1	寛政元年(1789)	紀行	0			0			0	0	
事例 2	天保 15 年(1844)	童戯集	0			0			0		0
着物型											
事例 3	19 世紀半ば	浮世絵		0		?	?	0		?	?
事例 4	明治 33 年(1900)	画集?		0			0	0		0	
事例 5	大正 12 年(1923)	童謡集		0			0		0	0	
事例 6	昭和8年(1933)	教科書		0	_		0		0	0	
ポンチョ型											
	昨今				0		0	$\triangle$	0	$\triangle$	0

凡例 ○:該当する △:散見される 空欄:該当しない ?:不明

# 現代に生きる湯殿山即身仏信仰 - 参詣者アンケートを通して-

## 岩鼻 通明(山形大学庄内地域文化研究所)

本発表は、現代において、湯殿山で修行を重ねた行者の遺体を祀った即身仏が、どのように信仰を集めているか、について、論じることを目的とする。データとしては、山形県酒田市の市街地に位置する海向寺および山形県鶴岡市(旧朝日村)の山間部に位置する注連寺の双方において、2019年夏に実施した参詣者アンケートを用いる。アンケートは、それぞれ100通の回答を得た。以下では、項目ごとに集計結果を示しつつ分析を行う(科研費19k01197の一部を使用)。

- ① 参詣者の年齢 海向寺では40歳代、注連寺では50歳代が最大で、10・20歳代も1割前後 みられた。海向寺では若い世代が多く、注連寺では中高年世代が多い。
- ② 参詣者の性別 海向寺では男性が多く、注連寺では男女ほぼ同数であった。明治の神仏分離 以前は七五三掛の注連寺は女人結界地点にあったことから、今なお影響があるのだろうか。
- ③ 参詣者の職業 両寺院ともに、ほぼ半数が会社員であった。かつての出羽三山信仰は農民の豊作祈願が主体であったが、現代の産業別人口の変化を反映しているといえよう。
- ④ 参詣者の交通 注連寺では8割強、海向寺でも7割弱がマイカー利用であった。酒田市街地にある海向寺では鉄道利用も2割弱あり、両寺とも団体バスはほぼなくレンタカーが1割。
- ⑤ 参詣の同伴者 注連寺では家族が6割強、海向寺では5割弱で、友人が2割前後で、かつての講員による集団参詣が減少していると思われ、一方で単独での参詣も2割前後みられる。
- ⑥ 参詣者の住所 注連寺は県内が2割、海向寺は1割と多くはない。東京を含む関東が両寺と も4割強で、中部+近畿が1割強と、東日本に限られていた信仰圏が広域化している。
- ⑦ 参詣の動機 海向寺では即身仏が9割、注連寺でも7割を占め、お参りが注連寺は4割強、 海向寺は2割強(複数回答あり)で、わずかながらパワースポットという回答もみられた。
- ⑧ 参詣者の宿泊 両寺ともに7割が宿泊で、鶴岡・酒田市街地に宿泊が多い。庄内の温泉地へ の宿泊は1割弱にとどまり、かつては精進落としで温泉に泊まった慣習が薄れてきている。
- ⑨ 昼食地とメニュー 海向寺は酒田、注連寺は鶴岡が多く、メニューでは注連寺で名産の蕎麦が2割強、海向寺で1割弱となり、精進料理はわずかにとどまった。
- ⑩ 参詣者のお土産 両寺ともに、お札とお守りが半数前後を占めており、現代の宗教観光においても、神仏の加護を求める傾向がみられるといえよう。
- ① 旅行の日程 両寺ともに、2泊と4泊以上が2割強となっており、合わせると半数を占める 結果となった。上述のように夏休み期間のアンケートの影響が顕著にみられるといえよう。
- ② 情報収集手段 両寺ともに、インターネットが半数前後で、ガイドブックよりもむしろ知人 の紹介が上回る結果となった。ネット社会と口コミ効果の双方が特徴的といえよう。
- ③ 宿泊等の手配 両寺ともに、インターネットが3~4割で、電話は1割弱、旅行会社経由は数%にとどまり、旅行の準備段階も現代的傾向に変化していることがうかがえる。
- ④ 来訪場所 両寺ともに、マイカー利用が多いことから、羽黒山・月山や、即身仏を祀る別の 寺院の宗教観光に加え、加茂水族館や美術館・博物館など多様な場所を訪問している。

## 近世東三河の陰陽師 小川大膳正の活動

## 松山 由布子(広島大学)

本報告は、近世期の東三河や奥三河における陰陽師の活動について、文献記録をもとにその動向を明らかにするものである。

近世期の陰陽道については、歴史学や民俗学において研究が進められている。近世期の陰陽師は土御門家によって一元的に管理されていた。歴史学の分野では、土御門家が朝廷や江戸幕府との結びつきを強化しながら諸国の陰陽師支配を進めて行く経緯や、その組織体制の有り様などが明らかにされている。また土御門家が発給した職札(呼状・掟書)を有する者を身分制度上の「陰陽師」と見なすことが提言されるとともに〔林 2005〕、その陰陽師の中に、声聞師などの中世以来の職能者のほか、神楽師や万歳師、都市の天文・暦学者、在地の宗教者など様々な人々のいたことが明らかにされている〔梅田 2009〕。

一方、民俗学の分野では、陰陽道や陰陽師が近世社会の中でどのように受け入れられていたのかという実態的な側面が追求されている。護符やまじないなどの呪術、暦に基づく慣習や信仰、陰陽五行に基づく芸能や儀礼のほか、雑書・調法記などの書物にあらわされた陰陽道由来の知識が民俗知となり、地域社会の中に根付いていたことが明らかにされている〔小池 2011〕。また在地の宗教者が土御門家をふくむ本山や本所から発給される補任状や裁許状を得ていたことや、近代以降には教派神道の教導職などへと移行していったことも指摘されている〔小松 2015〕〔松山2015〕。

愛知県三河地方の陰陽師については、近年、近世末期の奥三河に陰陽師の身分を持つ者のいたことが紹介され、陰陽師と、花祭りをはじめとする在地の民俗文化との関わりが注目されている〔林 1994〕〔中村 2004〕〔松山 2015〕。本報告では、こうした動向に繋がる人物として、東三河を拠点に近世期の八名郡・設楽郡にて活動した、小川大膳正という陰陽師について取り上げる。この人物は、幕末から明治期の文献記録にその名が確認できるが、これまで注目されてこなかった。

本報告では、この小川大膳正が陰陽師という身分のもとで行った具体的な活動の様子や地域の 人々との関わりについて文献記録より明らかにし、近世から近代にかけての東三河や奥三河の宗 教文化の展開の中に位置づける。

#### 参考文献

梅田千尋 2009 『近世陰陽道組織の研究』吉川弘文館,小池淳一 2011 『陰陽道の歴史民俗学的研究』角川学芸出版,小松和彦 2015 「教派神道と宗教者・芸能者」島薗進ほか編『勧進・参詣・祝祭 シリーズ日本人と宗教――近世から近代へ』春秋社,中村茂子 2004 『奥三河の花祭りー明治以後の変遷と継承』岩田書院,林淳 1994 「幕末の土御門家の陰陽師支配」『人間文化』第9号,同 2005 『近世陰陽道の研究』吉川弘文館,松山由布子 2015 「東栄町小林地区花太夫所蔵の近世陰陽師資料について」『愛知県史研究』第19号

# 天草上島倉岳における山岳信仰

大田黒 司(神奈川大学大学院生 開新高等学校教諭)

【はじめに】 これまで産島、帽子岳、倉岳を主に、天草全体の山岳信仰を概観する発表を行った。産島(女岳)においては役行者が祀られ、眺望に依拠する形で付近の山を三山に見立て、小規模ながらも修験道を意識した山岳信仰が長嶋常念寺の密教僧や地元の浄土宗僧侶を導師として、地域レベルで行われたことを明らかにした。今回は新たに役行者石像が発見できた倉岳において、峰入り、あるいは類似することが行われていた可能性を示す資料が発見でき、その報告をする。

【概観】倉岳(682m)は天草上島に位置する天草諸島(陸地面積は880km<sup>2)</sup>の最高峰である。天草諸島は断層と地塊で構成されるため標高は高くないが概して景観は山地である。元来、天草は民間宗教者が多い地域で、江戸時代は代官所が袈裟頭の明星院と大光院の許可以外の宗教活動を度々禁じ、この大光院(棚底諏訪神社)は倉岳の麓にある。中腹には小ヶ倉観音と呼ばれる猟師と清水寺の伝承の伴う一枚岩の巨石があり、そこには梵字で書かれた阿弥陀三尊がある。この一枚岩には年号の記銘としては県内最古であり、近世以前の天草の信仰に関する情報がキリスト教側による破壊のため皆無に等しい中、山岳信仰存在の可能性を示す貴重なものとなっている。また山頂への旧登山道や各集落には役行者石造、馬気魂大明神と称する小祠、その他の石仏が点在し、高い組織性や教理性のある修験道と断言できる信仰体系があったかは断言できないものの、産島同様に身近な山を神聖視した、地域社会単位の山岳信仰が存在していたことが指摘できる。

【祭祀】倉岳および矢筈岳(626m)の山頂の巨岩群に石造の倉岳大明神の小祠群がある(矢筈岳は宮田地区、金比羅宮)。小祠は宝暦年間~昭和初期にかけて建造されている。麓の棚底、浦、河内、宮田の各地区が各々で小祠を祀り、石造の船型水盤が奉納され、そこに巻貝や珊瑚等を納める風習がある。小祠の石垣には古い灯籠や祠等の石材が再利用され、数度の再建跡がある。舟形水盤の一部は現存していないが記録上は幕末から昭和にかけて奉納されており、農業が主の天草で倉岳方面は海運や漁労が以前から盛んで、特に戦前は遠洋漁業で栄えた地域でもあり、その影響が考えられる。その意味において倉岳は海の神としての意味合いもあると思われる。そして役行者石像(宮田の才津原地区)に関しては、観音堂の隣に祀られ、毘沙門天が祀られる藪も隣接している。この台座に「御入峯奥駐供奉」と銘文がある。台座は平成12年に再建されたが、文字は古い台座から拓本をとり、そのまま転写してある。次に馬気御魂大明神と称する小祠が中腹にあり、類似の小祠は各集落に見られる。これは旧道から新道脇に移転させたものである。棚底集落側の中腹にも延命様という滝があり、そこにも石仏が数体祀ってある。また、これらの多くには大光院や地元寺院、神職の銘があるため、大光院と共同あるいは同じ祭祀場で活動した点が伺える。

【さいごに】 倉岳山頂は神社と称するが社殿はなく、開けた山頂空間に各集落を眺望するように小祠があるだけで、その点は他の天草の山岳信仰と共通する点である。この山頂と各集落を結ぶルートに役行者石造や小祠等が分布しており、これらの多くに修験を名乗った大光院の銘があるため、それらは修験道と言えなくとも、それを意識していた信仰であると推定される。

今後の課題は、天草で盛んな十五社宮(阿蘇神社)をはじめとする神祇信仰との関連も考えつつ、 屋久島の岳参り等との類似事例の比較も行い、海における山岳信仰(修験道)を意識しつつ、修験道 の定義や民俗宗教の概念も含めて、日本全体の民間信仰としての枠組で考察していきたい。

# 盲僧琵琶の変遷と再生 一天台宗玄清法流の琵琶弾奏一

## 横田 慶一(筑波大学大学院)

本発表の目的は、天台宗玄清法流の琵琶弾奏を対象に、盲僧琵琶が教団組織化、現代化の中でどのように今日まで継承されているかを明らかにするものである。

天台宗玄清法流とは、盲僧あるいは地神盲僧と呼ばれた琵琶を伴う儀礼を特徴とする盲目の民間宗教者を母体として成立した天台宗の一派である。玄清法流は福岡県にある臨江山成就院を別格本山として九州北部を中心に分布し、34か寺61名を有する。現在在籍している僧侶は全員が晴眼者であり、加持祈祷を主として民俗信仰の祭祀を担う祈祷寺院で構成される。

彼ら盲僧一玄清法流を対象とした研究の嚆矢として、中山太郎による『日本盲人史』があげられる [中山 1985 (1934,1936)]。中山は民俗学の立場から盲人史研究に盲僧を位置づけ、通史的研究を行った。以降、特に70年代から盲僧研究は活発化し、フィールドワークに基づいてかつての盲僧行の痕跡を残す事象に関する民俗学的研究をはじめ、経典や演技、語り物の詞章といったテクストを対象とした国文学や史学、琵琶弾奏に着目した音楽学的研究など学際的に研究がすすめられた。しかしながらこうした盲僧研究の射程において、宗教者の位置づけや彼らの社会的・身体的属性の大きな変容から現在の玄清法流は殆ど対象化されず、あくまで盲僧の現在の姿の一端として触れられるに過ぎなかった。本発表はこうした背景のもと盲僧と玄清法流の連続性の実態に着目した研究の視座を踏まえ [横田 2019]、儀礼や公演といった実際に琵琶が弾奏される場の背景にある弾奏技術の継承や習得から、その変遷と現在の姿を明らかにするものである。

玄清法流の琵琶弾奏は、昭和39〈1964〉年に「玄清法流盲僧琵琶」が県指定無形文化財として登録され国立劇場で公演を行うなど、その希少性が見出され、注目を浴びた。その一方で、当時の法流の方針や技術習得の困難さによって盲僧琵琶は次第に衰退していく状況にあり、結果として玄清法流は、盲僧琵琶から分派した福岡県の音楽芸能である筑前琵琶の大家から技術の教導を受け、またそれを僧侶が弾奏しやすいよう適応させるかたちでその復興を試みた。

こうした変遷のなかで、盲僧琵琶は大きく変容し、玄清法流の琵琶弾奏は筑前琵琶をベースとして、いわば逆輸入的に再生することとなった。その最も大きな影響として、弾法譜(楽譜)の成立が挙げられる。筑前琵琶の14の旋律とそれを簡易化して作成された2つの旋律は楽譜として視角化され、僧侶それぞれの個別的な技術習得が容易になり、同時にある程度の奏法・旋律を有する芸能として標準化されたのである。現在の玄清法流の琵琶弾奏は、盲僧琵琶から形を変えて派生した芸能であり、盲僧琵琶の現在形として対象化されてきた視点を捉えなおす必要があるといえよう。

#### 参考文献

中山太郎 1980 (1934・1936) 『日本盲人史・続日本盲人史』パルトス社

横田慶一 2019 「近世民間宗教者に由来する系譜関係の実践と所在一新興の天台宗玄清法流寺院の事例から一|『史境』77・78

# 岡山市東区瀬戸町の法華信仰 一不受不施派の内信を中心に一

平松 典晃 (帝塚山大学非常勤講師)

備前国はかつて「備前法華に安芸門徒」といわれるほど、法華信仰の盛んな地域であった。寛文5年(1665)に幕府が日蓮宗不受不施派の寺請を禁止したことを受け、岡山藩主池田光政は、領内の寺社整理を行なった。日蓮宗不受不施派を固持する寺院は存続不可能となったが、天台・真言寺院についても多数が廃寺となった。また由緒の不確かな小祠などは寄宮とされた。公に寺院を構えることができなくなった不受不施派は地下に潜伏し、信者の中には表向きの檀那寺の檀家となりながらも、実際には不受不施派の信仰を行なう内信者となったものも多くいる。

今回調査した岡山市東区瀬戸町(旧赤磐郡瀬戸町)は法華信仰の盛んな地域で、日蓮宗、日蓮 宗不受不施派、不受不施日蓮講門宗など、大部分が日蓮系寺院の檀家である。

瀬戸町域にあった日蓮宗寺院の大半は瀬戸町宗堂にあった妙泉寺の末寺で、同寺は不受不施派の祖である日奥が住職を務めた京都妙覚寺を本寺としていた。つまり瀬戸町域にあった日蓮宗寺院は不受不施派であったものと考えられる。

今回報告する瀬戸町大井は、現在大部分が今日の日蓮宗である受不施派寺院の檀家であり、不受不施派の檀家は数戸が存在するのみである。これまでに私が調査した和気町益原や岡山市北区御津紙工の字天満は、現代に至るまで集落を構成する全戸が不受不施派であることから、弾圧下においてもほとんどのイエが内信を行なっていたものと推測できる。瀬戸町大井のように、一部のイエのみが不受不施派である場合、どのような信仰が展開されてきたのか関心をもち調査を実施した。

瀬戸町大井には、寛文六年の寺社整理まで、日蓮宗不受不施派の蓮久寺があったとされ、その 寺跡に隣接する墓地には天文三年の銘をもつ題目が刻まれた五輪塔や、同寺が廃寺となった際に 住職を務めていたと考えられる僧の石塔が存在する。また同寺の僧によって開眼されたとされる 仏像などを伝えるイエがあり、本発表では、これらの点から法華信仰の展開や不受不施派の動向 を探っていきたいと考える。

また寺跡に隣接する墓地には、同族祭祀を行なう株家が3組確認できた。これらについては今後調査を進めたいが、ムラの開発に関する伝承を持つイエもあり、ムラや寺の成り立ち、寺における先祖祭祀や同族祭祀の展開、ムラの発展についても明らかにできるのではないかと考えている。

# 日本の灌仏会研究 一子どもとの関わりの歴史を中心に一

#### 楊 宇洲 (大阪大学大学院生)

本研究は、仏教行事である日本の灌仏会と子どもの関わりについての研究である。灌仏会とは、毎年の4月8日に釈迦の誕生を祝う行事である。日本の灌仏会は、仏教の渡来と共に中国から朝鮮半島を経て日本に伝えられたのではないかと考えられている。灌仏会では4月8日に寺院で誕生仏像に甘茶をかけ、釈迦の誕生を祝う。現代の日本では、灌仏会は一般的に「花まつり」と称されている。

灌仏会について、中国と日本の灌仏会を比較研究すると、日本の灌仏会の特徴は、「子どもの関わり」という点にあるのではないかと考えられる。それは中国の灌仏会が大人が中心の行事として行われているのに対し、日本の灌仏会は子どもの演劇や稚児行列を伴うなど子どもが灌仏会に関わる形で展開しているからである。

これまでの研究では、灌仏会の起源に関する民間習俗合流説や現代日本の灌仏会である「花まつり」の政治的な影響についての説、また古代のインドや中国の灌仏会の巡る行為である「行像」に関する研究が見られる。しかし、日本の灌仏会と子どもとの関連についての研究は少ない。

日本で子供が灌仏会に関わり始めた資料が見えるのは江戸時代である。江戸時代の浮世絵などには、甘茶かけと甘茶配りをする子どもの様子がうかがえる。当時は、はしかなどの流行があり、子どもの健康を祈願することが増え、そこに甘茶の効果が結びついて子どもが灌仏会に参加するようになったのではないかと考えられる。

その後、灌仏会は明治時代から政治的な影響を受けて変化し、灌仏会の行列に子どもが参加し始めるようになる。明治時代の灌仏会では、数多くの少年少女が灌仏会の会場に集まり、甘茶かけと献花をしている。そして大正時代に入ると、子どもが演じる灌仏会の劇などの記念パフォーマンスが創出された。これが現代の灌仏会で行われているパフォーマンスの嚆矢だと思われる。当時のパフォーマンスは学校と寺院両方で行われたが、現代は寺院で行われている。

昭和以降は、稚児行列が各地の灌仏会でも行われるようになり、灌仏会と子どもの関わりがさらに深化した。そして、現代の灌仏会では、都心部だけではなく、農村部でも稚児行列が行われている。東京都の護国寺では、灌仏会の日に幼稚園の子どもを集めて稚児行列を行う。そこでの聞き取り調査から、稚児行列を行う理由として子どもの成長祈願や通過儀礼などの説明が見られる。ゆえに灌仏会の稚児行列には子どもの健やかな成長を願う意味があると考えられる。また、埼玉県蕨市の塚越の灌仏会では、小学校高学年の子どもたちが全ての役割を果たしており、独自に稚児行列を行う。塚越の灌仏会の稚児行列は護国寺のように子どもの健康祈願などを強調していないが、稚児行列という行事自体が民俗文化財として地元の人々に重視されている。

以上のように日本の灌仏会は江戸時代以降から子どもが関わるようになり、その後、次第に子ども中心の行事に展開していることがわかる。

# ークルー

# 熊野灘沿岸における石経の習俗 -三重県尾鷲市須賀利の石経を事例に-

## 小野寺 佑紀(神奈川大学大学院)

三重県の熊野灘沿岸には豊漁祈願や海上安全、海難者や魚類供養として、経石を地先の漁場や 定置網周辺に沈下させる「石経」の習俗がみられる。

当該地域における先行研究については、志摩地方の郷土誌の先学である岩田準一(1939、1970)、上村角兵衛(1955)、鈴木敏夫(1966)をはじめ、海村調査の採訪者であった牧田茂(1938)などの成果が挙げられ、漁撈習俗として僅かに採録がなされている。

「石経」は、礫石経(一字一石経)の一形態であり、『平家物語』や『吾妻鏡』をはじめ平安 末から中世の軍記物語や歴史書などの文献上にも海中に経石を沈下させた事例が散見される。

また、近世中期には徳本上人が、弥陀名号を写経した経石を溺死者供養として河海に投じた記録も複数みられる。管見では、三重県沿岸では志摩半島(志摩市、南伊勢町)、東紀州(紀北町、尾鷲市)にかけて分布しており、廃絶したものも含めて現在14例を確認している。

志摩・南伊勢では「瀬祭」「瀬祈祷」「潮祭」「浦祈祷」などの呼称で、春先の3月(旧暦2月)ないし7月(旧暦6月)前後、東紀州では1月15日(小正月)の時季に行われている。

おおよそ漁業協同組合が主催しており、漁業関係者が深く関わり、大漁祈願や海難者や魚族供養を目的とし、湾内で神聖視される地先の岩礁(磯根)に幣東が立てられ、船上で祈祷が行われる。また、総じて禅宗寺院(曹洞宗・臨済宗)が祭祀を担っており、その多くが真言宗から転宗した来歴であることが特徴として挙げられる。

熊野灘沿岸においては、古くはジゲ(地下)の予祝儀礼として藻魚貝類の繁茂を祈願する習わ しに、真言・天台系の修験僧によって仏教的要素が付加され、海中への「散米」から「経石」の 沈下に変容し、仏教的な作善行為としての「石経」に派生したことが考えられる。

本報告では三重県尾鷲市須賀利町で、毎年1月15日に正月行事として行われる「須賀利の石経」を事例として、「石経」と海難者や魚族の供養について若干の考察を試みる。

#### 《参考文献》

岩田準一 1939 『志摩の蜑女:アチックミューゼアム彙報』40 アチックミューゼアム 岩田準一 1970 『鳥羽志摩の民俗:志摩人の生活事典』鳥羽志摩文化研究会 上村角兵衛 1955 「石経落」『郷土志摩』第13号 志摩郷土会 鈴木敏夫 1969 『志摩民俗』(上・下) 三重県郷土資料刊行会 牧田茂 1938「三重縣北牟婁郡須賀利村語彙」『方言』第8巻・第1号 春陽堂

## 中国河南省洛陽市西店村における「背装」について

## 邢 璐 (國學院大學大学院文学研究科)

本発表では、中国河南省洛陽市嵩県旧県鎮西店村に伝承されている「社火」(シャカ、SheHuo)の一種といえる「背装」(ハイソウ、BeiZhuang)と呼ばれている行事について、現時点でどのように行われているのか、その具体的な内容について報告することを目的とする。

「社火」というのは、その表記からいえば大地と火の祭りということになり、中国では広範囲に見ることができる。春節、元宵節、端午節などの伝統的な祝日だけでなく、現在では文化イベントにも行われており、行事の意味内容が拡大しているといえる。その内容は、老若男女が化粧したり、仮面をつけたりして仮装し、彩旗隊と銅鑼太鼓チャルメラ隊の銅鑼や太鼓の演奏に合わせて行列しながら踊って歩くもので、その意味は名称の通り、大地と火の神を祭り、疫病や災いを祓うとともに、五穀豊穣と祥瑞幸福を祈るのが目的であるといわれている。

こうした「社火」行事のなかでは、仮面をつけての踊りだけでなく、高足(高跷 GaoQiao)、旱船、紙馬、ヤンコ踊り(ヤンガー)、龍舞などがある。さらに広場では、囃子の中に芝居を演じる地社火、三輪車に乗って演じる車社火、馬に乗って武器で戦う馬社火、血のような道具をよく使って芝居を演じる血社火など地域より独特な社火も見られる。

西店村の「背装」は、以上のような「社火」の一つといわれていて、これは「火神爺」の信仰を持っている。この信仰が「社火」に通じるのであるが、「背装」の内容は戯曲の形式をもつ仮面仮装が雑技と融合しているのが特徴で、囃子の中を行列して動く。戯曲の形式をもつというのは、その動きによって民間伝説及び歴史物語を演ずるということである。清時代に起源すると伝えられ、中国内では、2011 年 10 月には洛陽市非物質文化遺産(無形文化財)に登録、2015 年 9 月には河南省非物質文化遺産に登録されているが、各地の「背装」についての比較研究や現在に至るまでのさまざまな変遷についての研究は今後の課題となっている。

「背装」は、役者は二人で組みになり、この一組を「一垛」(イドー)という。その姿は、上部、中間部と下部の三つの部分に分かれている。上の役者は「上装」といわれ、これは1歳の幼児から7歳までの男女の子供が担う。戲曲の生、旦の化粧をする。下の役者は「下装人物」と言われ、厳格に訓練され、優れた男女の大人が担う。戲曲の生、旦、浄、末、醜の化粧をする。中間部は「中節」と言われ、暗鉄骨組み、泥人形、上絵と切り紙などで作られた道具であり、上装人物の胴体と下装人物の肩または腰を巧みにしっかりと繋ぐ。中節は対象物語に関する建築、樹、花、鳥と動物などの造型に作る。上・中・下部が一体となって演技を行うのであり、その演技は上装人物が喜び、怒り、哀れ、笑いの表情をし、袖と腕を振る。また、活垛の上装人物が足を上げたり、眺望したり、旋転したりする。また、一垛以外には、一人の役者が装飾された黄羅傘を持ち、一垛の行列の後ろに随いながら、傘を転がす。背装行列は、太鼓、銅鑼、釵(ちゃあ)など民俗楽器の演奏の中に進み、0と8のように動く。

西店村には、現在、11組の一垛があり、各一垛は二つの物語あるので、22の物語が伝えられており、発表では以上の現状について報告する。

# Jグルー<sup>1</sup>

# 中国における中元節の研究 一河北省霸州市勝芳鎮の中元祭りを中心に—

## 武 欣夢(國學院大學大学院生)

陰暦7月15日は、中国の「中元節」である。清明節、寒衣節とあわせて鬼の三大祭りとも呼ばれている。今回では中国河北省霸州市勝芳鎮の現地調査を踏まえて、勝芳の中元祭りを紹介する。近年、勝芳鎮は積極的に民俗文化を発掘し保護していて、2009年、勝芳鎮は河北省第一陣の民族伝統祝日の保護模範地と命名された。2012年、勝芳川灯籠習俗は河北省第四陣の無形文化遺産保護名簿に登録された。

勝芳は九河の下流の地に位置しているので、歴史上よく上流から漂ってきた無名の死体がある。人は陽、魂は陰、陸は陽、水は陰。水中は神秘で暗く、伝説の幽冥地獄を思わせ、幽霊はそこで沈んでしまう。そのため、旧暦の7月15日にはこれらの彷徨う魂のために水陸の二つの道場を行うことになる。勝芳鎮では、昼間は陸上道場をし、主に鎮内の各民間宗教による打醮が行われ、現存する打醮は南北2か所があり、それぞれ観音堂と五道会によって組織されている。この二つの民間宗教は現地で数百年の歴史もある。

観音堂は元朝から勝芳にある観音信仰のお寺である。朝8時からこのお寺に所属するコンサートは2時間の北派焰口を演唱する。北派焰口は器楽演奏に優れていて、笙、管、どらは主要な楽器である。声が高らかで、質素で覚えにくく、忘れやすい。

五道会も勝芳に存在する五、六百年の民間宗教であり、五道大将軍を信奉し、鎮の北部に位置する。観音堂と違って彼らは午後と夜に道場をする。夜8時ごろ五道会で斎醮を行う。それも道場全体の活動の重点であり、彼らはこの打醮のために準備したお供え物、文表などは7月14日にすでに用意されていた。その中で一番素晴らしいのは五道会の弟子の気功ショーである。一番大切なのは会衆の中で何人かの工夫を凝らした弟子がガラスを食べたり、お線香を飲んだりすることである。打醮全過程は夜11時ごろまで続く。

川灯籠は普通、土台の上に灯明やろうそくを置き、中元節の夜に川の中に流し、そのまま漂わせる。川灯籠流しの目的は、水中に落とす落水魂と他の彷徨っている魂を救うことである。川灯篭流しは一般的に7月14日から始まるが、一番にぎやかなのは7月15日の夜である。この日は夕方から中亭川に川灯籠流しをする舟があり、三千個ぐらいの川灯籠を流した。

実は1949年の前に鎮内の河道内にも川灯籠が流れていた。当時は鎮内にある東大寺、薬王廟、火神廟などの寺院にお坊さんが住んでいた。また観音会、混元会などの民間会社でもヨガの焰口も教えられた。毎年、これらの廟や会社から主催者を選び、勝芳鎮内の主河道に川灯籠を流すように組織した。1949年以降、何らかの理由で、勝芳の中元祭りは一時的になくなった。1980年代の初めに、政府の各種民間信仰に対する回復の黙認により、勝芳の中元祭りも回復した。

# 死人を操る呪術 ―中国湖南省ミャオ族の「趕屍」説話をめぐって―

## 李 軒羽 (関西学院大学大学院)

中国湖南省西部(以下、「湘西」と略す)には、清朝(もしくはそれ以前からの可能性もある)以降に形成され展開されてきた「趕屍(かんし)」に関する伝承が存在する。趕屍とは、死体 (=屍)を駆り立てる (=趕) ことであり、異郷で客死した人の遺体を故郷へ搬送する方法として、呪術で死者を歩かせるのがその内容であると広く信じられている。地域の男性シャーマン「老司(ろうし)」が趕屍業務を担うのが一般的な状況であるが、道教の道士が担う場合もあるとよくいわれる。なお、「趕屍」は「移霊(いれい)」、死者は「喜神(きじん)」と呼ばれる場合もある。本発表では、過去から現在まで、歴史的に展開されてきた「趕屍」に関する表象について論じる。

程屍に関する記述は、清朝・中華民国時代の稗史や随筆・紀行文に見られ、またそれらでは、 程屍がミャオ族と結びづけて語られていることが多い。清朝末期の文人徐珂は、稗史『清稗類 鈔』では「送屍術」(趕屍の別名)に関するいくつかの世間話を採録し、しかも「歴史人物によ る目撃談」という表現形式を用いることで、話の信憑性を強調しようとした。中華民国時代に は、作家沈従文と政治家郭則澐も、エッセイ集『湘行散記』と志怪小説『洞霊小志』において、 自分が聞き取った趕屍の話をそれぞれ紹介した。

このほか、趕屍と同様に、清朝以来の志怪小説には「僵屍(キョンシー)」という死体妖怪の話も散見される。硬直した身体で跳ねる僵屍の姿は、湘西地域のシャーマンによって操られる死者を連想させやすい。この理由から、一部の先行研究では、僵屍説話の流行と趕屍伝承との関係について指摘がなされている(劉 2008; 呉 1993)。ただし、具体的な因果関係はいまだに不明である。

20世紀半ば以来、趕屍の目撃談はだんだん消えていった。一方で、この時期には、香港の映画界において、「僵屍」や「趕屍」をタイトルに起用したホラー作品の大量生産が始まっている。1980年代以降、これらの作品が中国本土に流入し、本土においても湘西の呪術伝承を題材にした文芸・出版のブームが起こり、「少数民族風ホラー(もしくはファンタジー)」を名乗った数多くの大衆小説が現れている。2000年代に入り、大規模な観光開発が行われるとともに、湘西の「伝統文化」として舞台化が図られた趕屍には、グルメ、民族衣装、建築などとともに、地域の特徴を引き出す役割が与えられた。

「趕屍」は、単なる呪術伝承から「魅力湘西」という文化的資源へと姿を変えて、さらには観 光ブランドとしての価値まで付与されるに至っている。

## 【参考文献】

劉天賜, 2008, 『僵屍與吸血鬼』三聯書店(香港)有限公司. 呉昊, 1993, 『香港電影民俗学』次文化有限公司.

# Jグルー<sup>1</sup>

#### 台湾原住民セデック族の「文面」文化に関する考察

#### 李 干(神奈川大学大学院)

台湾原住民セデック(Seediq・賽德克)族とは、「出草」(首狩り)と「文面」(顔面の入れ墨、他に「紋面」も使われていた)を行い、数千年にわたって台湾中央山脈の中部を中心として暮らしてきた原住民族である。過去の研究は、セデック族をタイヤル族の一部(支族・亜族・言語系統)として、タイヤル族研究に位置づけられてしまった。2008年にセデック族は台湾政府により14番目の台湾原住民族として認定されたことによって、セデック族の文化に関する研究は、大きな価値をもつようになってきた。台湾原住民の中では純粋な「文面」文化をもっている民族は、タイヤル族、セデック族とタロコ族だけとなり、「文面」民族と総称される。

「文面」はセデック族にとって、一人前になってきたという成人の証と民族識別のような重要な社会機能をもち、生命礼儀とアイデンティティーに深く関わり、重要な役割を果たしてきた。過去、セデック族男性の顎の「文面」を彫る条件は「出草」である。すなわち、人の首を切ると彫ることが許されていた。顎の「文面」のないセデック族男性は社会地位が低く、無能であるとみなされている。一方、女性の頬に「文面」を彫るには、紡織に熟練していなければならない。他に、男女を問わず、6~8歳の頃に額に1条、または数条の「文面」を彫る習慣が存在していた。

日本統治時代の1913年に「文面」の風習が禁止され、「文面」の技術は伝わらなくなってしまった。よって、「文面」における社会機能が大きく影響され、セデック族人のアイデンティティーの揺らぎが生じた。2020年の時点には、古典的な「文面」を持つ老人はただ1人しかいなく、老人が減る一方で、セデック族では伝統的な方法と異なる現代的な手段で、「文面」文化を復興させようという動きが始まった。しかし、これはごく近年のことで、1945年の政権転移から21世紀初期までこのような風潮が見られなかった。そして、このような現代的な「文面」に対して、族群から容認する声がある一方、「文面」のない中年者と年長者から、批判の声も上がった。

本研究では、台湾南投県仁愛郷で暮らす西部セデック族の古典的な「文面」文化を中心に、その条件、起源伝説、施行の流れ、タブー、器具、男女の紋様に関して考察を試みた。各語群、またはタイヤル族、タルコ族の「文面」紋様との比較も行った。そして、「文面」文化の復興の趨勢、現状及び復興の過程における問題、特にセデック族人への聞き取り調査を通じて彼ら自身は「文面」文化をどうのように取り扱うことを指摘した。

# 2010年以降における沖縄のハジチ 文化復興とは何か

#### 山本 芳美(都留文科大学)

本発表では、2010年以降の沖縄のハジチ、タトゥーをめぐる状況について取り上げる。発表者は、1992年から95年ごろまで、奄美本島と沖縄諸島で消失期とされていたハジチについての調査を実施し、修士論文を書いた経験がある。その後は、しばらく台湾のタイヤル、プユマ、パイワンの各民族調査・研究に従事した。その後25年を経て、発表者は2019年10月から1か月間、沖縄県立博物館・美術館にて「沖縄のハジチ、台湾原住民族のタトゥー 歴史と今」展を株式会社、Nanseiの主催で開催する機会を得た。

実は、80年代後半から90年代半ばまで、沖縄の各自治体が実施したハジチ女性の調査報告書計17冊の刊行がなされ、総計2140名の女性たちが協力した。これは、世界的にみて最大規模のイレズミの調査である。それ以外も1930年代から調査に基づく著作や写真集が刊行されている。2010年代に入ってからは少なくとも2回の写真展があったものの、本展のような歴史面を取り上げた展覧会はなかった。そのこともあって、累計入場者数8000名を超す反響があった。ほぼ忘れられていたハジチの存在を展覧会に絡めて報じる県内新聞での報道が続く一方で、この展示会をとらえて「ハジチの文化復興」が起こっているとの記事も現れた(ケロッピー前田2020ほか)。

しかし、結論から言えば、沖縄のハジチの現況を文化復興とまで言い切れるかどうかは疑問である。本発表では、2010年以降に新たに入れた女性へのインタビュー、文様の工芸品への利用、施術のあり方、などを多角的に検討し、イレズミが復興しつつある台湾や他地域の状況と対照させてハジチを巡る現状を検討、報告したい。文化復興というよりも、ハジチをめぐる現状がトランスカルチャー的な状況に移行しつつある可能性も指摘したい。

#### 参考文献:

ケロッピー前田 2020『縄文時代にタトゥーはあったのか』国書刊行会 山本芳美 1993「南島イレズミ論」(明治大学大学院政治経済学研究科提出修士論文)

> 2000「イレズミの近代史: 日本、台湾、沖縄、アイヌにおけるイレズミ禁止政策」 (昭和女子大学大学院生活機構研究科提出博士論文)

2005『イレズミの世界』河出書房新社

2013「台湾原住民族」と「日本人」のイレズミとその記憶――イレズミへの賞賛と 規制をめぐって」都留文科大学比較文化学科編『せめぎあう記憶』柏書房

謝辞:本研究は、科研費番号 20H04583 「イレズミ・タトゥーにおけるトランスカルチャー性の比較研究」(2020 年 $\sim$ 21 年)、18H04202 「顔・身体表現から検討するトランスカルチャー下の装飾美」(2018 年 $\sim$ 19 年)により実施しました。

また、企画展につきましても、多くの人々の協力とクラウドファンディングにより企画展を実現できました。

#### 霊能が開く時 一奄美大島一

#### 福 寛美(法政大学沖縄文化研究所)

円聖修氏は奄美大島出身で、幼少時から頭痛、幻視など南西諸島でいうサーダカ(霊能高い)な資質を持っていた。彼はユタガミとして成巫し、現在、東京在住だが、ユタガミ、タロット占い師、ヒーラーとして活躍している。2019年10月には、2018年に円氏を親ユタとして成巫した子神の成巫1年の祝いの儀式があった。また早朝の儀式の後、円氏は「霊能力開発ツアー」を行った。奄美大島の北部の七つのユタガミの聖域を拝みながら回る、というものである。

円氏によると、「霊能力は一人で修業しても向上しない」、「霊能の高い人達と行動を共にしていると、能力がスパークする」とのことである。円氏がフェイス・ブックでツアーの参加者を募ったところ、熊本在住のスピリチュアル関係の仕事をする四十代の二人の女性、沖縄在住の三十代のバーテンダーの男性、和歌山在住の三十代の女性、などが応募した。子神の儀式、そして霊能力開発ツアーでもある七か所参りに、筆者も同行した。その際、最後の七か所目で和歌山の女性が神霊に憑依された。この事象は、まさに霊能が開いた、といえる。その経過を報告する。

- ○早朝の子神の成巫1年目の祝いの儀式
- ・円聖修氏の兄の居酒屋のユタガミの祭壇前で「今日の儀式がうまくいくように」と祈る。
- ・子神の海の聖域に車で移動し、海辺で祈り、昨年拾った三個の石を海に返し、新たに三個の石を拾い直す。
- ・子神の川の聖域に車で移動し、川辺で祈り、昨年拾った三個の石を川に返し、新たに三個の石を拾い直す。
  - ○七か所参り(霊能力開発ツアー)

円氏は次の七か所が北部では最も神高い、と認識しているため、そこを回った。

- ①阿麻弥姑(あまみこ)神社 ②アマンデー (食事) ③蒲生神社 ④笠利崎 (安木屋場海岸の大岩) ⑤今井権現 (トイレ休憩) ⑥平行盛神社 ⑦平有盛神社
- ④の笠利崎の灯台のところに上がる前、円氏は「ススキを二、三本取って東ねて手に持って下さい。ススキは神様が上から入ってくる導きになる」と述べた。笠利崎で円氏が太鼓を叩きながら神歌を歌った時、子神はすぐに踊り出したが、他の参加者の中にもススキを振ったり、ススキを持つ手を上に掲げたりする動きが見られるようになった。

和歌山の女性 P さんは安木屋場の海岸の大岩あたりから、「ススキを持つ手が自然に回って止まらない」と言う。乗車してしばらくしたら回らなくなるが、各聖域でそれを繰り返した。そして⑦の平有盛神社の奥のノロの墓の前で、「気分が悪い」と言っていたが、急に痙攣したようになり、立っていられなくなった。円氏が P さんの背後の霊的存在に語り掛け、その名を言わせようとしたが、言わなかった。円氏は「あなたは七か所のどこかの神様か」と問い掛けたら、P さんは首を横に振った。「それではこの方にゆかりのある神様で、この方に後を継いでほしいのか」と尋ねたら、頷いた。円氏は語らない霊的存在を返し、P さんを起こした。P さんは自分に憑依した霊的存在を「たぶん、おばあさんだと思う」と述べた。P さんもまた神霊を依り憑かせる資質が充分にある。おそらく本人もそれを自覚し、思う所があって奄美に来たのだろう。

# **亅グループ**

#### 薩摩の石敢當の中国伝来の可能性 一倭寇や唐人町を中心に一

#### 蒋 明超(神奈川大学大学院生)

今までの研究では、薩摩の石敢當は中国から琉球王国に伝わってから、琉球王国から伝来したと考えている。確かに地理的な視点から見れば、中国と比べ、薩摩が琉球により近い。歴史的な視点から見ても、薩摩の琉球侵攻があり、鹿児島にも琉球館が設置されていた。でも、薩摩の石敢當の琉球伝来説は必ずしも正しいとは言い切れない。なぜなら、薩摩の琉球侵攻以前から、中国人の勢力が既に薩摩地域で活躍していた。本論文では、歴史民俗の視点から、倭寇と唐人町に分けて、薩摩の石敢當の中国伝来の可能性を論じている。

倭寇は前期倭寇や後期倭寇に分けられる。前期倭寇は主に朝鮮半島から中国大陸華北沿岸地区に行動していた。前期倭寇の中には多くの日本人がいたが、朝鮮の賤民層の人も多く参加していた。ただし、中国人出身の前期倭寇の記述がないため、前期倭寇による石敢當伝来の可能性が低い。一方、後期倭寇は主に中国東南沿海地区を中心に活動していた。そして、後期倭寇の主体メンバーは中国人であった。彼らの根拠地は中国浙江省沿海部や、九州の西部・南部に集中した。後期倭寇の活動地域であった江蘇、浙江、福建、広東など中国東南沿海地方は、まさに中国の一般的な石敢當(泰山の字がない)が盛んだった地域である。こう考えると、石敢當は後期倭寇を通して薩摩に伝来の可能性も高いと考えている。ただ、薩摩にはその時期の石敢當の実物がないため、推測しかできない。

中世から近世にかけて、都城・東串良・高山・国分・市来・山川・阿久根など、薩摩各地に唐人町ができた。唐人町のほか、志布志・内ノ浦・高須・敷根・鹿児島・京泊などは唐人居住地として挙げられている。筆者は薩摩にある古い石敢當の建造年が一番前の10基を取り出し、南九州にある古い石敢當と唐人関係地区の分布図を作成した。結果は、そのほとんどが唐人町、唐人居住地や唐人活動地区に、あるいはその近くに分布されている。ほかには、都城唐人町や山川唐人町の所在地にも、年号がない古い石敢當が見つかった。これらの唐人たちの影響で、石敢當が薩摩に伝わってきたと考える。ほかには、中国に渡来した日本人の影響で、石敢當が薩摩に伝来した可能性もあると考える。その伝来時期は、戦国時代から江戸初期に遡る。琉球侵攻や琉球館が設置された以後、薩摩の石敢當の中国伝来は続けていたほか、その琉球伝来の可能性も出てきた。

書籍の記録から、江戸時代には薩摩以外の九州地区にも、多くの石敢當が存在していたことがわかる。現代では、大分県にあるのは二度もなくされ、残った拓本で再建した臼杵の石敢當しかない。熊本県や旧薩摩領地以外の宮崎県域にも石敢當の存在が確認できない。なぜ薩摩だけには、多数の石敢當が存続されたのか。今後の課題にしたい。

# **亅**グループ

# 近代稲作文化の創出一朝鮮米を中心に一

#### 李 玟宰(韓国・韓国学中央研究院)

本研究は、1890年から1940年までの間に、「朝鮮米」という商品が日本列島の近代稲作文化のなかへ進入する過程、その過程で獲得された位置、そしてその消費形態について、民俗学の視点から調査・分析を試みるものである。

稲作文化は柳田国男以後、多くの研究者にとって、日本列島の文化を説明する強力なツールであった。しかし、1970年代以後、稲作文化論に対する批判的視点が提示されてきた。それらは、コメ以外のイモや雑穀など、他の栽培作物の存在とその文化に光をあてるものや、稲作伝来以前に形成された文化の存在を強調するものであった。稲作中心主義であれ、それへの批判的修正であれ、稲作文化論をめぐる論議が存在し、その論議を通して、日本列島の農耕と食文化と、各種の年中行事、儀礼、衣食住などの民俗との関係が説明されてきたといえる。

一方、これまでの稲作文化論に関する議論や解釈は、文化の持続性や、その本質が前提とされるあまり、近代以降の大きな変化に対する注意を怠ってきた側面がある。特に、近代の稲作文化が帯びることになったハイブリッドな性格についての考察はなく、その巨大な背景である帝国主義についても考慮することはなかった。本研究では、先行研究を批判的に検討しつつ、日本列島の稲作文化は、近代以降、大きく急速な変化を経たことを前提とし、その変化について、朝鮮米を中心に調査・分析を行う。

柳田国男は『明治大正史世相篇』において、明治・大正期に日本列島の食生活に起こった重要な変化として、白米消費が急激に増加したことを指摘している。近代の多くの資料によって確認できる正確な観察であり、米消費の増加は、近代稲作文化の一つの特徴といえる。そして、米消費の増加は、日本列島内部の米の生産量の増加によるものであると同時に、日本列島の外からの安定的な米の輸入・移入が可能であったゆえの変化でもある。輸入・移入した米のうち、朝鮮半島で生産さされた朝鮮米は、質・量ともに、もっとも重要な位置を占めるものであった。

ただし、朝鮮米という一つの商品が、日本列島の近代稲作文化へ進入・定着し、日本の文化・社会のなかでさまざまな機能と象徴性を獲得する過程は、「自然」な経済原理によるものではなく、まさに人為的な政策によるものであった。19世紀末以降、帝国日本と植民地政府相互の食糧政策・農業政策の展開には、朝鮮米の販売拡張への欲望が作用している。そこには、日本列島の人々に共有される、コメに特別な意味を付与する文化的コンテクストが介在し、それが白米消費への強い欲求、朝鮮米を含む「外米」を吸収する要因として作用したものである。朝鮮米は、商品化を通して、日本列島の近代稲作文化の一部分になったということができる。

# トグループ

#### 口承文藝研究についてドイツ民俗学と比較して気付いたこと ヘルマン・バウジンガー『口承文藝の理論』の翻訳を機に

#### 河野 真(比較民俗学会)

このほどへルマン・バウジンガーの口承文藝論を翻訳・上梓した(名古屋:あるむ 2020)。そこから見える民俗研究をめぐる日本とドイツの比較は発表で多少触れるが、訳書の概要がすでにその材料になるだろう。本文・訳注・訳者解説を併せると 600 頁とかなり厚く、理論書でもあるため高額になるのは避けられなかった(¥9,000+税)。Hermann Bausinger, Formender "Volkspoesie" が元のタイトルで、1968年に初版、1980年に改版である。原題の直訳「《民のうたごころ》の諸形式」は訳書ではサブタイトルとした。刊行以来、本書はドイツ民俗学とゲルマニスティク(ドイツ語学・文学研究:日本の国文学研究にあたる)では基本書とされてきた。その特徴は、視点と体系性にある。本文は四章から成る。第1章「基本問題の歴史とその理解に向けて」は口承文藝をめぐる学史の推移と問題点を5節に分けて検討している。第2章「決まり文句と言葉遊び」では、挨拶の言い回しや幼児をあやす歌や数え歌などから、諺・成句、さらに格言・銘文を経てウィットに至る。第3章「語り物の諸形式」はシュヴァンク(笑話)、メルヒェン、伝説、聖者伝、逸話と例話、及び区分の跨ぎを検討する「境界と越境」から成る。第4章「劇行事と音楽行事の諸形式」は、演藝と歌謡に分かれる。前者は劇要素をもつ民俗行事と民衆劇で、一部では大衆演劇や野外劇運動も扱われる。後者は民謡が基本であるが、民衆のあいだの歌謡習俗という点で演劇のなかの人気曲や流行歌や労働運動歌も視野に入る。

一般の動向では、メルヒェン(昔話)が話題にされることが格段に多く、諺や謎々などの研究は稀で貴重である。それに徴しても、お祝いやお悔やみの文言、座右銘・墓碑・トイレの落書きまで広く網をかけて原理的に考察した理論書は画期的であった。事実、本書が口承文藝研究の概説書として一般化するとともに、民俗学をも併せてドイツの関係分野の様相は大きく変わった。

基本は視点の取り方で、訳書ではサブタイトルにした原題「《民のうたごころ》の諸形式」がそれを簡潔に言い表している。さまざまな種類を併せた《口承文藝》であるが、バウジンガーはその枠組みが、ある時点で考案されたものであると押さえることから説き始める。《民のうたごころ》の現れとしての《口承文藝》とは、《発明された概念》であると言う。ずっと存在していた島が発見されたというようなものではなく、枠組み自体が近代が本格化する時点で《考え出された》ものであることを指摘する。発明された枠組みのなかで視野に入ったという構図で口承文藝を見直したために、ほぼすべてがこれまで考えられてきたのとは異なった見え方になる。

方法論の見直しであるが、それにあたっては多数の先行研究が検証されるなど理論性の勝ったものであるため、訳者として橋渡しを試みた。かなり詳しく訳注をほどこしたのに加えて、著者の理論形成の背景や新知見の要点を説明した。その「訳者解説」は(翻訳書としては異例な長さの)60 頁にもなり、見ようによればドイツ民俗学とその歴史に関する簡便な概説になるだろう。またバウジンガーが民俗学のために提唱した幾つかの基本概念を思想史のなかに位置付けた。特にアドルノなど社会哲学におけるフランクフルト学派の思想をバウジンガーがどう工夫して民俗学に導入したかについて訳者なりの見解を示した。決して日本の口承文藝研究との差異と言うわけではないが、民俗学は現代思想の一角を占めることが伝わればと願っている。

#### 現代伝説研究の課題 -国際現代伝説学会の動向を中心に -

#### 山下 茉莉花(関西学院大学大学院)

本発表では、1988年に設立された ISCLR(国際現代伝説学会)の設立から現在までを中心とした 国際的な現代伝説研究の動向を検討した上で、日本の現代伝説研究の課題と可能性について論じ る。

イギリスの民俗学者であった Paul Smith は、1980 年に当時所属していた FLS(イギリス民俗学会)に対して、「現代の」伝説を取り上げた研究会議の開催を提案した。しかし当時の FLS 内では、この新しい形態の伝説に対する関心はあっても、本格的な取り組みへの明確な賛同は得られなかった。そこで Smith は、自ら現代伝説の研究会議を立ち上げようと考え、世界各国から賛同者を募った。このときのメンバーには、同じくイギリスの民俗学者である Gillian Bennett や、当時アメリカで都市伝説に関するベストセラーを出した Jan Harold Brunvand などがいる。そして 1982年7月、イギリスの Sheffield 大学で第1回目の国際的な現代伝説研究セミナーが開催された。このときの集まりが、後の ISCLR 設立(1988)に繋がる。

設立後すぐの ISCLR では、「現代伝説」の学術的位置づけを体系的に問う議論が多く交わされた。そして、1990 年代では「現代伝説」の定義についての議論とともに、世界各国の現代伝説について事例研究が進められていった。その多くは、現代伝説を取り巻く様々な社会/文化的背景を読み解く「コンテクスト分析」である。この流れは、現在まで引き継がれている。

現在は、現代伝説が発生/伝播する場がインターネット上に大きく移動している。それに伴い、インターネット上の現代伝説と実際の社会状況の相関関係に注目した研究が多く見られるようになった。ISCLRのメンバーである Andrea Kitta は、感染症に関する現代伝説の研究者である。彼女は、インターネットを介して広く伝播した語りに見られる、地域ごとのバリエーションを分析した。そして、これにより地域ごとの感染症に対する認識の違いがわかり、それぞれに適した治療法を考えることが可能であると論じた。このようなインターネット上の現代伝説と実際の社会との関係について分析した例として、他にも Robert Glenn Howard のヴァナキュラー・ウェブ(日常的で非制度的なオンライン上のネットワークのこと)の研究などを挙げることができる。

現代では、インターネットが社会に深く組み込まれることで、現実世界とインターネット上の世界との関係が相互浸透的なものとなってきている。このことは、現代伝説をめぐる状況についてもあてはまる。したがって、現代伝説研究においてもこれに対応した方法による研究が求められるようになっている。これからの現代伝説研究は、ヴァナキュラーウェブの研究にさらなる可能性を見ることができる。具体的には、SNS上でつながったオンラインコミュニティの研究が考えられる。コミュニティ形成の具体的な事例として、#(ハッシュタグ)や、オンラインでのオープンチャットがある。このコミュニティで扱われる課題は、政治・宗教・文化的なものなど多岐にわたるものと想定される。膨大な情報に埋もれてしまう個人の語りこそ、現実の社会を映し出す鏡であり、分析することに大きな意義がある。ヴァナキュラー・ウェブの研究により、個人を取り巻く社会の状況をより明確に把握するための理解が進むことだろう。

# K グルー。

#### 昔話の鬼婆と山姥

#### 津金 澪乃(國學院大學大学院)

「三枚のお札」と呼ばれる昔話に登場する鬼婆と山姥と、謡曲「黒塚」に登場する鬼女と謡曲 「山姥」に登場する山姥とを比較して、対応関係があることを論じる。

『日本昔話通観』を参考に原典を確認しながら、昔話「三枚のお札」の類話を計 488 事例収集した。収集した事例について、鬼婆と山姥という構成要素に着目した分類と分析を試みた。鬼婆の性格が強い事例では、盆花と亡者、子供を喰う、という 2 つの点が注目された。柳田國男は『先祖の話』の中で、子の無い老婆を罵る「柿の葉めが」という言葉に注目した。鬼婆のイメージの背景には、子の無い老婆への差別視とその裏返しの恐怖感が想定される。一方、山姥の性格が強い事例では、老婆が山の領域を主張する点が注目された。柳田は『遠野物語』、『山人外伝資料』、『山人考』などの中で、平地の文化とは異なる山の異文化の存在に注目した。山姥のイメージの背景には、柳田が日本の歴史の中に構想した、先住民の末裔である山人の存在が想定される。そして、柳田は『遠野物語』の中で、ヤマハハに追いかけられた娘が3度の難を逃れながら逃げるという話を紹介している。この話は、昔話「三枚のお札」と類似しているが、主要な要素の一部が欠けている。以上のことから、基本的な構成として以下の3つのタイプを設定した。

A タイプ [寺・小僧・山・花採り (盆・彼岸)・ 鬼婆 ・便所・逃走 (三枚のお札)] B タイプ [寺・小僧・山・栗拾い ( □ )・ 山姥 ・便所・逃走 (三枚のお札)] C タイプ [□・ 娘 ・山・ □ ( □ )・ヤマハハ・ □ ・逃走 (柴・萱・梢)]

昔話「三枚のお札」の3つのタイプが並行して伝承されているという状態から、これらは伝承の中での変遷の段階差をあらわすものと考えられる。素朴な形でヤマハハが登場している C タイプが古いかたちで、山姥と、寺や便所、お札の要素が加わった B タイプが新しいかたち、そして山姥に替わって鬼婆が登場する A タイプがさらに新しいかたちであると考えられる。

そして、中世芸能の謡曲にも、昔話の「三枚のお札」とよく似た内容が伝わっていることが注目される。野原や山中で日が暮れて困っているところに女が登場するという点で、謡曲「黒塚」と「山姥」は、昔話「三枚のお札」と類似している。謡曲「黒塚」では、鬼女が「里の女」として登場し、「長き命のつれなさ」を象徴する糸繰りをする。最後に、鬼女は山伏に祈り伏せられる。一方、謡曲「山姥」では、山姥が「山の女」として登場し、領域の主張を象徴する「山巡り」をする。最後に、山姥はどこへともなく去って行く。謡曲「黒塚」の鬼女のイメージと昔話のAタイプの鬼婆のイメージ、謡曲「山姥」の山姥のイメージと昔話のBタイプの山姥のイメージは、類似しているといえる。昔話「三枚のお札」のAタイプとBタイプと、謡曲「黒塚」と「山姥」とは、対応している。

昔話「三枚のお札」の語りの伝承の変遷と、謡曲「黒塚」と「山姥」の背景には、「山人」と「里人」の遭遇と緊張関係、その現実の歴史記憶の反映と、心象世界の反映があるものと推定される。柳田國男が注目した、山人と山の異文化の存在を背景に想定することで、昔話「三枚のお札」と、謡曲「黒塚」と「山姥」との、対応関係を読み解くことができるといえる。

#### 都市化したムラの調査方法 一民俗学は現代社会で何を調査するか―

#### 福澤 昭司(長野県民俗の会)

岩本通弥は、従来の調査方法によっていては、民俗学は遠からず行き詰まることを、随分前に指摘した。岩本は都市とムラとを対比させ、「民俗とはムラのような同質的とされるような社会では「一定の共同体の人間関係を律する行動様式」であったから、それを「習俗語彙項目羅列式」に並べることによっても、一応そのムラ人=「常民」の生活は記述された。しかしここで問題となるのは、都市の人間にもこの論理があてはまるかどうかということである。」(岩本通弥「都市における民衆生活誌序説 「サラリーマンの民俗学」の可能性ー」『史誌』 8 1977 年 太田区史編さん室)と、都市の民俗の把握を問題とした。社会的規範が弱い都市の多様な社会を、キー・インフォーマントを調査するだけでは理解することはできないというのである。 5 0 年近く以前の指摘だが、それは今や都市に限らず都市化が進んだ地方農村の民俗を把握するにも、同様の問題を指摘できる。総務省労働力調査によれば、1951 年の農林漁業就業者は全就業者の 46%を占めていたのだが、2019 年にはわずか 3%にまで落ち込んでいる。つまり、これまで民俗学が主たる情報提供者として想定した第一次産業の従事者は、実に 1 0 0 人に 3 人しかいない。今や、どこで民俗調査をしても都市の民俗を調査するつもりでやらないと成果は上がらないのである。

民俗を限られた空間の中で伝達継承される有機的に関連し合った暮らしの総体だとすれば、そうした民俗事象を育む地域社会を「伝承母体」と設定することができる。伝承母体は福田アジオが提唱した概念だが(福田アジオ『日本村落の民俗的構造』 6 頁 弘文堂 1962年)、後には「伝承母胎」とも表記され、民俗を育む唯一無二の存在のように思われている。しかし、提唱者の福田自身は「伝承母体は一つではない」と述べているのである。それは、多数の伝承母体が重層化して民俗を形成しているのだと言っているのに等しいだろう。

都市民俗の方法論を早くから牽引してきた倉石忠彦は伝承母体に代えて、桜田勝徳が唱えた「民俗継承体」という概念を取り上げ、都市の民俗を定義した。倉石によれば、「都市における民俗継承体としての集団を考えることができるとすれば、それは地域にかかわるというより、むしろそれぞれがかかわる機能的な集団といってよいであろう」という。伝承母体が一定地域に限定されるとするならば、民俗継承体はそれぞれがかかわる機能によって限定されているというのである。

一方、島村恭則は「ヴァナキュラー」という概念を提示して、現代民俗を把握しようとしている。 島村によれば、ヴァナキュラーとは民俗のことであり、「何らかの社会的コンテクストを共有する人々 の一人としての個人の生世界において、生み出され、生きられる経験・知識・表現でとくに、啓蒙主 義的合理性では必ずしも割り切ることのできない、あるいは覇権主義や普遍主義、主流的・中心的思 考とは相いれないものだ」(島村恭則『民俗学を生きる』 202頁 晃洋書房 2020年)という。こ れを倉石の概念を用いて言い換えるならば、民俗とは何らかの社会的コンテクストを共有する民俗継 承体に属する人々の、反主流的な今を生きる感覚や感情だといってよいだろう。

こうした民俗観に基づき、松本市近郊のいわゆる農村で暮らす男性の、長距離トラックドライバーという機能集団に属する暮らしと、同じ男性の地域社会の消防団という機能集団に属する暮らしとを述べ、現代社会を民俗調査する方法について考えてみたい。

# トグループ

#### SNS、オンラインツールを用いた民俗学の可能性 一現代における「小さい問題の登録」をめぐって一

#### 加藤 秀雄(成城大学民俗学研究所)

1935年に発刊された『民間伝承』の第1巻1号の冒頭には、民俗学的な問題への取り組み方をめぐって、以下のような文章が掲載されている。

勿論問題は或一員が壟断すべきもので無く、又決して独占し得るものでも無いが、今後同志が互い に少しづつ知り合って、あの人ならばやや容易に結果が得られるだらうということになると、切れ 切れの材料はいつとなくそこに集ってきて、自然の知識交易が営まれるかも知れない。少なくとも 自分はそういう愉快な場合のみ想像して居る。

これは柳田国男の筆によるもので、タイトルは「小さい問題の登録」となっている。その後、『民間伝承』は、全国各地の民俗学に関心を持つ人々が、さまざまな情報を持ち寄り、それを共有するプラットフォームとして機能することになった。寄稿される文章の種類は、「1. 会員通信(200 字以内)/2、学会消息(300 字以内)/3、論説(2000 字以内)」となっているが、「共同課題」の欄や「編集後記」で、特定のテーマについて情報提供を呼びかけ、次号でそれを掲載することも試みられている。このように当時の民俗学における情報の集約と共有において、雑誌というメディアが果たした役割はきわめて大きなものだったといえるが1、本発表では、ここでいう「小さい問題の登録」、あるいは「情報の集約と共有」の現代的なあり方について考察を行ってみたい。

本発表で主に取り扱うのは、SNS、および Google map などのオンラインツールをいかにしてその「集約と共有」に活用することができるのかという問題である。近年は、インターネット上で流通する「ネットロア」や「デジタルフォークロア」に関する研究が、トレヴァー・ブランクや伊藤龍平などによって精力的に進められており、今後も世界規模で取り組まれるテーマになると考えられる。しかし民俗調査のツール、あるいは情報共有のプラットフォームとして、インターネットにどのような可能性があるのかという点については、現在のところほとんど議論されていない。

これは、ブロードバンドが一般家庭に普及しはじめるのが 2001 年以降のことであり、ネット上で大容量のデータ処理が可能になったのが、つい最近のことであるということとも関わっていると思われるが、日本民俗学会がこのようなかたちで開催されるようになったことからも理解されるように、その技術の進化には目を見張るものがある。そして、このような状況を念頭に置いて、インターネットをいかにして民俗学の研究に活用できるかという点を議論することは、今後の斯学の方法論の発展に寄与するものとなるだろう。

私見では、民俗学は他の隣接諸学と比較してもインターネットと相性が良く、是非ともこれを活用すべき学問分野だと考えている。本発表では、この点を具体的に示した上で、どのような活用方法があるのか、いくつかの事例をとおして考えてみたい。

<sup>1</sup> そもそも民俗学という学問分野が成立する条件を整えたのは、近代における印刷技術の普及と郵便制度の発達である。このことは folklore という言葉を作った W・J・トムズが、雑誌『ノーツ・アンド・クエリーズ』の編集者であったことからも窺い知ることができる。詳しくは志村真幸『南方熊楠のロンドン-国際学術雑誌と近代科学の進歩』(慶應義塾大学出版会、2020年)を参照されたい。

#### 柳田國男「クロポトキンとツルゲーネフ」について

由谷 裕哉(小松短期大学名誉教授・金沢大学客員研究員)

本発表は、かなり話題となったと思われる絓秀実・木藤亮太『アナキスト民俗学 尊皇の官僚・柳田国男』(筑摩書房,2017)を批判的に検討する。とくに、同書 p.96 における「柳田国男はクロポトキン主義者であった。それは単に一時的なものではない。若い決定的な時期に導入され、生涯をとおしてのことだったと思われる」なる言明の反証を目指す。その方途の第一歩として本発表では、同書同頁において柳田がクロポトキンに言及している文章二つのうち初めのものとされていた「クロポトキンとツルゲーネフ」(1909)の読解を試みる。

そこから、クロポトキン (1842-1921) の著作のうち同書で言及されているもの (『麺麭の略取』 『田園・工場・仕事場』『相互扶助論』ほか) と柳田テキストとの照応を検討する方向に進みたいと考えていた。ところが、武漢ウイルスのせいで本年会がオンライン開催となり、発表動画の締切がオフラインで年会が催されていた例年に比べて一箇月以上前倒しになったこと、また発表時間も何故か 15 分と短縮されたことにより、当初目指していた絓・木藤本に対する本格的な検討が不可能となった。そこで、発表内容を以下 2 点に絞ることにした。

第一。 絓・木藤本で触れられていない、同論の初出形態が置かれた脈絡。 同論の初出は、"KY 生" 名義で文芸雑誌『文章世界』の"新緑号"(第 4 巻第 6 号, 博文館, 1909 年 5 月 1 日刊)pp.195-200 に"雑録"として掲載された。 同号の構成と柳田稿の位置を動画像で示し、考察を加える。

第二。「クロポトキンとツルゲーネフ」の後半 3 分の 2 ほど(新全集 23, p.635 下段第 3 段落以降)は、クロポトキンの 1899 年刊自伝 *Memoirs of a Revolutionist* の Chapter 6 "Western Europe" のVIの概略である(なお、前半は同書の G.Brandes による Introduction の換骨奪胎)。そこで、柳田の"雑録"とクロポトキン自伝当該箇所との照合を行う。この照合は絓・木藤本でも若干なされていたが(主として同書 pp.134-143)、かなり恣意的であるように思われる。

発表者は、クロポトキン自伝の上記英語版について柳田が概要をした箇所で、誤訳を含んで概要が不充分であったり、意味が曖昧となったりが、およそ2箇所あると考えている。パリでツルゲーネフがフローベールらと見た劇の粗筋をクロポトキンに語る箇所、および文末近くのバザーロフ(『父と子』の主人公)がドン・キホーテ型かハムレット型かの考察、である。

前者は、再婚した夫婦の夫が妻の連れ子の18歳の娘に接吻しようとした時に、その弟が叫び声をあげて止めた、という劇。再婚した時に妻の連れ子2人は赤子だったが、時が経って(for years)という所を、柳田は"結婚後四年間と云ふものは"と誤訳している。またこの夫について、クロポトキンが"This man was represented in the play as an excellent person"と記述しているのに対し、柳田は"其新夫と云ふのは当時売出した人物なんです"、とずれた訳をしている。

後者は、クロポトキンがツルゲーネフのハムレットとドン・キホーテに関する講演を要約した箇所。"...Yet, although Hamlet is a skeptic, and disbelieves in Good, he does not disbelieve in Evil. He hates it" これを柳田は、"然るにハムレットのは懐疑的で、神の存在を信じないと云つても、猶災害の存在だけは信ずる。信じて此を嫌ふ"、と good を god と間違えている他、good に対する evil を"災害"と訳している。つまり、善と悪との対比、という論旨が読み取れていない。《動画の URL; https://www.youtube.com/watch?v=VaNaOKPqitA》

# トグループ

#### オートモビリティと移動身体: 宮本常一にみるフィールドワークの〈速度〉と現実の知覚

#### 門田 岳久(立教大学)

フェザーストンらは自動車が可能にする移動性をオートモビリティと呼び、それは身体と機械、 道路や交通記号のハイブリッドな集合体であると述べた<sup>(1)</sup>。航空機や VR など超高速の移動手段 が拡大する中、車は既に時代遅れのデバイスかもしれないが、鉄道と並び人類史的に重要な大衆 的移動手段であったし、限定的とはいえ人間に自由な主体性を与える点でいまだ希有な存在であ る。加えて車は旅行者だけでなく、土地に張り付いて人々と共に生きる民俗学者にも多用される 手段であり、身体スケールでの現実の知覚の仕方を変容させることになった。

民俗学者の知覚や身体性に影響を及ぼすのは、インフラストラクチャー研究<sup>(2)</sup>において議論される道路や鉄道だけではない。また新たな世界を切り拓くと言う意味では徒歩も車も同等に見えるものの、自動車移動は速度や技術面で大きく異なり、人間にとっては環境や社会とのインターフェイスの再調整を迫られる。そこで本報告では、これまであまり問われなかった、自動車や速度がもたらす民俗学者の現実の知覚の変容を考える。事例として徒歩の民俗学者の代表例と言っても良い宮本常一の「移動身体」のありようと、彼の現実の知覚の仕方に着目し、フィールドワーカーの身体性と速度の関係を明らかにしていきたい。

野村が指摘するように徒歩は土地と直結する行為であり、全身体的知覚を介して他者の環境や生活を捉えようとする民俗学者にとって徒歩は基本的行動様式だった<sup>(3)</sup>。しかし鉄道や車による高速移動が近代の人々全般にもたらす視覚的・聴覚的な変容、そして土地から切り離され、抽象的かつ全体的に土地を捉えるようになるパノラマ的眺望<sup>(4)</sup>はフィールドワーカーにも浸透していく。なぜなら人間の身体とは自然や非人間を含み混む「社会」に開かれたものであるからで<sup>(5)</sup>、「社会」の変容に民俗学者も逃れることはできず、その身体性もまたオートモビリティの環境に連動するからである。以上の問題設定を元に、近代の社会環境に開かれた移動身体を検討するために、事例部分では「旅する巨人」と評される宮本常一による徒歩に関する記述やフィールド描写を検討する<sup>(6)</sup>。加えて、宮本が世間で思われている以上に自動車移動を行い、特にキャリア後年は「車窓の巨人」とも言うべきまなざしでフィールドを知覚していることを、主に佐渡で宮本が撮影した写真を読み解いていく。徒歩と車移動に関する現実知覚は、通常交わることのない、相反する移動身体の特性である<sup>(7)</sup>。しかし一個人においてそれらが奇妙に同居するのが宮本常一の特異性なのであり、その理由を検討することで報告の締めとしたい。

- (1) フェザーストン,M 他編 2010『自動車と移動の社会学』近森高明訳,法政大学出版局
- (2) 古川不可知 2020『「シェルパ」と道の人類学』亜紀書房
- (3) 野村典彦 2011『鉄道と旅する身体の近代』青弓社
- (4) シベルブシュ, W. 1982『鉄道旅行の歴史』加藤二郎訳, 法政大学出版局
- (5) 箭内匡 2018『イメージの人類学』せりか書房
- (6) 宮本常一 1987 『宮本常一著作集 29 旅にまなぶ』、2009 『私の日本地図 7 佐渡』未來社他
- (7) インゴルド, T. 2014 『ラインズ——線の文化史』工藤晋訳, 左右社

#### 日本民俗学会第72回年会 実行委員会

年会会長 鈴木岩弓

実行委員長 印南敏秀

実行副委員長 服部誠

事務局長 小早川道子

実行委員 阿南透 市川秀之 伊東久之 伊藤正英 伊藤良吉 及川祥平

大野麻子 大野啓 岡田照子 岡野翔 粕谷亜矢子 蒲池勢至 神谷幸夫 久保禎子 河野眞 小林弘昌 佐野賢治 蛸島直

田中青樹 西海賢二 野村史隆 長谷川洋一 畑純子 菱川晶子

日比野光敏 八木透

#### 日本民俗学会第72回年会研究発表要旨集

編集・発行 日本民俗学会第72回年会実行委員会

〒466-8666 愛知県名古屋市昭和区八事本町101-2 中京大学文学部歴史文化学科小早川道子研究室気付

日本民俗学会第72回年会実行委員会事務局

TEL:052-835-7111 (代表)

E-mail:minzokugaku72@gmail.com

発行日 2020年9月25日

表紙デザイン:長谷川洋一

くらしと地域の観点から見るテーマ別日本史。刊行開始!

# 郷土史大系 (全10巻)

阿部 猛・大石 学・小沢詠美子・竹内 誠・松永昌三・吉原健一郎 監修

宗教·教育· 芸能·地域文化

吉原健一郎・西海賢二・滝口正哉 編

■85 判 ■440 頁 ■定価(本体 15,000 円 + 税)(53576-1)

[内容] 宗教(古墳, 修験・山伏, 講, 伊勢参り, 隠れキリシタン) / 教育(藩校, 算額) / 芸能(能・狂言・謡曲, 相撲, 祭・神楽, 越後獅子, 華道) / 地域文化(遺跡保存, 句碑・歌碑・記念碑) / 他



阿部猛・落合功・谷本雅之・浅井良夫 編



# 情報文化

松永昌三·田村貞雄·栗田尚弥·浦井祥子 編

■B5 判 ■488 頁 ■定価(本体 16,000 円 + 税)(53577-8)

【内容】道/言葉と記録(言葉,記録,地名,人名・戸籍)/情報と メディア(新聞・雑誌・出版,ラジオ・テレビ・映像,通信,情報 工作,情報の保存と提供)/時刻と暦



■B5 判 ■488 頁 ■定価(本体 16,000 円 + 税) i53573-0)



■B5 判 ■432 頁 ■定価(本体 15,000 円 + 税)(53574-7)



ささまざまな生産業・流通業が、どのような土地で生まれ、 どのように発展していったのかを地域の事例で語る。

#### 【続刊予定】

領域の歴史と国際関係(上)・(下) /都市・村・家/観光・娯楽・スポーツ/環境/資料編

日本の農山漁村、町場、都市の生活の変遷を、フィールドデータの解析に基づき、あらたな民俗学の射程を示す。

### 講座 日本民俗学(全6巻)

【2020年10月刊行開始】

悟

能教

·地域文化

## 1方法と課題。

小川直之:新谷尚紀 編

A5 判 224 頁 予価(本体 3,600 円 + 税)(53581-5)

小川直之・新谷尚紀・関沢まゆみ・俵木

民俗学の歴史と方法論を整理し,民俗学の独自性と存在意義を問い直して今後の課題を提示する。

[内容]歴史(日本民俗学の成立)/方法(民俗伝承学と比較研究法,文献・図像・フィールドワーク,民具,民俗誌)/現在的課題(高度経済成長,自然環境,社会変容,移住者,学校教育)/社会貢献(博物館,文化財保護,地域活性化)

# 

シリーズ編集

# 2不安と祈願

新谷尚紀 編

A5 判 208 頁 予価(本体 3,300 円 + 税)(53582-2)

高度経済成長により大きく変貌した民俗信仰の変遷の実態を具体的な事例の蒐集をもとに追跡。 [内容]総論/生活のなかの神仏(家の神,他)/社寺と講(神社と氏子,他)/祈禱と神懸かり(巫女,他) /社会不安と信仰(流行神,他)

【続刊予定】 行事と祭礼/社会と儀礼/生産と消費/芸能と遊戯

**回朝倉書店** 

〒162-8707 東京都新宿区新小川町6-29 電話 営業部(03)3260-7631 FAX(03)3260-0180 http://www.asakura.co.jp

(ISBN)は 978-4-254- を省略

#### の酒と調味 日本人は、何を、何のために、どのように食べ 全6巻 ・雑穀と 海の魚と淡水藤井弘章編 日のごちそうなど、特別な力をもつ米の食に迫関沢まゆみ編(毎日の腹を満たすかて飯と、ハ 小川 直之・関沢まゆみ・藤井弘 であった、藤井弘章気 毎接に結びついか川直之編 水魚、魚 食川 ク島 ・常食の 日石 ジラ・イルカ食などから考察。こに広く浸透した魚食文化を、 本垣 甘 各2700円 0 |味の麻 $\epsilon \sqrt{}$ 0 た間 味悟 めあり方を三 米だけで の歴史と文化を世代より魅力的な の編 「食」 化味 や社会の 的背景ない で を探 章·石垣 示す。 7 内容案内』呈 きたかっ 泉を探り な嗜 描 11 あ 多様 く。好る ŋ 。 の …。 る。 方と る。レ

漢映 せた社会の仕! 醸造と流通、F 組酒食 み宴べ 、を明らかにする。 (**歴史文化**の様子などからアプローチ。 ^、たのか。米の支給方法や調理、

資料で紹介。アイヌの精神を伝える貴ヨマンテ」、道具や衣服、祈りなどの国立歴史民俗博物館監修・内田順子編英国人医師マンローの伝えた映像

伝えた映像

何神を伝える貴秀 祈りなどの母

**桑様** 

なコ

々な習

· クシを

クション。俗を映画・写%を送る儀式「

ク

マ 0

魂

暮らべ す 文化ライブラリー 食事を成り立た、消費量、酒の 7野0秋

る

吉野

00円 0 円著

2021年版

10月中旬 発売!

日記欄に全国各地の「お祭り」「年中行事」等を付載。 1100円

http://www.voshikawa-k.co.in/ 〒113-0033・東京都文京区本郷 7-2-8/電話 03-3813-9151 (価格は税別)

#### 前近代日本の 病気治療と呪術 小山聡子編

前近代では、病気の原因は神やモノノケ等、霊的なものに求められ、 その治療は宗教者の呪術に任されていた。

僧侶や陰陽師らの行った呪術による病気治療の実態とその全体像を、 古代から近世まで多角的に論じることで、それぞれの時代に生きた 人々の精神世界に迫る。

#### 【目次】

#### 第一部 東アジアの視点からの問い直し

中国古代の祭礼形成一呪術から祭祀へ・祭祀から儀礼へ 東アジアの視点から見る日本陰陽道の病気対策 清末以降の発病占の変容とその社会史的意義

#### 第二部 古代・中世の様相

俗学の枠に

沖縄· より子・

アイヌなど

を ・中込時 でも視野に でも視野に

代野に入と睦子・湯

入湯れた

各2

0 下

000円

(全2冊)

準の民俗大百科。||北た、従来の日本民川洋司・渡邊欣雄編

超える質量ともに最

『日本霊異記』所載の目盲説話をめぐって 神祇官卜部と病

平安時代におけるモノノケの表象と治病 日本中世における病・物気と陰陽道

#### 第三部 近世における展開

病気治療と神話・祈禱 江戸時代医学史からみた病気治療と運気論 忍術書に見る病気治療 神職者たちの憑霊譚



気治

療

3

►A 5 判・306頁/本体 8,000円

[2020年4月刊行]

#### 崇徳院怨霊の研究 [オンデマンド版]

山田雄司著

►A 5 判・318頁/本体 6,400円

怨霊・怪異・伊勢神宮

山田雄司著

温

►A 5 判・448頁/本体 7.000円

翁の生成 渡来文化と中世の神々 【オンデマンド版】

金賢旭著

►A 5 判・250頁/本体 5,000円

神楽と祭文の中世 変容する信仰のかたち

斎藤英喜•井上隆弘編

►A 5 判・390頁/本体 8,000円

猿楽と面 大和・近江および白山の周辺から

MIHO MUSEUM編/伊東史朗監修 ►B 5 判・402頁/本体 3, 200円

元三大師御籤本の研究 おみくじを読み解く

大野出著 【オンデマンド版】 ▶A 5 判・204頁/本体 4,000円

森と火の環境史 近世・近代日本の焼畑と植生 米家泰作著 ►A 5 判・384頁/本体 7,500円

記念植樹と日本近代 林学者本多静六の思想と事績 岡本貴久子著 ►A 5 判・568頁/本体 9,000円

ヴァナキュラー文化と現代社会

ウェルズ恵子編

►A 5 判・336頁/本体 6,000円

変容する聖地 ジョン・ブリーン編

►A 5 判・340頁/本体 2,800円

幽霊の歴史文化学

小山聡子•松本健太郎編

二松学舎大学学術叢書 ▶四六判・344頁/本体 2,500円

#### 思文閣出版

〒 605-0089 京都市東山区元町 355 https://www.shibunkaku.co.jp/

前

近

代

H

呈内容見本 **2**075 (533) 6860 F 075 (531) 0009 (表示価格は税別) 救済論のパラダイム転換を解明する。

台に、如来教、民間信仰、真宗教学を巻き込んだ

|身体||から「心」へ。| 九世紀初頭の名古屋を舞

四、五〇〇円+税

近世後期の救済論的転回

の時空間

和[著]

### 法 藏 館

# 評伝 J・G・フレイザー

蔵

館文庫

好評発売中!

その生涯と業績

ロバート・アッカーマン【著】、小松和彦【監修】、玉井 暲(監訳)

とも評された妻との結婚生活まで。未公開書簡や日記も満載。 研究一筋の風変わりな日常から、出版をめぐる人間模様、悪妻 英国ベストセラーの邦訳。 大著「金枝篇」で世界に衝撃を与えた人類学者の画期的評伝 上:下各一、七〇〇円+税

アニミズム時代

岩田慶治【著】、松本博之【解説】

文庫化。 発端の姿を描きだす。岩田アニミズム論の到達点を示す名著を アニミズムの根幹を自然と人間との直接的対応におきかえ、その

、二〇〇円+税

# 斎藤英喜(著) いざなぎ流 祭文と儀礼

仰研究の現在をアップデートする。 文・神楽、そして式王子の儀礼現場を解明。し、陰陽道、民俗 高知県旧物部村に伝わる民間信仰・いざなぎ流ー 一、五〇〇円+税 —。祭文·法

# 表示価格は全て税別です。 お買上15,000円以上送料無料

# 川島秀一[著] 父叉する文

# いかに民俗社会と関わってきたのか

考え歴史を生きる営みを紹歴史実践の現場から、歴史を

介。人間と歴史との関わりを考

知識と方法を伝える貴重な一え、日常に活かしていくための

えるための日本初の概説書! 冊。パブリック・ヒストリーを考

(本)と呼ばれるモノは

歴史学へ

の挑

ブリック・

京都市下京区正面烏丸東入 TEL 075-343-0458 FAX 075-371-0458 〒600-8153 http://www.hozokan.co.jp info@hozokan.co.jp 新刊メール配信中!

# 菅豊 ・北條勝貴 編

歴史」は、誰のものか

知の共鳴が創り上げた人文学の理想郷 アチック・ミューゼアム 渋沢敬三と

加藤幸治 [著]

な室町期の祇園祭に注目し、公武権力が京都に 中止や延期を何度も乗り越えた、史上最も盛大

室町一時代。

存した室町期独自の特徴を解明。

河内将芳[著]

、八〇〇円+税

長をはぐくむ共同空間を作り出した渋沢ら味と能力が調和・共鳴し合いながら互いの成味と能力が調和・共鳴し合いながら互いの成人文学本来のかたちを体現する、人びとの興 の営為・思想から、文化創造のあり方を探る。

3500 円 大石高典・近藤祉秋・池田光穂「編

の狩猟現場……。様々な角度からとらえた、 学から、文化人類学、民俗学、考古学、実際 ようにして関係を築いてたのか? 進化生物 最も身近なパートナーである犬と、人はどの 犬の目線で語られる、全く新しい人類史!

伊藤慎吾 [著] 南方熊楠と日本文学

7000円

筆・説話集、お伽草子や近世怪談などの資 のか? 熊楠が研究の基礎とした近世随 うな価値を見出し、学問に利用していった 人文学黎明期に、熊楠は日本文学にどのよ 料群を精査。貴重資料の翻刻も多数収録。

# 犬からみた人類史

〈自然〉の内と外 この世のキワ 山中由里子・山田仁史 [編] [アジア遊学23]

り、「自然」と「超自然」の境界領域、「この世」 東西の伝承・史料・民族資料・美術品に探 と「あの世」の心理的・物理的距離感、境界に 「驚異」と「怪異」の表象を、ユーラシア大陸の

立ち現れる身体・音・モノなどについて考察

3800円



3200円

WEBSITE=bensei.jp E-mail=info@bensei.jp 表示価 税別

の取材から浮かび上がる民俗ミに触れてきた人びとへの直接

社会を描き出す

のか。三陸地方を中心に、ホンヨ はどのような意味を持っていたして〈読む〉ことと〈書く〉こと

地域社会において、

〈本〉は、そ



(字と語り

3500円

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-2 TEL.03-5215-9021 FAX.03-5215-9025

4800 円

◆十月新刊

写真アルバム「昭和」、各地で発売中!

郡内

(山梨県)の昭和」

「松阪・多気の昭和」

「吹田

の昭和

豊明・日進・長久手・東郷の昭和」「五島列島の昭和

# 集

す。A5判・上製・720頁 まり描かれることのなかった、 とに恵みをもたらす植物との深い関わりがあった。これまであ 深い関わりの中で育まれた日本の暮らしと食。そこには季節ご 日本の暮らしに息づく植物とのかかわりとは。四季の自然との 植物と暮らしの関わりを描きだ 7500円

100

民採集

◆好評既刊

# れつつある今、人びとの心と暮らしにふくらみを与えた生き ものをめぐる体験と伝承がこれからの日本人の生き方に大き で豊かなかかわり・交感をくり広げてきた。その関係が失わ 先人たちは大型獣から小さな昆虫に至るまで生きものと多様 日本人が紡いできた生きものとの多様な関係とは。この国の

な示唆を与えてくれる。A5判・上製・650頁 6500円



弘前大学 人文社会科学部 編/羽渕一代 責任編集 札幌学院大学 北海道の魅力向上プロジェクト 編 2300円 2200円 川上隆史·木本浩一·西村大志·山中英理子 編著 四国大学 新あわ学研究所 編 愛媛大学・松山大学「えひめの価値共創プロジェクト」編 大学的 德 山口県立大学 国際文化学部 編/伊藤幸司 責任編集 大学的やまぐちガイド 大学的 広 大学的 愛 島ガイド 媛ガイド 島 ガイド (品切)

2300円

7-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町 3-1 TEL 075-502-7500 FAX 075-502-7501

長崎大学 多文化社会学部 編/木村直樹 責任編集 西南学院大学 国際文化学部 高倉洋彰・宮崎克則 編 2300円 2300円 2200円 2200円 2300円 2400円 ₹ 607-8494

2200円 昭和堂

郵便振替 01060-5-9347 \*価格税抜 http://www.showado-kyoto.jp

#### 水谷勇夫と舞踏 『蟲びらき』をひらく 越後谷卓司、 水谷 イズル

同志社大学 京都観学研究会 編

大学的 京

都ガイド(品切)

奈良女子大学 文学部なら学プロジェクト 編

良ガイド

和歌山大学 観光学部 監修/神田孝治・大浦由美・加藤久美 編

沖縄国際大学 宜野湾の会編

縄ガイド

鹿児島大学 法文学部 編 大学的 鹿児島 ガイド 熊本大学 文学部 編/松浦雄介 責任編集

山ガイド

滋賀県立大学 人間文化学部地域文化学科 編

好評

大学的 熊

**本** ガイド

賀ガイド

2200円

富山大学 地域づくり研究会 編

大学的 富

山ガイド

2400円

西高辻信宏・赤司善彦・高倉洋彰 編 大学的 福岡・太宰府 ガイド

崎 ガイド

愛知県立大学 歴史文化の会 編

大学的 愛

知ガイド

2300円

大学的 滋

静岡大学 人文社会科学部・地域創造学環 編

大学的 静

岡 ガイド

2300円

大学的 高

知ガイド

高知県立大学 文化学部 編

大学的 福岡・博多 ガイド

都留文科大学 編/加藤めぐみ 他責任編集

大学的富士山 ガイド 立教大学 観光学部 編 大学的 東

**京** ガイド

大学的 青

森 ガイド

大学的北

海道ガイド(品切)

·B5判 人間社発売 ・1,000円+税



諏訪を掘りおこし、日本の地下水脈にいたる名著、待望の復刊!

名古屋市天白区 井口 1丁目 1504

www.jurinsha.com

A4判 9,082~9,250円(本体)

まちの昔と今を写真で綴る「**今昔** 

関·美濃·郡上の昭和」「筑紫·太宰府

の昭和

の昭和

海南・有田・御坊・日高の昭和」「甲賀

呉・江田島の昭和」

「球磨・人吉の昭和」

|豊田市の今昔」「豊橋市の今昔」(僅少)

犬山・江南・大口・扶桑の今昔

市市の今昔」「岡崎市の今昔」

**宀部族研究会編「日本原初考」**| ミシャグジ祭政体の研究 諏訪信仰の発生と展開 古諏訪の祭祀と氏族 古代諏訪と

八〇〇円+税

八〇〇円+税

九〇〇円+税

今井野菊が語る「御左口神祭政の森」を特別収録-※復刊にあたり、各巻に古部族研究会による序文と

# 本大道芸事典

2020.07刊/B5判·580頁/22000円 大道芸の伝承家である著者の単独執筆による事典. 中近世の文献資料・絵画資料から, 近代の記録や 啖呵口上まで、隠語も含めて239項目. 挿絵600点.

## オトタチバナヒメ伝

2020.06刊/A5判·402頁/8400円 東京湾沿岸部を中心にみられるオトタチバナヒメ 伝説を、古事記・風土記などに記される弟橘媛入 水譚との両面から考察し、その全体像を把握する.

#### 近世の巡礼と 北川 央著 2020.04刊 A5判・298頁 大坂の庶民信仰

前著『近世金毘羅信仰の展開』に続き、西国巡礼 等の庶民の旅を、供養塔や名所図会等から描く.

# 奄美沖縄の霊魂観

2020.02刊/A5判·380頁/8000円 生と死の民俗論理 死と出生直後の霊魂の超自然 的な力、赤ん坊の霊魂の囲い込み、一身二霊魂観 等につき,これまでの研究を整理・分析する.

# 現代修験道の

天田顕徳著 2019.09刊 A5判·227頁 4800円

3800円

山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化 修験道の担い手の変容と、ツーリズムの現場から.

#### 金田久璋著 ニソの村と 2018. 11刊 A5判・418頁 若狭の民俗世界 9200円

祖霊信仰の聖地ニソの杜や、越前の田の神祭りや アイノコトなど、広く福井県の民俗世界を描く.

地方史研究協議会編 2019.05刊/A5判/2800円 地域資料としての保存と活用 学校で作成・授受・ 収集され保管され、地域住民のアイデンティティ を支え, その歴史・文化を辿る貴重な資料.(200頁)

# 神社合祀 再考

2020.07刊/A5判·190頁/2800円 日露戦後の神社合祀(神社整理)は「悪」なのか. 各地での事例をもとにその通念を相対化. 執筆: 由谷裕哉・柏木亨介・及川高・時枝務・畔上直樹

2020.03刊/A4判·184頁/12000円 近世中後期~近代の都市の臨時祭を祝う仮装文化 を中心に、練物や即興のパフォーマンス「俄」(に わか)を絵画史料や文献史料により紹介. カラ-96頁.

2019.12刊/A5判·490頁/11000円 茨城県霞ヶ浦周辺地域を中心に 1993年以来の調 査と、近世以降の資料、論考・コラムなどで、神 事としての古態を残す特色ある祭礼を記録・考察.

# 講中の民

2019.02刊/A5判·308頁/7400円 牡鹿半島における女性同士のつながり 巻市牡鹿地区に近世から続いた女性講集団(じょ こうちゅう)を調査し、その変容する姿を描く.

# おんなの身体

月経・産育・暮らし 月経名称とその意識の変遷 を歴史的に追い、現代の事例から考察。更にお産 を身体技法から読み解く. 地域の事例2編ほか.

関東の村の祭りと記録 村の鎮守祭祀であるオビ シャ行事. それを記録した「オニッキ」と呼ばれ る史料が、連綿と受け継がれてきた. (A5判)

2019.10刊 / A 5判 · 658頁 / 25800円 飯澤文夫編 郷土史研究雑誌目次総覧22 2018年に刊行された 地方史研究雑誌1591誌の目次を, 県別・雑誌ごと に収録. 連絡先・所蔵先等の他, 雑誌索引を付す.



〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4-25-6-103【価格は税別】 TEL:03-3326-3757 FAX:03-3326-6788 http://www.iwata-shoin.co.jp



篠島から日間賀島方面を望む

# 一般社団法人日本民俗学会